

# 墓 窪 遺 跡

発 掘 調 査 報 告 書

1 9 8 2

山 形 県  
山 形 県 教 育 委 員 会

はか  
墓 窪 遺 跡

発 掘 調 査 報 告 書

昭和57年3月

山形 県会  
山形県教育委員会

## 序

本報告書は、昭和57年度に実施した、県営ば場整備事業・井の下地区にかかる墓窪遺跡緊急発掘調査の結果をまとめたものであります。

発掘調査では、縄文時代前期や中期の住居跡をはじめ、多くの土器や石器などの遺物が発掘され、とくに北陸地方との文化交流の一端をしめす、貴重な資料を得ることができました。幾千年のかなたで、厳しい自然と融和一体となりながら、新しい文化を創造する先人の心豊かな、たくましい生活ぶりをしのばれる所であります。

近年、埋蔵文化財と農林事業とのかかわりは、増加の傾向にあります。本県の産業基盤である農林事業は、県民の生産基盤の整備や福祉の向上を目的とし、豊かな県土を目指して銳意進められておる所であります。一方、同事業は、数千年もの間土中に埋もれ続けてきた埋蔵文化財と直接的なかかわりを持つこととなりその間に数多くの困難な問題が生じております。

県教育委員会におきましては、生活文化の向上、地域環境の整備など、同じ立場から、これらの間の調整をはかり、今後とも埋蔵文化財の保護行政のため努力を続けてまいる所存であります。

最後ではありますが、本発掘調査にご協力をいただいた小国町教育委員会並びに関係各位に感謝を申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対するおおかたの理解の一助となれば幸いと存じます。

昭和57年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹 正治

## 例　　言

- 1 本報告書は、山形教育委員会が山形県農林水産部から委託を受け昭和56年に実施した、県営ほ場整備事業井の下地に係る墓窓遺跡の発掘調査の結果をまとめたものである。調査期間は、昭和56年4月27日から同年7月25日まで延63日間である。
- 2 調査にあたっては、小国町教育委員会・県農林水産部耕地二課・県置賜北部土地改良事務所・井の下土地改良区などの関係機関の協力を得た。記して感謝申し上げる。

- 3 調査体制は下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 佐々木洋治（主任調査員） 佐藤正俊（現場主任） 名和達朗（調査員）

阿部明彦 長橋 至 中嶋 寛 渡辺 修（調査員）〔山形県教育庁文化課〕

事務局 事務局長 浜田 清明 〔山形県教育庁文化課長〕

事務局長補佐 萩野 和夫 〔山形県教育庁文化課長補佐〕

事務局員 設楽周一朗 田内糸子 〔山形県教育庁文化課〕

- 4 挿図縮尺は、全体図・遺構図などは1/300・1/60とし、遺物では土器拓影図½・石器実測図は½として、各挿図それぞれスケールを示した。

遺物の図版縮尺は、土器½・¼とし、石器では½を原則とした。

- 5 本文および挿図中の記号は、S T—住居跡・E L—炉跡・E P (P) —柱穴・E D—周溝・壁溝・E U—埋設土器・S K—土壤・S D—溝跡、またF—遺構覆土・Y—床面である。遺物では、R P—土器・土製品・S Q—石器・石製品を示す。

住居跡・炉跡・土壤・溝跡などは全体に一連番号を付け、柱穴・周溝は各挿図每一連の数字で示した。

- 6 本報告書の作成は、佐藤正俊・名和達朗が担当し、それぞれ執筆した。編集については渋谷孝雄・佐藤正俊があたり、佐々木洋治が総括したものである。

挿図・図版の作成にあたっては、佐藤義信・太田八重子・黒金佳子・高橋貴恵子・清野匡子・吉野映子・前田和子がこれを補助した。

## 目 次

I 遺跡の位置と環境	
1 立地と環境	1
2 周辺の遺跡	1
II 調査の経緯	
1 調査に至る経過	3
2 調査の経過	3
III 遺跡の概観	
1 調査の方法	5
2 遺跡の層序	5
3 遺構の分布	6
4 遺物の出土状況	6
IV 遺構と遺物	
1 遺構	7
(a) 住居跡	7
(b) 土 壤	29
(c) 溝 跡	30
2 遺物	34
(a) 土 器	34
(b) 一括土器	46
(c) 石 器	48
V ま と め	60

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置・分布図	1
第2図 遺跡層序図	5
第3図 遺跡全体図	7
第4図 A地区遺構配置図	8
第5図 1・2・7・11・32~35号住居跡	11
第6図 3・4号住居跡	6
第7図 5・6号住居跡	14
第8図 25~30号住居跡	17

第9図	49・50号住居跡	18
第10図	52～56号住居跡	21
第11図	59～62号住居跡	23
第12図	66～69号住居跡	25
第13図	70号住居跡	26
第14図	73号住居跡	28
第15図	各土壤平面図（1）	31
第16図	各土壤平面図（2）	33
第17図	1号住居跡出土土器	35
第18図	2・3・4・6・7号住居跡出土土器	37
第19図	25・26・28・32・33・51・52号住居跡	38
第20図	53～55・60～62号住居跡出土土器	39
第21図	66・69・70・73号住居跡出土土器	41
第22図	土壤内出土土器	43
第23図	包含層出土土器（1）	44
第24図	包含層出土土器（2）	45
第25図	石器実測図（1）	49
第26図	石器実測図（2）	51
第27図	石器実測図（3）	53

## 挿 図 目 次

図版1	遺跡遠景（東から）	遺跡近景（東から）
図版2	A地区遺構確認状況（南半部）	A地区遺構確認状況（北半部）
図版3	1・2・7・32・33号住居跡・38号土壤全景	7号住居跡全景
図版4	1号住居跡	E L31近接
図版5	E L31土層セクション	E L31埋設土器部土層セクション
図版6	1号住居跡内一括土器（R P332）出土状況	1・2号住居跡精査風景
図版7	3・4号住居跡・36・37号土壤全景	3号住居跡内一括土器出土状況
図版8	2・11号住居跡・38号土壤	2号住居跡精査風景
図版9	7・32・34号住居跡	32・34号住居跡
図版10	5・6号住居跡全景	25～30号住居跡全景
図版11	49・51号住居跡・60号土壤全景	49・51号住居跡近接

- 図版12 52~56号住居跡・57・58号土壤全景 53~55号住居跡近接
- 図版13 E L63全景 E L64
- 図版14 E L64土層セクション 53号住居跡内一括土器 (R P533) 出土状況
- 図版15 59~62号住居跡・65号土壤全景 59~62号住居跡近接
- 図版16 59・60・61号住居跡 61・62号住居跡近接
- 図版17 61号住居跡内一括土器 (R P538) 出土状況 A地区発掘調査風景
- 図版18 66~69号住居跡全景 66・69号住居跡
- 図版19 70号住居跡全景 70号住居跡
- 図版20 70号住居跡埋設土器出土状況 E L71
- 図版21 73号住居跡全景 73号住居跡
- 図版22 1号住居跡出土土器 (覆土) 1号住居跡出土土器 (床面)
- 図版23 2号住居跡出土土器 3・4・5号住居跡出土土器
- 図版24 7号住居跡出土土器 25・26・28・32・33号住居跡出土土器
- 図版25 51号住居跡出土土器 52号住居跡出土土器
- 図版26 53~55号住居跡出土土器 60号住居跡出土土器
- 図版27 61号住居跡出土土器 62号住居跡出土土器
- 図版28 66・69号住居跡出土土器 70号住居跡出土土器
- 図版29 73号住居跡出土土器 2・8・9・11号土壤出土土器
- 図版30 15・20・21・43号出土土器 包含層出土土器 (第I群土器)
- 図版31 包含層出土土器 (第II・III群土器) 一括土器 (1)
- 図版32 一括土器 (2)
- 図版33 石鎌・石錐・石匙
- 図版34 削器・搔器・篦状石器
- 図版35 磨製石斧・凹石・磨石他
- 図版36 石錘・砥石・石皿

## 付 表

- 表-1 周辺の遺跡群 ..... 2
- 表-2 墓塚遺跡発掘調査行程一覧 ..... 4
- 表-3 土壤一覧表 ..... 32
- 表-4 篦状石器計測表 ..... 55
- 表-5 石錐計測表 ..... 56

## 目 次

- 表-6 石錐計測表 ..... 56
- 表-7 石匙計測表 ..... 57
- 表-8 搔器・削器計測表 ..... 57
- 表-9 石槍計測表 ..... 57
- 表-10 磨製石斧他計測表 ..... 58

# I 遺跡の位置と環境

## 1 立地と環境

墓窓遺跡は、山形県の西南部、新潟県と接する山間の小国盆地にある。この盆地は、飯豊・朝日の両山地にはさまれて南北に開けた盆地で、中央部の谷底平野は北方の朝日岳から南流する荒川と、飯豊から発して西流する横川によって、5つの地形面をもつ河岸段丘から形成され、洪積段丘の平林面・横道面、沖積段丘の小国面・八木沢面・沖積低地面となっている。洪積中位段丘の平林面には、東山遺跡・平林遺跡があり、洪積低位段丘の横道面には、横道遺跡・鳥谷沢遺跡・岩井沢遺跡などの旧石器時代を中心とする遺跡が分布している。沖積段丘には、本遺跡をはじめとして、谷地遺跡・下野遺跡・団子山遺跡・蟹沢遺跡など縄文時代の前期から後期にかけての遺跡が多く分布している。(図版1)

本遺跡は、小国町大字増岡字墓窓178他に所在、横川の右岸に位置し、標高134m~136mを計る。遺跡は、沖積上位段丘の小国面西縁に立地し、全体的に東方から西方にかけて傾斜しており、西方で若干微高地状となっている。地目は、水田・畑地・鉄道用地・杉林くなっている。南西・北西側の背後地には、5ヶ所の勇水地が認められる。



第1図 遺跡位置・分布図

## 2 周辺の遺跡（第1図）

小国町には数多くの遺跡があり、「山形県遺跡地図」（昭和53年山形県教育委員会編）には67ヶ所の旧石器時代から歴史時代にかけての遺跡が明記されている。とくに、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡がほとんどで、その大半が小渡・団子山・増岡・横道地内などを中心とする旧北小国地域に遍在している。旧石器時代については、岩井沢遺跡・東山遺跡・横道遺跡や平林遺跡などの発掘調査がなされて、その中でも東山遺跡から出土したナイフ形石器は、旧石器時代の時代区分を指標とする東山型ナイフ文化圏として、知られているところであり、これら旧石器時代の遺跡相互関連と密接に結びつけられている。

縄文時代の遺跡は、60ヶ余りを数え、その大半が前期から中期にかけての遺跡であり、沖積段丘から冲積低地面にかけて分布している。今まで、朝霧遺跡・谷地遺跡・蟹沢遺跡・才頭遺跡・下野遺跡・団子山遺跡が発掘調査され、縄文時代中期・後期を主体とする時期である。谷地遺跡は、中期中葉の大木7b式～8b式期に相当する住居跡や土壌および配石構造が検出され、他に馬高式系の土器も範出している。下野遺跡では、大木9式～10式期の複式炉をもつ住居跡・土壌・集石遺構などが検出されている。蟹沢遺跡では、中期後葉から後期初期にかけての住居跡や土壌なども検出され、土器では、大木式系土器とともに、新潟県域を中心とする三十稻場式土器が多量に出土している。

これら遺跡の土器を比較すると、大木8b式までは馬高式系が共存し、大木9式から10式にかけてはその存在がみられず、館期初頭に新たに三十稻場式が流入することが特徴的であり、縄文時代中期中葉から後期初頭の集落跡の良好な資料が得られたと同時に、大木式系土器の編年を考える上で貴重な遺跡と考えられる。

表一 周辺の遺跡群（第1図）

番号	遺跡名	遺跡番号	所 在 地	立地(標高)	時 期 (他)
1	野 坪	1386	小国町大字字畔坪	段丘(142m)	旧石器時代・縄文時代・平安時代
2	湯 の 花	1378	大字湯の花	段丘(165m)	旧石器時代・縄文時代 (S48年調査)
3	鳥 谷 沢	1388	大字大字鳥谷沢	段丘(150)	旧石器時代・縄文時代
4	高 稲 場 A	1377	大字西字高稲場	段丘(140m)	縄文時代
5	鶴 分 新 壱		大字増岡字館分壹	段丘(136m)	縄文時代
6	大 下	1380	大字増岡字大下	段丘(138)	縄文時代(中期)
7	下 野	1381	大字増岡字下野	段丘(131m)	縄文時代(中期) (S55年調査)
8	田 子 山	1383	大字増岡字团子山	段丘(136m)	縄文時代(早・中・後期) (S55年調査)
9	才 頭	1382	大字増岡字才頭	段丘(130)	縄文時代(前・中期)
10	谷 地	1385	大字増岡字谷地	段丘(140)	縄文時代(中期) (S54年調査)
11	笠 又	1384	大字増岡字笠又	段丘(158m)	縄文時代
12	蟹 田 B	1394	大字若山字蟹田	段丘(144m)	縄文時代(中期)
13	館	1395	大字若山字館	段丘(145m)	縄文時代
14	女子 岡 平	1396	大字若山字好羅	段丘(146m)	旧石器時代・縄文時代(前・中期)
15	蟹 沢	1389	大字舟置字蟹沢	段丘(145m)	縄文時代(中～後期) (S54年調査)
16	舟渡堂の前	1390	大字舟渡字堂の前	段丘(148m)	縄文時代(中・後・晚期)

## II 調査の経緯

### 1 調査に至る経過

小国町の増岡地内は、小国盆地の中でも有数の水田地帯であり、埋蔵文化財もまた多く包蔵する地域であり、旧石器時代から縄文時代にかけての集落跡などが点在している。これらの地域が昭和54年から、井の下地区の県営は場整備事業として実施されることになり、県教育委員会は小国町教育委員会とともに、県農林水産部耕地第二課・置賜北部土地改良事務所・井の下土地改良区などの関係各機関と、埋蔵文化財の保護対策について協議を重ねたものである。その結果遺跡は、できるだけ現状のまま残すことを基本として、やむを得ず破壊されるものについては、記録保存による緊急発掘調査を実施することにしたものである。これまで、昭和54年には谷地遺跡・蟹沢遺跡・才頭遺跡など、昭和55年は下野遺跡・団子山遺跡などが県教育委員会や小国町教育委員会が主体となって、緊急発掘調査を進めてきた。その結果これらの遺跡が、縄文時代中期から後期にかけての集落跡であることが明らかになり、数々の貴重な資料を提供した。

今回の墓窓遺跡の緊急発掘調査は、この地域が昭和56年度に一連のほ場整備事業にかかるため、昭和55年10月に遺跡詳細分布調査を行ない、本遺跡の西側に隣接する大下遺跡の試掘調査の際、墓窓遺跡・館分遺跡の2遺跡が新規に発見され、ほ場整備事業に直接かかることになったため、関係各機関と協議を進めて緊急発掘調査を実施することになった。なお、大下遺跡については、ほ場整備事業の関連工事としての道路部分について立合調査を実施することになり、館分遺跡については当初より事業地区外となっている。

### 2 調査の経過

今回の発掘調査は、昭和56年4月27日（月）から7月25日（土）まで延63日間に亘って、ほ場整備事業区域に限って実施し、鉄道用地をはさんで杉林の遺跡西側端については調査区外となっている。調査経過の概要是、第一段階から第四段階に分け順次進め、第一段階では遺跡の概要を知るため粗掘作業を中心にして精査区域の確認を行なう。第二段階は重機を使用して精査区域を拡張し、面整理作業により遺構を確認する。第三・四段階は実際の遺構などの精査・検出を行ない、記録によって保存するものである。作業経過の詳細については、発掘調査行程表（表-2）を参照のこと。

なお、大下遺跡の立合調査は、昭和56年8月25日（木）に実施して、縄文時代中期の土壤1基を検出、その他大木10式を主とする土器片や石器などが出土する。

表—2 基层痕迹先据调查一管

### III 遺跡の概観

#### 1 調査の方法

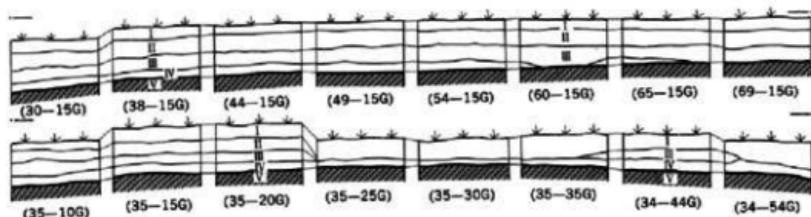
今回の緊急発掘調査は、墓窓遺跡の中央地区から東側地区にあたるほ場整備事業区域の東西約220m・南北約100mで、発掘対象面積が約22000m<sup>2</sup>について実施し、とくに遺構や遺物が密集する区域（精査区域）を重点に発掘調査を進め、遺跡中央付近をA地区、遺跡の東南部をB地区とした。A地区精査面積は約1650m<sup>2</sup>で、B地区精査面積が540m<sup>2</sup>であり、A・B地区を合せて約2190m<sup>2</sup>の精査面積を調査したものである。

発掘調査は、事業区域内全体にグリッドを設定し、グリッドの基線をほ場整備実施杭に基点を設けて40—10グリッドとして、グリッド基線のY軸方向はN—26°—Wを計り、3×3mを1単位とするグリッドを設定する。遺跡の南西端寄りから3×15mあるいは3×12mのトレンチ法を併用して、遺跡の東側・北側に向けて粗掘作業を開始し、遺跡の南側中央付近と南東側に大きく拡張し、精査区域A・B地区を設定し調査を実施した。（第3図）

調査の進行状況（表-2）は、第一段階で井桁状にトレンチを入れ遺構・遺物の密集地を確認する粗掘作業を実施し、第二段階は確認した密集地を拡張し平面精査による遺構の確認を行う、第三段階では確認した遺構の精査・検出作業を、第四段階で遺構・遺物全体の記録を中心とする作業である。（図版2）

#### 2 遺跡の層序

本遺跡は、横川によって開析された沖積河川段丘上の微高地に立地し、全体として南西側・南側・南東側が高く、北側・北西側で低くなり若干傾斜している。北側の大下遺跡と南側の館分遺跡をはさんで、ほぼ東西に走る小谷戸がみられ低地となっている。今回の調査区では、35—15・40—15グリッド付近が高く、北西側の6—54や南側の35—8グリッドでは小河川の小段丘面に位置し緩傾斜地となっている。65—9グリッドから70—9グリッド



第2図 遺跡層序図

ドにかけては、南側・東側にかけ若干傾斜している。除外地区の杉林では平坦となり、遺跡西側端では急傾斜となり、低位な面になっている。

基本的な遺跡の層序は、次の5層に大きく分けられる。(第2図)

- |            |                                              |
|------------|----------------------------------------------|
| I 層 黒色土    | 水田・畑地による耕作土。A地以北では厚く堆積している。厚さは15~36cmである。    |
| II 層 黒褐色土  | 粘質微砂土で炭化粒子を含み堅くなっている。厚さは25~32cmである。遺物包含層である。 |
| III 層 暗褐色土 | 微砂質土で若干の炭化粒子が含まれる。厚さは19~36cmである。遺構確認面である。    |
| IV 層 褐色土   | 粘質微砂土で堅くなっている。V層の漸位層である。                     |
| V 層 黄褐色土   | ローム質で砂質に富む(地山)。                              |

## 2 遺構の分布

本遺跡で検出した遺構については、竪穴住居跡35・土壤32・溝跡1である。A地区では、縄文時代中期前葉および後葉の住居跡・土壤・溝跡が、B地区では縄文時代前期前葉の大形住居跡1軒が検出されている。

A地区的遺構の分布状態は、縄文時代中期前葉の66・67・68・69号住居跡がそれぞれ重複し、69号住居跡の南側に接して70号住居跡があり、調査区の東側平坦地に位置している。中期中葉の時期は、調査区の中央寄りから西側にかけての平坦地・若干の傾斜地にある。南西寄りの若干の傾斜地には、1・2・3・4・7・11・32・33・34・35号住居跡が重複して密集しており、34号住居跡東側には5・6号住居跡が隣接する。西側では、25・26・27・28・29・30号住居跡が重複している。北側および中央部の平坦地には、49・51号住居跡や52・53・54・55・56号住居跡、59・60・61・62号住居跡がそれぞれ重複している。土壤は、住居跡群の内側にめぐるように位置し、36・37・38・40号土壤など断面形が袋状を示すものについては、一部住居跡と重複している。溝跡は、南北に走るように検出されている。

## 3 遺物の出土状況

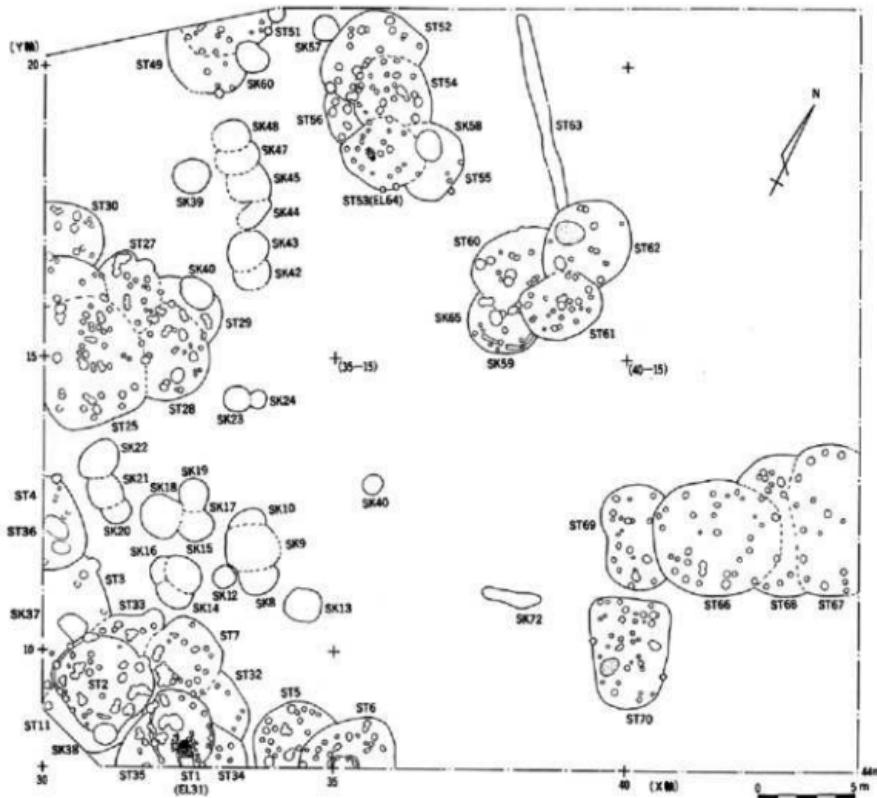
今回の調査で出土した遺物は、整理箱に約94箱を数え、それらは縄文式土器(前期前葉および中期前葉から後葉にかけて)・石器・石製品などに分けられる。遺物のほとんどはII層の遺物包含層と住居跡内や土壤覆土から出土している。

土器：縄文時代前期・整理箱12箱 縄文時代中期・整理箱24箱

石器：石器・剝片などを合せて整理箱58箱、石製垂飾品1・石核14などがある。



第3図 遺跡全体図



第4図 遺構配図

打製石器—石鎚（28）・石槍（2）・石匙（19）・範状石器（31）・搔器（10）・削器（8）・石筆（14） 磨製石器—磨製石斧（5） 碾石器—凹石（36）・磨石（40）・石皿（10）・砥石（5）・石錐（2） 有孔石製品（1）・線刻繙（1）

遺物の出土状況は、包含層ではA地区の南西側・北側中央部にかけ、B地区の北側半部で最も多く出し、遺跡の中央部から北西側にかけては遺物の出土が希薄になり、遺構の分布状態と一致している。とくに縄文時代前期の土器は、A地区の北側からB地区にかけて多く出土している。遺構内では、全体的に少なく覆土上層に出土する程度で、床面からの出土は少なくなっている。土壤も同様である。

## IV 遺構と遺物

### 1 遺 物

#### (a) 住居跡

##### 1・2・7・11・32～35号住居跡（第5図 図版3～6・8・9）

A地区の南西側の緩傾斜地、31～34・9～11グリッド内に位置し、北側で14号土壌と西側で3号住居跡、東側で5号住居跡など重複あるいは隣接し、その他37・38号土壌とも重複している。遺存状態は、南西側と南側で水田耕作のため一部覆土上層まで擾乱を受けている。他はほぼ良好である。確認面はIII層中からIV層上面にかけて、住居跡の構築は1・2号住居跡の床面はV層上部を若干掘り込んでいる。

1号住居跡 平面形は西側がゆがむ不整の長楕円形を呈している。大きさは長軸が推定4.50m・短軸3.30mを計り、確認面から床面までの深さは35～41cmである。壁は緩るやかに掘り込まれ、現存高は21～28cmである。壁溝E D 1は東側の一部と西側でみられ幅13～18cm・深さ9～14cmで断面がV字状になっている。床面の状態は、炉跡（E L31）付近で凹凸がみられ堅くなり、若干高くなっている他は軟弱で平坦である。柱穴は37本で、E P 3・7・14が主柱穴で、E P 4・8～13は支柱穴である。その他E L31周辺にあるピットは、炉に付属する柱穴と考えられる。

炉跡（E L31）は、住居跡の南東寄りに位置する複式炉である。炉の南側袖石が二次的に抜き取られている。長さ推定132cm、最大幅89cmで床面からの深さは18～32cmであり、長軸方向N-32°-Wを計る。構築の状態は、燃焼部で底面から上部にかけ径4～28cmの小中疊を用い、底面には25～34cmの平偏な疊を使用している。埋設土器部では、5～13cmの疊を配しており、焼土なども二次的に堆積している。埋設土器は深鉢形の土器で底部が欠損して、正位の状態である。

2号住居跡 平面形は北側でやや膨らむ下整の隅丸方形を呈する。大きさは長径4.81m・短径4.52mで、確認面からの深さは31～38cmである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、現存高12～17cmである。壁溝（E D53）は、西側で確認され幅9～16cm・深さ10～15cmで断面がU字形になる。床面の状態は、住居跡の中央部がやや窪むようになっているが、壁付近では平坦になっている。全体的に軟弱である。柱穴は17本検出されて、E P 27・32・40・44で径32～42cm・深さ25～41cmである。支柱・壁柱穴はE P 22・23・26・28・29・30・31・37・38・48・49・50・51であり、径25～39cm・深さ12～31cmを計る。なお、炉跡については検出されない。

- 7号住居跡 東側で32号住居跡・南側では1号住居跡・西側で2・33号住居跡とそれぞれ重複している。平面形は、東側でやや脇らみをもつ限丸方形を呈している。大きさは長径推定4.30m・短径3.92mを計る。確認面からの深さは24~28cmである。壁は、北側と東側・西側の一部のみ現存し、ほぼ垂直に掘り込まれており、高さは21~24cmである。壁溝および周溝は確認されていない。床面の状態は、住居跡の中央部から東側にかけてやや堅くなっている他は軟弱であり、ほぼ平坦である。柱穴は15本が検出され、主柱穴はE P 60・63・69・70で径32~41cm・深さ24~32cmを計る。その他の柱穴が壁・支柱穴であり径12~30cm、深さ11~24cmである。炉跡は検出されなかった。

11号住居跡 北側で2号住居跡・東側で35号住居跡それに38号土壙と重複している。平面形は、大半が2号住居跡によって切られているために、平面形は推定であるが、南東側が一部残っているため、隅丸方形を呈するものとみられる。壁は現存するものでは、緩やかに掘り込まれており、高さ12~15cmである。壁溝・周溝は検出されていない。床面は、全体的に軟弱である。柱穴は5本検出されており、E P 24・36・45・46・54で径12~32cm・深さ11~21cmを計る。炉跡は検出されなかった。

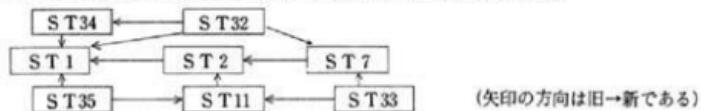
32号住居跡 南側で1・34号住居跡と西側で7号住居跡とそれぞれ重複しており、1・7号住居跡を精査・検出する際に確認されたものである。平面形は不明である。壁は緩やかに掘り込まれており、現残高は11~17cmである。壁溝・周溝は確認されない。床面の状態は、全体に軟弱で平坦である。柱穴は5本検出され、E P 72~76でいずれも支柱穴であり、大きさは径15~24cm・深さ11~22cmである。炉跡は検出されない。

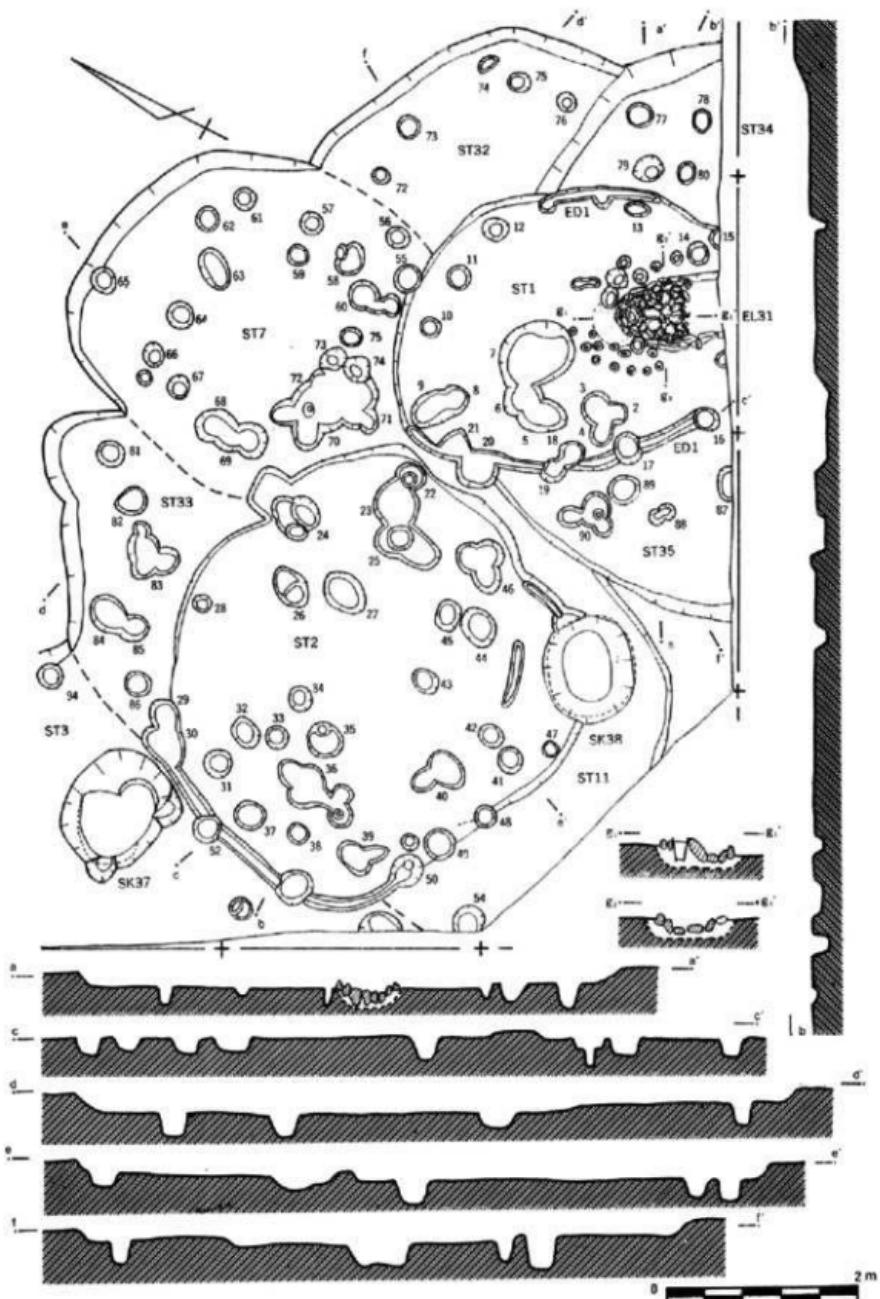
33号住居跡 東側で7号住居跡・南側で2号住居跡・西側で3号住居跡とそれぞれ重複している。2・3号住居跡を精査・検出する際に確認された。平面形は不明である。壁溝・周溝は検出されない。床面の状態は、全体的に軟弱である。壁は緩やかに掘り込まれておらず、現存高21~32cmである。柱穴は5本検出され、E P 81~86である。

34号住居跡 平面形は不明である。1号住居跡を精査・検出する際に確認する。壁は緩やかに掘り込まれ、現残高23~35cmである。床面は軟弱である。柱穴はE P 77~80である。

35号住居跡 1号住居跡を精査・検出する様に確認された。平面形は不明である。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。床面は軟弱である。柱穴はE P 87~90である。

以上のように、これら住居跡の時期は出土した土器（第16~18図 図版31）からみて縄文時代中期大木10式期の所産である。新旧関係は下記の図式となる。





第5図 1・2・7・11・32~35号住居跡

### 3・4号住居跡（第6図 図版7）

A地区の南西側の緩傾斜地、31・32-11～13グリッド内に位置する。南側で2・33号住居跡や37号土壙と4号住居跡内では36号と重複し、東側で20～22号土壙と隣接している。遺存状態は水田耕作のため良くない。確認面はIII層上面で、住居跡の構築はV層上面を若干掘り込んで床面を構成している。

3号住居跡 東側約半分を検出したにとどまっているため、平面形はおそらく隅丸方形を呈すると考えられる。大きさは推定長径5.2m・短径4.86mを計り、確認面からの深さは32～37cmである。壁は、緩やかに掘り込まれ東側中央部が高くなっている。北東側に42cm前後・深さ11～14cmの脇ら出部が認められる。床面の状態は、西側の中央部で若干堅くなってしまっており、全体的に平坦である。壁溝・周溝は検出されていない。柱穴は6本確認されており、EP9・10・91～94（第5図中）でいずれにも支柱穴となるもので、主柱穴は確認できなかった。柱穴の大きさは径18～32cm・深さ15～24cmである。炉跡は確認されない。

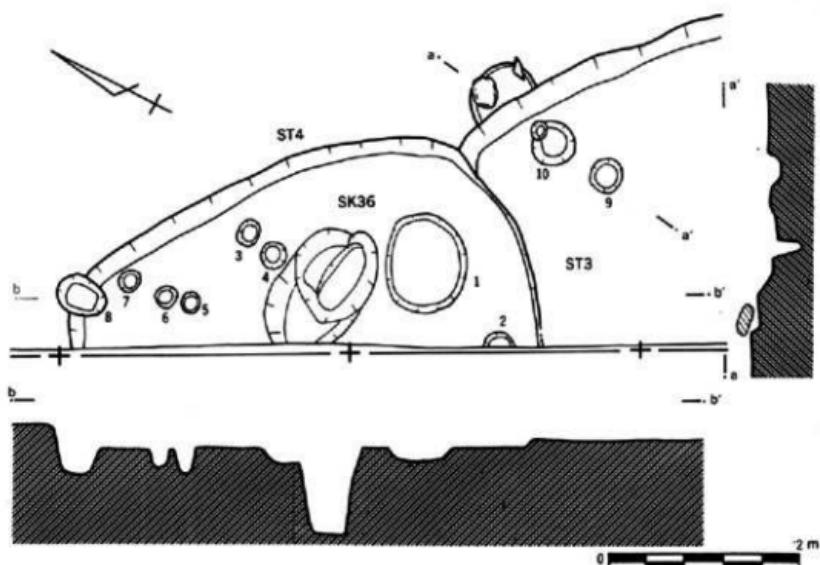
4号住居跡 3号住居跡同様に西側半分域は未検出のため、平面形は不整隅丸方形と考えられる。大きさは4.83mであり、確認面からの深さは24～29cmである。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、壁体はしっかりとしている。床面の状態は、全体的に軟弱であり、平坦である。壁溝・周溝および炉跡は確認されなかった。

3・4号住居跡の重複関係は、36・37号土壙はいずれの住居跡よりも新しく、4号住居跡は3号住居跡よりも新しい。時期は、いずれの住居跡も縄文時代中期大木10式期の所産と考えられる。

### 5・6号住居跡（第7図 図版10）

A地区の南側の西寄り緩傾斜地、14～17・9～11グリッドに位置している。西側には32・34号住居跡が隣接している。遺存状態は、水田耕作および6号住居跡東側で水道付設のため部分的に攪乱を受けている。確認面はIII層中位で確認され、住居跡の構築はV層上面をわずか掘り込んで床面を構成している。

5号住居跡 南側約半部が未検出のため、平面形はおそらく不整円形を呈すると考えられる。大きさは長径・短径とも4.20m前後とみられ、確認面からの深さは25～31cmである。壁は、緩やかに掘り込まれており、壁体もしっかりと構築されている。現存する壁の高さは15～23cmを計る。壁溝・周溝は検出されない。床面の状態は、住居跡中央部に向けて傾斜するように中央部がやや窪み、中央部がやや堅くなっている他は軟弱である。柱穴は34本確認され（EP16～39）、本柱穴はEP18・20・26・33・40であり、他は支柱・壁柱穴である。炉跡は確認されていない。

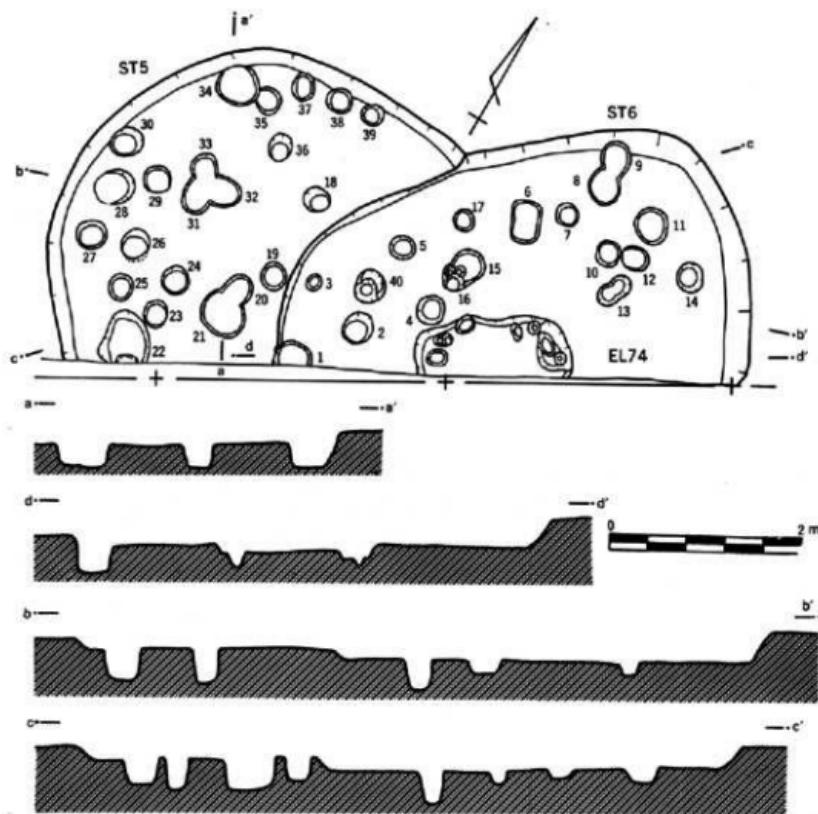


第6図 3・4号住居跡

6号住居跡 北側半分を確認し検出したもので、平面形や西側がやや楕円状になる不整開丸方形を示すと考えられ、大きさは長径4.92mで短径は不明である。確認面からの深さは29~36cmを計る。壁は、ほぼ垂直に掘り込んでおり、壁体も所々で堅くふみしめられている。現存する壁の高さは32~34cmである。周溝や壁溝は確認されていない。床面の状態は、E L74付近で堅くなっている他は軟弱で、ほぼ平坦である。柱穴は15本検出され（E P 1~15）、主柱穴はE P15で径32cm・深さ36cmである。E P 1~14は支柱穴あるいは壁柱穴で径18~31cm・深さ16~27cmを計る。

炉跡（E L74）は、住居跡中央部に位置しており、8~11cmの深さで掘り込んでおり、周囲には5~10cmの小ピットが認められる。おそらく半炉跡は、複式炉となるものであり、南側に埋設土器部を持つと考えられる。

5・6号住居跡の重複関係は、土層の堆積状態からみて5号住居跡よりも6号住居跡が新しく、5号住居跡の覆土の状態から5号住居跡が完全に埋没する前に6号住居跡が構築されたものである。時期は、いずれの住居跡も出土した土器から（第18図）みて縄文時代中期大木10式の所産とみられる。



第7図 5・6号住居跡

#### 25~30号住居（第8図 図版10）

A地区の西側の中央寄り緩傾斜地、31~33-14~18グリッド内に位置する。南側で4号住居跡や22号土壤と、東側で23号土壤、北側では39、42、43号とそれぞれ重複し、29号住居跡や22号土壤とも重複している。遺存状態は、水田耕作により余り良くない。確認面はIII層下部で、住居跡の構築はIV層下部を掘り込んで床面を構成している。

25号住居跡 西側の約1/4は未検出となっている。平面形は東側でやや脹らみを持つ隅丸方形を示し、大きさは長径6.50m、短径は推定5.40mを計り、確認面からの深さは16~21cmである。壁は、緩やかに掘り込まれて軟弱となっている。壁溝および周溝は認められな

い。床面の状態は、中央部付近ですり窪むように凹凸がみられ、壁は付近ではやや平坦となつておらず、全体として軟弱となっている。炉跡は検出されなかつた。

柱穴は25本検出され（E P 1～25）、主柱穴となるものはE P 2・4・6・8・7・18・24で径24～42cm・深さ31～72cmである。その他は支柱穴・壁柱穴である。

26号住居跡 南側で25号住居跡・東側で27号住居跡・北側では30号住居跡とそれぞれ、重複している。西側は約半分以上が未検出で、南側で25号住居跡に切れているため、平面形は不明確である。大きさは長径4.12mを計る。25号住居跡を精査する際に検出したものである。壁は北側の一部で現存しており、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝・周溝は検出されない。床面の状態は、中央部が若干壠鉢状になり、全体として軟弱である。炉跡は確認されない。柱穴は11本検出され（E P 26～37）、その配列は不規則なため不明である。大きさは径29～45cm、深さ11～33cmである。

27号住居跡 南側で25・26号住居跡と、東側で28・29号住居跡とそれぞれ重複している。平面形は、北側で張り出部をもつ不整の円形を呈し、大きさは長径4.30m・短径3.82mを計り、確認面からの深さは12～18cmである。壁は、北側で残存しており緩やかに掘り込まれており、北側の張り出部では堅く踏みしめられている。周溝および壁溝は検出されていない。

床面の状態は、北側の半分域がV層を若干掘り込んで構築しているため堅くなっている。中央部で凹凸になり傾斜しており、中央部がやや軟弱な他は堅くなっている。炉跡は検出されなかつた。

柱穴は16本検出され（E P 38～53）、主柱穴はE P 45・48・51・53で大きさは径32～49cm、深さ29～41cmである。壁柱穴はE P 38・39・41・44・54～56で住居跡内を向くように掘り込まれており、径12～34cm・深さ12～24cmである。その他は支柱穴で、大きさは径11～38cm・深さ7～32cmである。

28号住居跡 北側で27・29号住居跡と、西側で25号住居跡とそれぞれ重複関係にある。平面形は、北東側がやや直線的になるとされる不整円形を呈し、大きさは長径5.10m・短径4.00mを計り、確認面からの深さは19～22cmである。

壁は、東側から南側にかけて検出され、緩やかに掘り込まれており、東側は堅く踏みしめられ、南側はやや軟弱になっている。壁溝や周溝は検出されていない。

床面の状態は、中央部がやや高くなつておらず、壁際で傾斜となつてゐる。中央部がやや堅くなっている他は、非常に軟弱となつてゐる。炉跡は確認されていない。

柱穴は14本検出され（E P 57～70）、主柱穴はE P 59・61・68・70で、大きさ径24～63cm・深さ24～51cmである。支柱穴は、E P 57・58・60・62・63・64・66・69で径18～34cm・深

さ12~29cmである。壁柱穴はE P65・67で、径24~32cm・深さ19~24cmとなっている。

29号住居跡 南側で27・28号住居跡とそれぞれ重複している。平面形は27・28号住居跡によって大半が切られているため不明確である。大きさも同様である。

壁は、北側から東側にかけて残っており、緩やかに掘り込まれている。IV層を若干掘り込んでいるため堅くなっている。現存高18~21cmである。壁溝および周溝は確認されていない。

床面の状態は、IV層を掘り込んで構築しているため、堅くなっている。中央部に向けて傾斜して、若干の凹凸がみられる。炉跡は検出されていない。

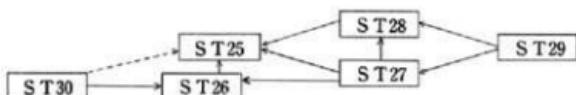
柱穴は3本検出され(E P71~73)、いずれも支柱穴で大きさ径21~36cm・深さ12~21cmを計る。なお北側では、38号土壇によって切られているため不明である。

30号住居跡 南側で26号住居跡と重複しており、南東側で27号住居跡と隣接している。西側半分は未検出である。平面形は、おそらく不整の円形を呈し、大きさは径3.65mを計り、確認面からの深さは19~24cmである。

壁は、IV層上面を掘り込んでいるため、壁体はしっかりとしておりほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝・床面の状態は、中央部が若干凹凸がみられる他は平坦であり、やや堅く踏みしめられている。なおIV層上面を掘り込んで床面を構築している。

柱穴は10本検出され(E P74~84)、主柱穴はE P81~83で大きさは径26~34cm・深さ25~38cmである。支柱穴は、E P74~80で大きさは径29~54cm・深さ12~28cmである。

これら住居跡の時期は、出土した土器からみて(第19図)縄文時代中期大木10式期に比定される。重複関係は、下記の新旧関係図式となる。

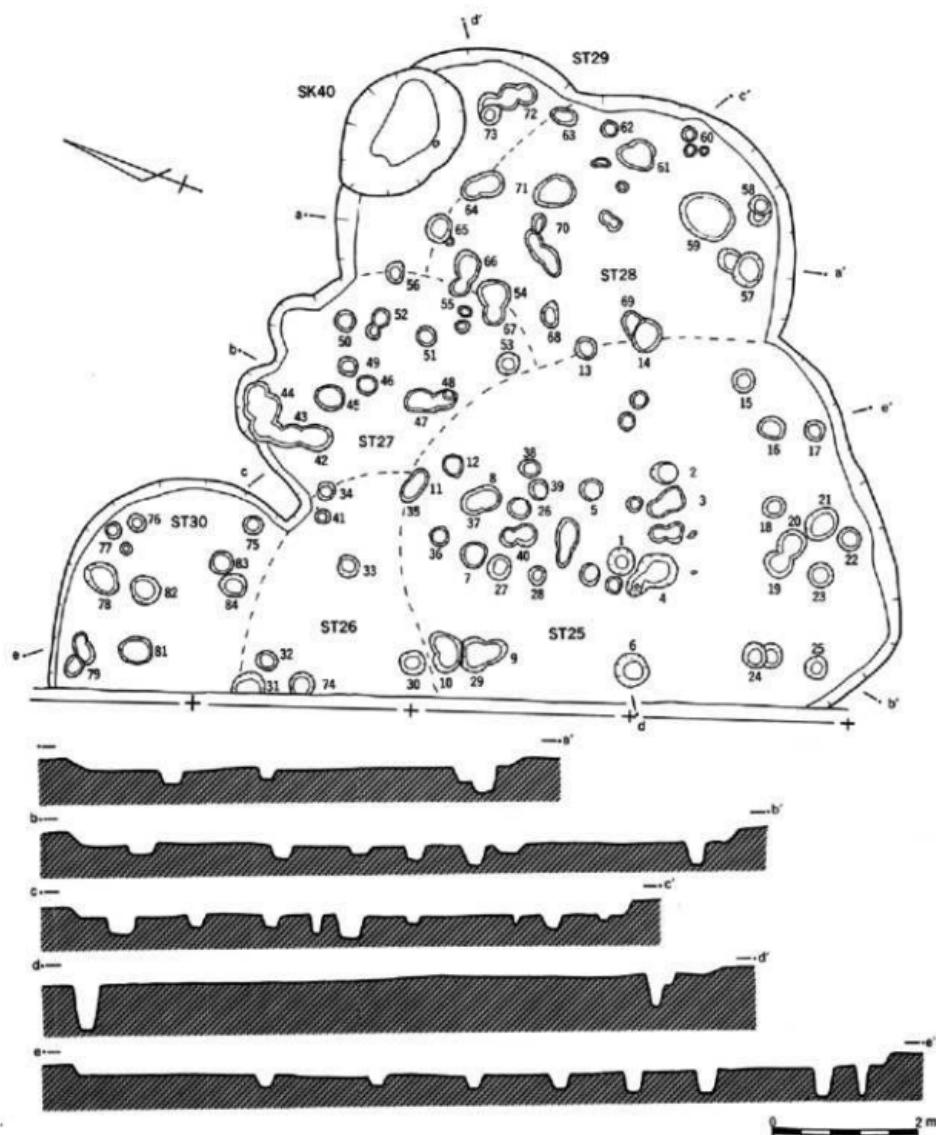


(矢印の方向は旧→新である)

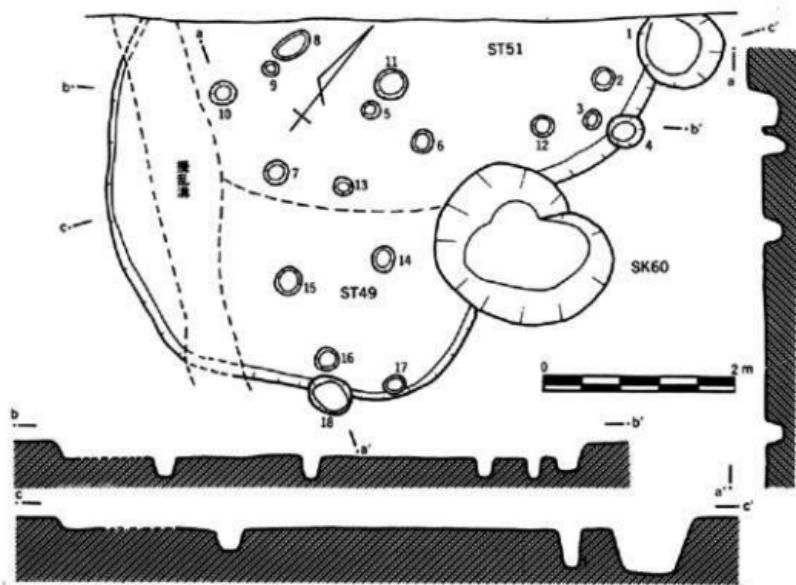
#### 49・51号住居跡(第9図 図版11)

A地区の北西側の平坦地、33~35-20・21グリッド内に位置する。東側で60号土壇と重複しており、南側で48号土壇と隣接している。遺存状態は、両住居跡の西側で水道付設のため擾乱溝が東西に走っているため良くない。確認面はIII層下部で、住居跡の構築は49・51号住居跡ともV層を掘り込んで床面を構成している。

49号住居跡 平面形は、東側がややゆがむ不整円形を示して、大きさは径4.25mで、確認面からの深さは22~24cmを計る。壁溝や周溝は検出されていない。



第8図 25~30号住居跡



第9図 49・51号住居跡

壁は、ほぼ垂直に掘り込んでおり、壁体は堅く踏みしめられている。なお、南側では緩やかに掘り込まれている。

床面は、全体的に堅く踏みしめられており、東側では非常に堅くなり、凹凸がある。全体として平坦である。炉跡は検出されなかった。

柱穴は8本検出され(E P11~18)、とくに主柱穴と考えられるものは確認されず、支柱穴はE P11~17で、大きさは径18~36cm・深さ18~56cmを計る。E P18は壁柱穴で径52cm、深さ31cmである。

51号住居跡 住居跡の約半分以上は北側の未検出域である。平面形はおそらく円形を呈すると考えられ、大きさは推定5.89mで、確認面からの深さは15~21cmを計る。

壁は、東側で一部規存しほぼ垂直に掘り込んでいる。壁体も堅く踏みしめられている。壁溝および周溝は検出されない。

床面の状態は、住居跡の中央部で若干の凹凸がみられ、他はおおむね平坦であり、壁際が軟弱となっている。

柱穴は10本検出され(E P1~10)、とくに主柱穴は確認されず、支柱穴はE P2・3・

5~10であり、大きさは径12~38cm・深さ10~31cmである。壁柱穴はE P 1~4で東側から検出され、径39~84cm・深さ32~49cmである。

49・51号住居跡の重複関係は、51号住居跡が新しく、49号住居跡が旧い。時期はいずれの住居跡とも、出土した遺物からみて(第19図)縄文時代中期大木10式期に相当する時期である。

#### 52~56号住居跡(第10図 図版12~14)

A地区の北側の中央寄り平坦地、35~38~18~21グリッド内位置している。西側で49、51号住居跡と隣接し、58・59号住居跡と重複する。遺存状態は、水田耕作により擾乱を受けているため良くない。確認面はIII層中位で、住居跡の構築はIV層を掘り込んで床面を構成している。

52号住居跡 西側で59号住居跡と南側で56号住居跡さらに東側で54号住居跡とそれぞれ重複している。平面形は、西側がやや脹らみ、北側で直線的には不整の隅丸方形を呈しており、大きさは長径5.10m・短径4.00mを計り、確認面からの深さは20~24cmである。

壁は、北側ではほぼ垂直に、西側で緩やかに掘り込んでおり、全体的に軟弱となっている。壁溝および周溝は検出されない。

床面の状態は、南側・西側から中央部にかけて傾斜するようになり、北側壁付近で平坦となっている。全体として非常に軟弱である。

柱穴は18本検出され(E P 1~18)、主柱穴はE P 8・10・18の3本であり、大きさは径29~42cm・深さ31~35cmである。支柱穴はE P 1・2・4・5・7~11・14・16で、径21~43cm・深さ12~29cmである。壁柱穴は、住居跡のそれぞれの辺に1~3本ありE P 3・9・12・13・15となっている。径32~49cm・深さ18~38cmである。

53号住居跡 北側で54・56号住居跡と、東側で55号住居跡・58号土壙と重複している。平面形は、東側で大きく脹らみをもち、西側で一直線的になる不整の多角形を示しており、大きさは長軸4.02m・短軸3.60mを計り、確認面からの深さは18~24cmである。

壁は、西側の一部から南側にいたる辺では緩やかに、西側の辺ではほぼ垂直に掘り込んでいる。西側では堅くなり、南側では軟弱である。壁溝・周溝は確認されない。

床面の状態は、E L 64の周辺に向けて傾斜して擂鉢状になっている。壁付近ではおおむね平坦である。炉跡周辺部は堅く踏みしめられている他は、軟弱である。

柱穴は21本検出され(E P 19~39)、主柱穴はE P 19~22の4本で大きさ32~48cmで深さ25~39cmを計り、炉周辺に規則的に配列されている。支柱穴はE P 23~34で、径12~29cm・深さ12~31cmで主柱穴の周りをめぐっている。壁柱穴はE P 35~39の5本確認され、西側

と東側壁の隅に位置しており、径20~45cm・深さ19~33cmである。

炉跡（E L 64）は、住居跡の中央部の南寄りに位置し、先端が東方向になる複式炉である。長さ78cm・最大幅49cm・床面からの深さは20~25cmで、長軸方向はほぼ東方向になっている。構築の状態は、燃焼部では底面から上部にかけ径15~25cmの平偏な礫を用い、底面には15~35cmの平偏な河原石を使用している。袖石などはみられず開放してはいない。埋設土器部では2~7cmの小礫を若干配している程度であり、埋設土器は中形の深鉢形土器で、正位の状態にあり、胴下半から底部まで現存している。二次焼成を受けて遺存状態は非常に悪い。

54号住居跡 西側で52・56号住居跡・南側では53・55号住居跡と重複している。平面形は、東南側で大きく脹らむ不整の円型を呈し、大きさは長・短径とも4.00m前後を計り、確認面からの深さは18~24cmである。

壁は、いずれの側でも緩やかに掘り込んでおり、非常に軟弱である。周溝および壁溝は検出されない。

床面の状態は、東側と西側壁付近で内側に傾斜し、中央部では平坦となっている。全体的に軟弱である。

柱穴は14本検出され（E P 40~53）、主柱穴になるものはE P 40・41と住居跡の長径方向と一致する配列で2本確認された。径39~54cm・深さ39~47cmである。支柱穴はE P 42・43~51で径29~42cm・深さ14~38cmである。壁柱穴はE P 52・47の2本で、径41~43cmで深さ25~31cmである。

55号住居跡 住居跡内の西側で58号土壤と、西側で53・54号住居跡とそれぞれ重複している。平面形は、東側がやや脹らみをもつ不整の隅丸方形を呈し、大きさ長径3.82m・短径3.61mを計り、確認面からの深さは16~22cmである。

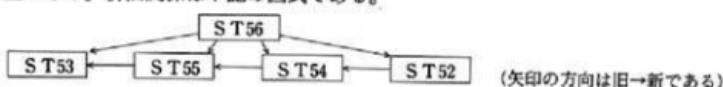
壁はほぼ垂直に掘り込んでおり、軟弱である。床面の状態は、全体的に平坦で非常に軟弱である。壁溝・周溝および炉跡は検出されなかった。

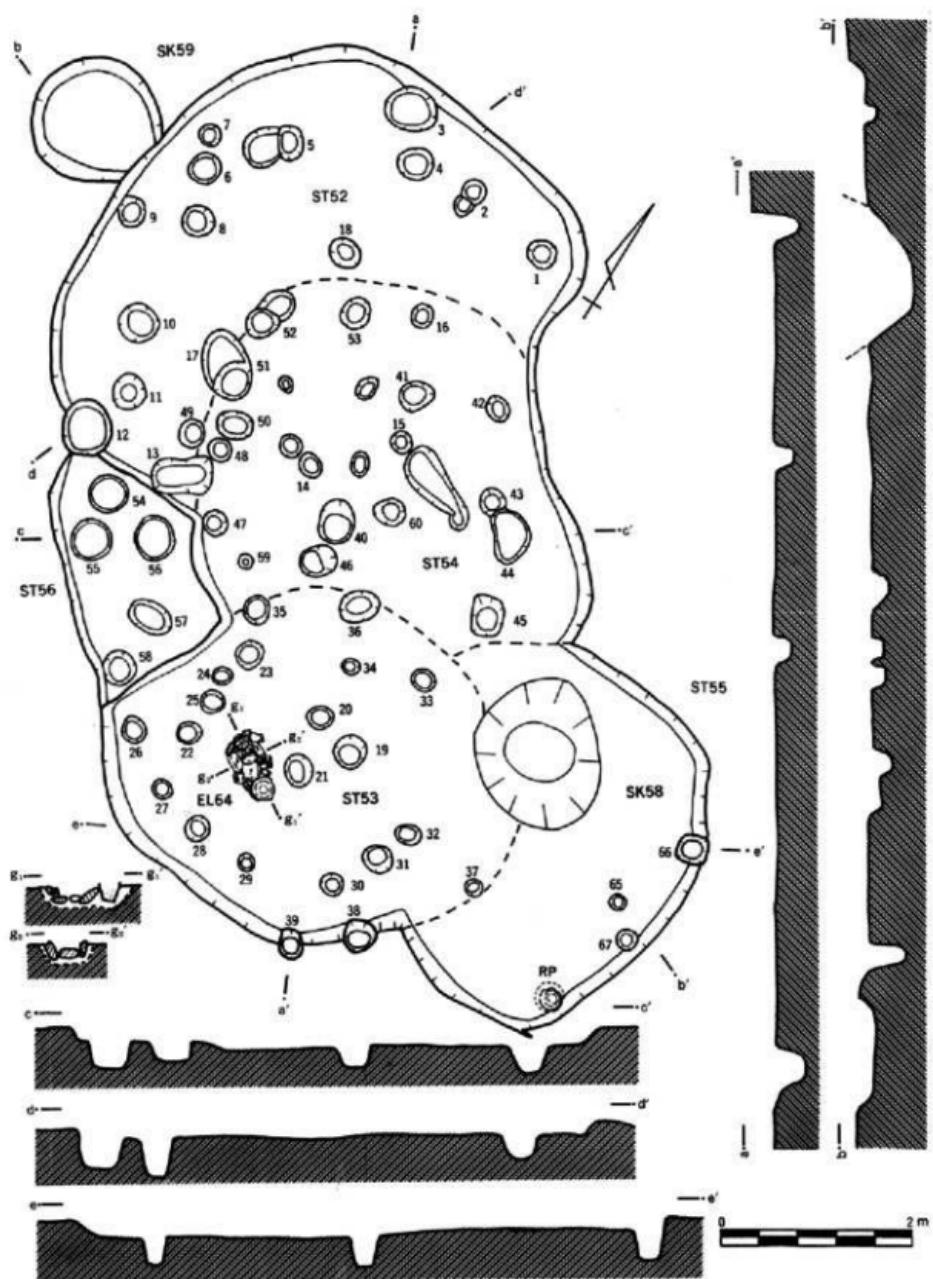
柱穴は3本検出され（E P 65~66）支柱・壁柱穴である。

56号住居跡 北側で52・54号住居跡と東側で53号住居跡とそれぞれ重複している。平面形はいずれの住居跡とも切られているため不明で、規模も同様である。

壁はほぼ垂直に掘り込まれ、床面も平坦で堅くなっている。柱穴はE P 54~64である。

これらの住居跡は、いずれも出土した土器から（第19・20図）縄文時代中期大木10式期の所産である。新旧関係は下記の図式である。





### 59～62号住居（第11図 国版15～17）

A地区の中央部の北側寄り平坦地、37～40-16～18グリッドに位置する。いずれの住居跡も重複している。遺存状態は水田耕作のために良くない。確認面はIII層中位で、住居跡の構築は一部V層上面を掘り込んで床面となっている。

59号住居跡 平面形は円形を呈しており、大きさは長・短径とも3.72mで、確認面からの深さは12～16mを計る。壁は、全体的に緩やかに掘り込んでおり軟弱である。周溝（E D 1）は、南側から東側にかけて認められ幅14～20cm・深さ15～18cmである。床面は、全体的に起伏があり、住居跡中央から東側にかけ堅くなっている。炉跡は検出されない。

柱穴は（E P 2～12）で11本検出され、主柱穴は2・3の2本確認され中央部に位置している。径39～52・深さ32～49cmである。支柱穴はE P 4～7・10で、壁柱穴はE P 9・11～14である。本住居跡は周溝・柱穴の配列からみて拡張された住居跡である。

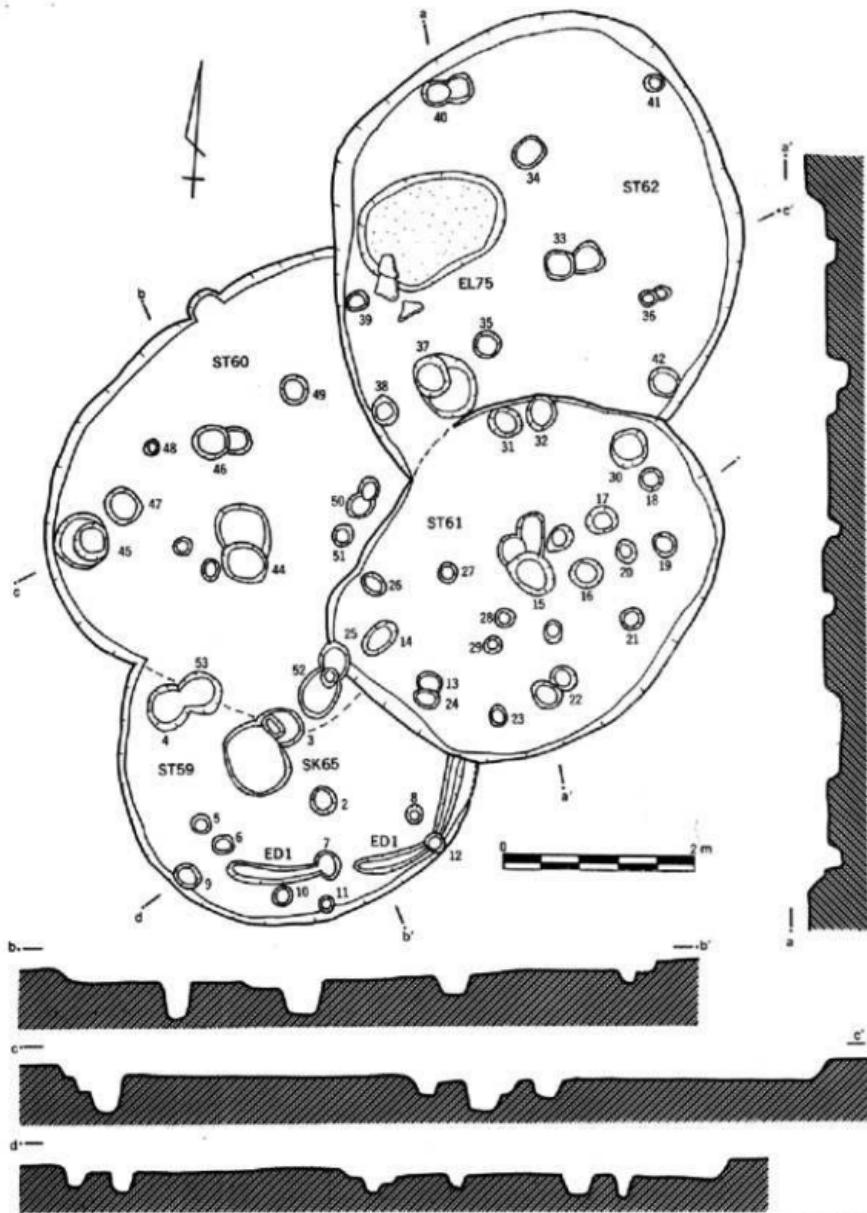
60号住居跡 平面形はおそらく不整の円形になるとみられ、大きさは長径4.40m・短径4.00mを計り、確認面からの深さは14～16mである。壁は緩やかに掘り込んでおり軟弱である。壁溝・周溝は認められない。床面は全体的に平坦で軟弱である。炉跡は検出されていない。柱穴は10本検出され（E P 44～53）、主柱穴はE P 44・49である。支柱穴・壁柱穴はE P 45～48・50～52である。

61号住居跡 平面形は、東側が大きく脹らみをもつ不整の隅丸方形を呈している。大きさは長径4.18m・短径3.18mを計り、確認面からの深さは27～32cmである。壁は東側で垂直に、北側・南側では緩やかに掘り込んで、軟弱である。

床面の状態は、V層を掘り込んで構成しているが、全体的に起伏があり軟弱となっている。炉跡は検出されない。柱穴は18本検出され（E P 15～32）、主柱穴はE P 15・30で、中央部から東側によって位置し、径56～62・深さ46～59である。支柱穴は住居跡内をめぐるように在りE P 16～29で、壁柱穴はE P 31・32である。

62号住居跡 平面形は、不整梢円形を呈しており、大きさは長軸推定4.60m・短軸4.28mでN-5°-Wを計り、確認面からの深さは20～25cmである。壁は全体に緩やかに掘り込んでおり、軟弱である。床面はほぼ平坦になり、非常に軟弱である。柱穴は10本検出され（E P 33～42）、主柱穴はE P 33-37で中央から南西側に位置し、2本確認されている。他は支・壁柱穴である。炉跡（E L 74）は、住居跡の西側中央に位置し、大きさ1.5×1.2mで梢円形になり、深さ15～20cm掘り込んでおり多量の焼土が検出される。おそらく複式炉の残存と考えられる。

これら住居跡の重複関係は、61号住居跡が最も新しく、順次62号住居跡・60号住居跡・59号住居跡と旧くなっていく。時期は、出土した土器から（第20図）大木10式期である。



第11図 59~62号住居跡

### 66～69号住居跡（第12図 図版18）

A地区の南東側の平坦地、40～41-10～12グリッド内に位置する。いずれの住居跡も重複しており、69号住居跡の南側に72号住居跡が接している。遺存状態は水田耕作のため良くない。確認面はIII層中位で、住居跡の構築はV層を若干掘り込んで床面を構成する住居跡もある。

66号住居跡 東側で68号住居跡と、西側で69号住居跡と重複している。平面形は、不整の円形を呈し、大きさは長径6.50m・短径6.00mを計り、確認面からの深さは26～32cmである。

壁は、全体的にはほぼ垂直に掘り込んでおり軟弱である。壁溝および周溝は検出されていない。床面の状態は、全体として起伏にとんでおり、軟弱である。炉跡は確認されていない。

柱穴は25本検出され(E P 1～25)、主柱穴はE P 1のみしか確認されていない、径36cm・深さ42cmで、住居跡中央部に位置している。支柱穴はE P 2～12で径11～38cm・深さ14～39cmであり、南側に集中して認められる。壁柱穴は、住居跡内側をめぐるように一周しており、E P 13～25で径29～52cm・深さ31～38cmである。

67号住居跡 西側で68号住居跡と重複している。東側半分域は未検出である。平面形はおそらく、不整の楕円形を呈し、大きさは長軸7.60m・短軸は不明である。確認面からの深さは26～31cmである。

壁は、北側では緩やかに掘り込まれ、南側ではほぼ垂直に掘り込んでおり、壁体は非常に軟弱である。周溝や壁溝は認められない。

床面の状態は、中央部が若干擂鉢状に傾斜して、壁付近ではほぼ平坦である。全体に軟弱である。炉跡は確認されていない。

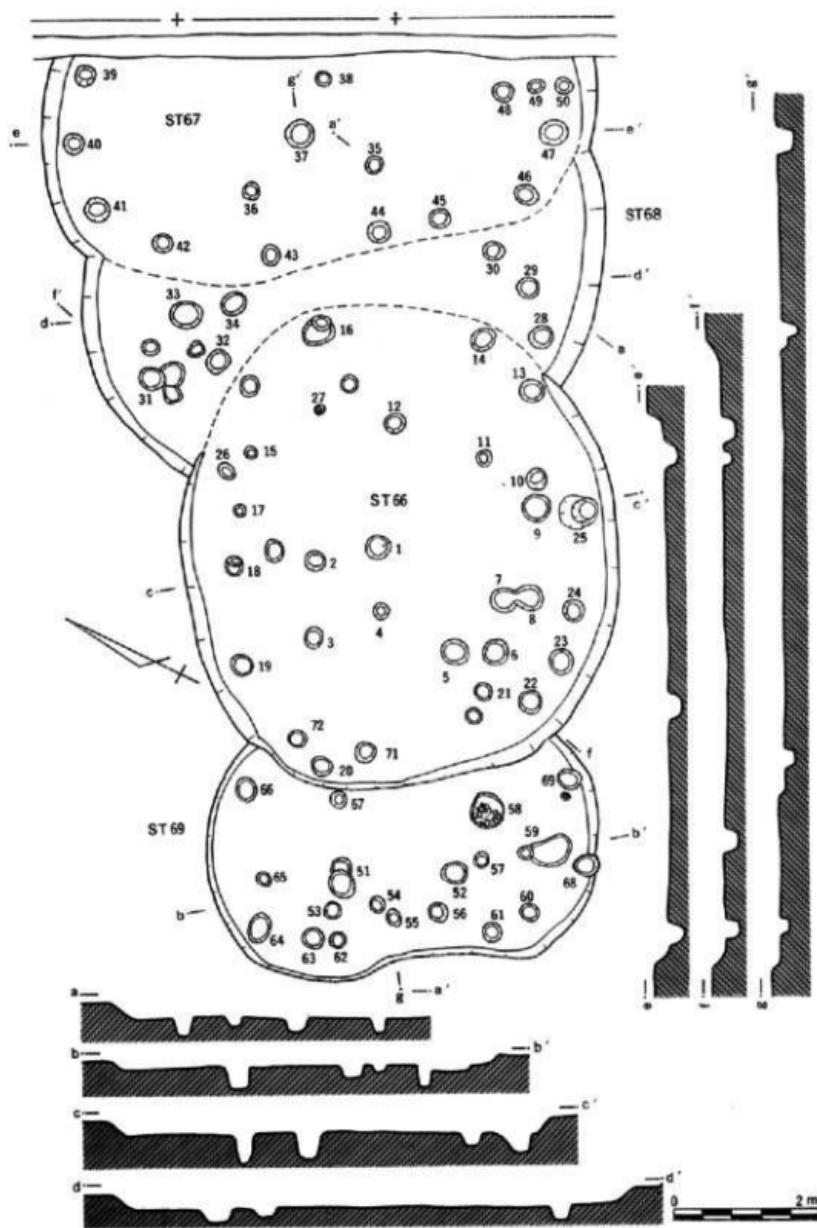
柱穴は14本検出され(E P 37～50)、E P 37が主柱穴とみられ住居跡中央部西寄りに在り、径45cm・深さ30cmである。支柱穴はE P 38・48・49であり、E P 39～50は壁付近をめぐるように位置している。径25～53cm・深さ19～42cmである。

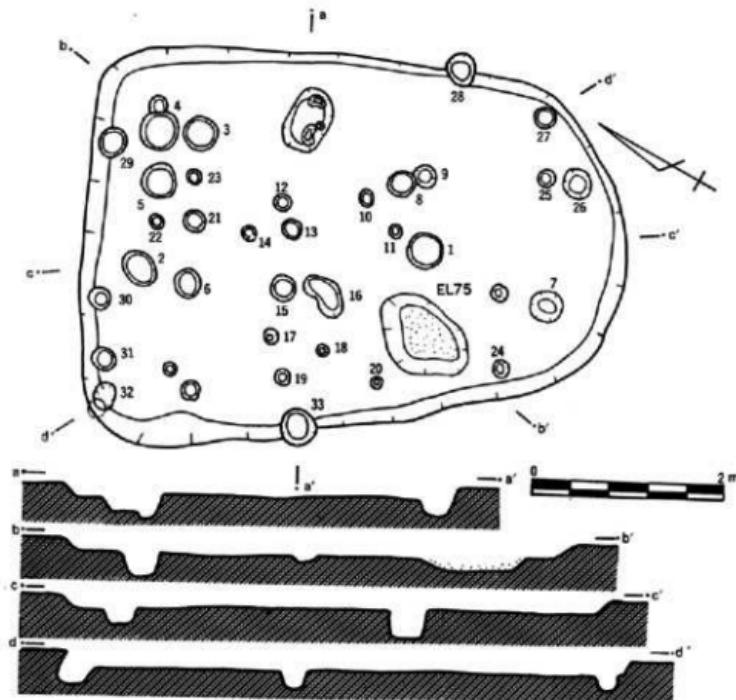
68号住居跡 東側で67号住居跡と、西側で66号住居跡と重複している。平面形はおそらく楕円形を呈すと考えられ、大きさ長軸7.00m・短径は不明である。確認面からの深さは18～23cmである。

壁は、北側と南側で緩やかに掘り込んでおり、壁体は非常に軟弱である。周溝・壁溝は確認されない。

床面の状態は、全体に起伏があり、非常に軟弱となっている。炉跡は検出されていない。柱穴は11本検出され、E P 26～36である。

69号住居跡 東側で66号住居跡と重複している。平面形は、不整の楕円形を呈し、大き





第13図 70号住居跡

さは長軸5.32m・短軸推定3.80mを計り、確認面からの深さは16~19cmである。

壁は、北側から西側にかけてはほぼ垂直に掘り込まれ、南側では緩やかに掘り込んでいる。壁体は、全体的に堅くしまっている。周溝は検出されていない。

床面の状態は、IV層中位を床面としており、南側はやや起伏があり、北側では平坦である。全体としてやや軟弱である。柱穴は21本検出され、主柱穴はE P51・52で住居跡中央の西寄りに直線的に配している。支柱穴はE P53~63で、E P64~70は各方向に2~3本配して、住居跡内側をめぐるようになっている。

これら住居跡の重複関係は、66・68・69号住居跡では66号住居跡が新しく、68・69号住居跡は旧い。67・68号住居跡では67号住居跡が新しく、68号住居跡が旧い。時期は、いずれも出土した土器から（第21図）縄文時代中期大木7b式に相当する。

### 70号住居跡（第13図 図版19・20）

A地区の南東側の平坦地、40・41-9・10グリッド内に位置する。北側に69号住居跡と接している。遺存状態は水田耕作のため良くない。また南側で一部攪乱を受けている。確認面はIII層中からIV層上面で、住居跡の構築はV層を若干掘り込んで床面を構成している。

平面形は、南側で脹らみをもち、東側・北側・西側で直線的になる長方形を示す。大きさは、長軸5.63m・短軸4.00m・確認面からの深さは16~20cmで、長軸方向N-34°-Wを計る。

壁は、全体に緩やかに掘り込んでおり、壁体も堅くしまっている。壁溝・周溝は検出されない。

床面の状態は、住居跡の中央部から南側にかけては起伏にとんでおり、北側壁付近では平坦となっている。南側壁付近から炉跡（E L71）にかけては非常に堅くしまっている。他はやや軟弱である。

柱穴は33本検出され（E P 1~33）、主柱穴はE P 1のみ検出された。他は支柱穴ないし壁柱穴であり、E P 28と38は対になっている。E P 3・23・21・6とE P 4・5・22・2は東西に直線的に配列されており、E P 29~32も同様である。このことは、本住居跡は2~3回の建替があったと考えられる。

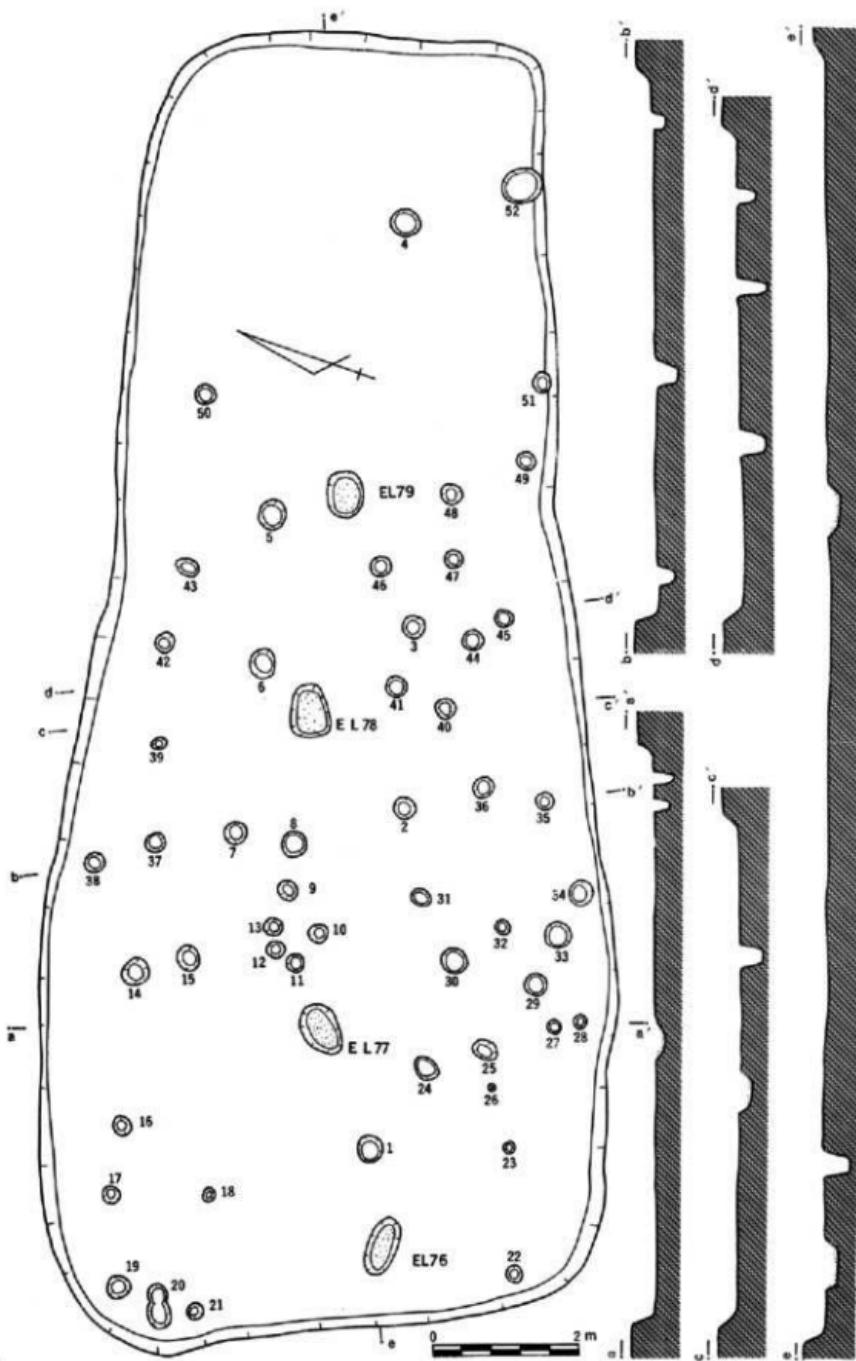
炉跡（E P 71）は、南西側壁寄りに位置し、橢円形を呈する地床炉である。大きさは長軸110cm・短軸70cm・深さ13~16cmである。焼土は若干検出されている。

本住居跡の時期は、覆土・床面から出土した土器（第21図）からみて縄文時代中期大木7 b式に相当する。

### 第73号住居跡（第14図 図版21）

B地区の北側中央部の平坦地、60~66-13~18グリッド内に位置する。遺存状態は、水田耕作のため良くない。確認面はIII層中位で、住居跡の構築はIV層下部まで掘り込んで床面を構成する大形住居跡である。

平面形は、中央から南側・北側が大きく脹らみをもつ不整の長方形を呈している。大きさは、長軸17.56m・短軸6.00~8.00mで短軸方向N-32°-Wを計る。確認面からの深さは18~29cmである。壁は東辺から南部にかけては緩やかに、西辺と北辺ではほぼ垂直に掘り込んでいる。壁・周溝はみられない。床面は中央部で若干起伏がある程度ではほぼ平坦であり、軟弱である。柱穴は52本検出され（E P 1~52）、主柱穴はE P 1~5である。炉跡は地床炉でE L76~79で4基検出する。本住居跡の時期は、出土遺物からみて（第21図）縄文時代前期大木1式期に相当する。



第14図 73号住居跡

### (b) 土 壤

今回の調査で検出した土壤は32基で、A地区の中央部西寄りから西側にかけて多く分布している。これら土壤の断面や覆土の状態からみて、大きく分けて3形態に分類することができる。なお、土壤群については一覧表としてまとめた。(表-3)

A形態：平面形が円形あるいは不整円形を呈し、大きさは径18~272cm・深さ16~44cmである。断面形はサラ形あるいはタライ形を呈し、覆土は1~3層に区分されて変化は認められない。(第15・16図)

B形態：平面形は円形・不整円形・橢円形を呈し、大きさは119~204cm・深さ54~108cmである。断面形は上部がアサガオ形に開く袋状を示している。覆土は、中層付近で黒色土あるいは黒褐色土中に炭化粒子や黄褐色土粒子が多く含まれおり、交互に堆積している。遺物も多く出土している。(第15図)

C形態：平面形は不整円形ないし橢円形を呈しており、大きさは156cm~314cm・深さ34~72cmである。断面形は一定していない。なおC形態については、SK58が近世以後の時期であり、SK60は覆土中にロームブロックを含むロームマウンド状の土壤である。SK72は縄文時代前期の所産であるTピットになり、壙底に4本の小ピットが認められる。これらは、A・B形態に属さないものとして1括したものである。(第16図)

#### 13号土壤 (第15図) [Aタイプ]

A地区的南西側の平坦地、35-11・12グリッド内に在り、8号土壤の東側に隣接し、III層上面で確認された。平面形は、南西側がやや張り出す円形を呈し、長径192cm・短径162cm・深さ26cmである。壁は緩やかに掘り込まれ、壙底はほぼ平坦である。土層の堆積状は北側から流入しレンズ状になり、2層に分けられ自然に堆積したものである。時期は縄文時代中期大木10式の所産である。

#### 14・15・16土壤 (第15図) [Aタイプ]

A地区的南西側の平坦地、32・33-11~13グリッドに在り、7・33号住居北側に隣接し、III層中で確認され、いずれも重複している。15号土壤は平面形が不整円形を呈して、長径209cm・短径192cm・深さ28cmである。壁は緩やかに掘り込まれサラ状を呈している。壙底は平坦である。覆土はI層で自然に堆積している。14・16号土壤は15号土壤によって切られているため不明である。14号土壤が新しく16号土壤が旧い。いずれの時期も縄文時代中期大木10式期の所産である。

### 36号土壌（第15図 図版7）〔Bタイプ〕

A地区の南西側の緩傾斜地、31-12・13グリッド内に在り、4号住居跡と重複しており、II層下部で確認された。平面形は橢円形を呈し、長軸169cm・短軸122cm・深さ68cmであり、長軸方向はほぼ東西方向になる。壁は南側で袋状となり、西側で階段状に掘り込まれ、他は垂直になる。墻底は中央部が凹凸になり壁際で平坦になる。覆土は5層に分けられ中層で遺物が多く出土する。時期は4号住居跡より新しく、縄文時代中期大木10式期の所産。

### 37号土壌（第15図 図版7）〔Bタイプ〕

A地区の南西側の緩傾斜地、31-11グリッド内に位置し、2・3号住居跡と重複する。II層下部で確認され、遺存状態はほぼ良好である。平面形は、不整円形を呈し、長径140cm・短径119cm・深さ74cmである。壁は上面で大きく外反し、西側から南側にかけて袋状になり、他では中位付近でほぼ垂直に掘り込まれている。墻底は、中央部が凹凸で壁際にかけ緩やかに傾斜している。覆土は1～5層に分けられ、1～2層は緩やかに堆積し、3～4層には炭化粒子が多量に含まれ、5層では黄褐色粒子が含まれ急激に堆積している。2・3号住居跡よりも新しく、時期は縄文時代中期大木10式期の所産である。

### 38号土壌（第15図 図版3）〔Bタイプ〕

A地区の南西側、31・32-9グリッドに在り、2・11号住居跡と重複する。II層中で確認され、遺存状態は良好である。平面形は円形を呈し、長径123cm・短径108cm・深さ108cmである。壁は上部でアサガオ形に開き、袋状に掘り込んでいる。墻底は中央部で凹凸になり、壁際で平坦になっている。覆土は1～6層に分けられ、堆積状態は北側から流入するよう堆積し、37号土壌と同様な堆積となる。2・11号住居跡よりも新しく、時期は縄文時代中期大木10式期に比定される。

### 72号土壌（第16図）〔Cタイプ〕

A地区の中央部南側の平坦地、38・39-11・12グリッドに在る。III層中で確認する。平面形は長楕円形を呈し、長軸314cm・短軸81cm・深さ72cmで長軸方向はほぼ東西になる。壁は緩やかに掘り込まれている。時期は縄文時代前期大木1式期と考えられる。

## (c) 溝 跡

A地区的北側中央部に在り、溝の幅は52～74cm・深さ17～28cmである。時期は縄文時代中期と考えられるが、性格は不明である。（第4図）

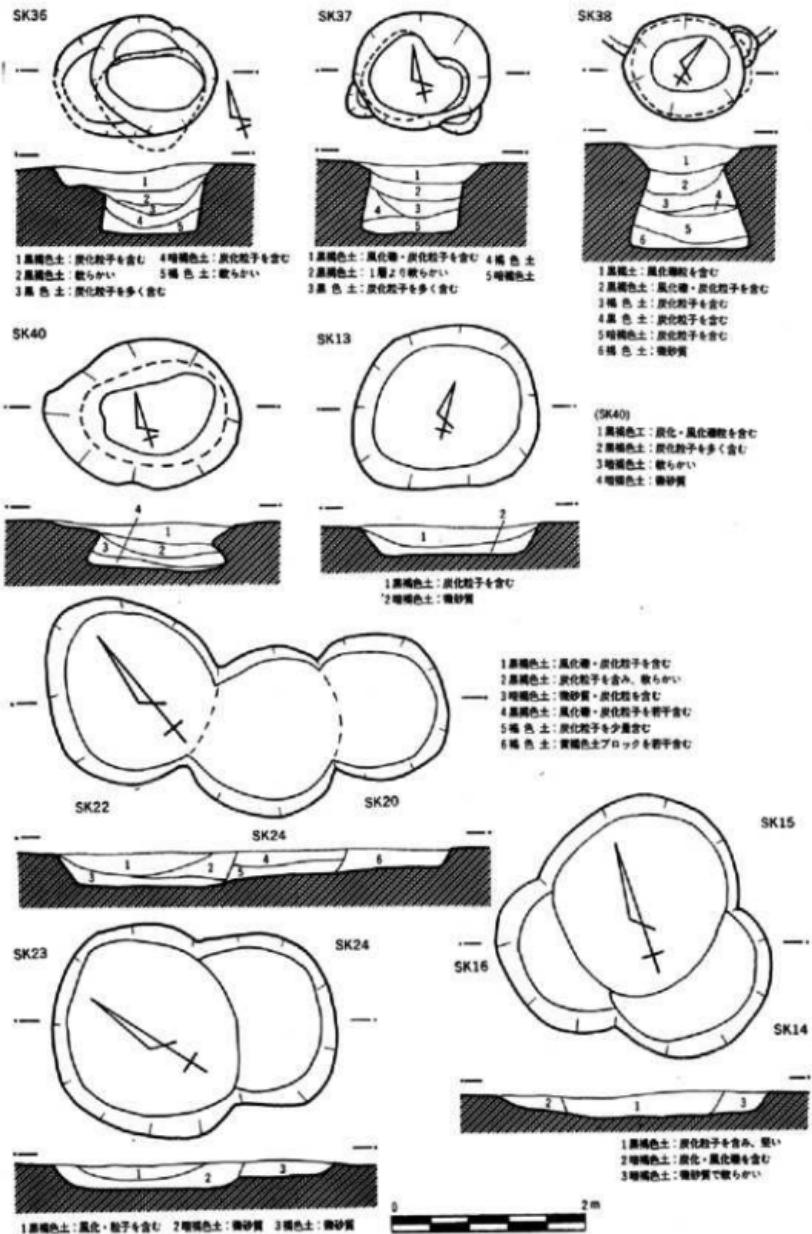
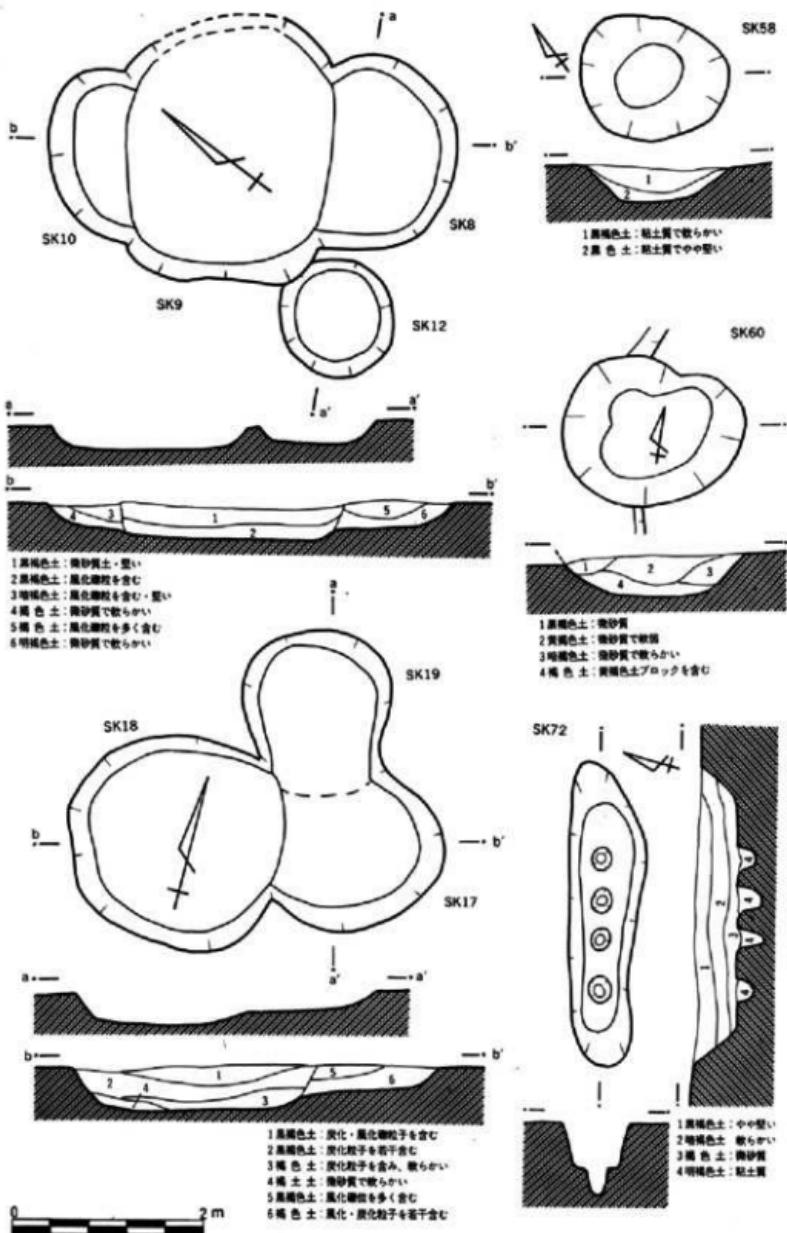


表-3 土 塗 一 覧 表

(単位:cm)

土被番号	地区名	上面部形	規格 (長径×短辺)	深さ	壁の掘込状態	底面の状態	種別	時期	備考
SK 8	34-12	不整円形	272×234	34	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK 9→古
SK 9	34-35-12-13	不整円形	203×(不明)	29	緩やか	平坦	A	大木10	SK 8-10→新
SK10	34-12-13	不整円形	172×(不明)	28	緩やか	凹凸	A	大木10	SK 9→古
SK12	33-34-12	円形	124×118	25	緩やか	平坦	A	大木10	SK 8→古
SK13	35-11-12	円形	191×162	26	緩やか	中央凹凸	A	大木10	
SK14	32-33-11-12	不整円形	182×(不明)	22	緩やか	平坦	A	大木10	SK15→古・SK16→新
SK15	33-12	不整円形	209×192	28	緩やか	平坦	A	大木10	SK14-16→新
SK16	32-33-12	円形	172×(不明)	18	緩やか	平坦	A	大木10	SK14-15→古
SK17	33-12-13	不整円形	(不明)×173	30	緩やか	凹凸	A	大木10	SK18-19→古
SK18	32-33-12-13	不整円形	258×227	44	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK17-19→古
SK19	33-13	不整円形	(178)×155	39	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK17→新・SK18→古
SK20	32-13	円形	151×(不明)	22	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK 2→古
SK21	31-32-13	円形	179×(不明)	27	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK20→新・SK22→古
SK22	31-32-14	不整円形	192×181	36	緩やか	中央凹凸	A	大木10	SK21→新
SK23	34-15	円形	223×196	26	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK24→新
SK24	34-15	円形	(不明)×175	20	緩やか	平坦	A	大木10	SK23→古
SK36	31-12-13	横円形	169×122	68	南側袋状	中央凹凸	B	大木10	ST 4→新
SK37	31-11	不整円形	140×119	74	西・南側袋状	中央凹凸	B	大木10	ST 2+3→新
SK38	31-32-9	円形	123×108	108	袋状	中央凹凸	B	大木10	ST 2+11→新
SK39	33-18-19	円形	202×168	38	緩やか	凹凸	A	大木10	
SK40	36-11-12	横円形	204×148	54	袋状	中央凹凸	B	大木10	
SK42	34-17	円形	181×(不明)	16	緩やか	平坦	A	大木10	SK43→古
SK43	34-17-18	不整円形	216×198	27	緩やか	平坦	A	大木10	SK42→新
SK44	34-18	横円形	(215)×168	18	緩やか	平坦	A	大木10	SK45→古
SK45	34-18-19	不整円形	(221)×(不明)	23	緩やか	平坦	A	大木10	SK44→新・SK47→古
SK47	33-34-19	不整円形	(223)×(不明)	28	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK45→新・SK48→古
SK48	33-34-19-20	不整円形	(198)×(155)	32	ほぼ垂直	平坦	A	大木10	SK47→新
SK57	35-21	円形	(142)×118	30	緩やか	平坦	A	大木10	ST52→古
SK58	37-19	不整円形	156×120	34	緩やか	平坦	C	近世?	ST53-54-55→新
SK60	34-20-21	不整円形	186×154	43	緩やか	凹凸	C	大木10	ST49-51→新
SK65	38-16	横円形	76×61	23	緩やか	平坦	A	大木10	ST59-60→新
SK72	38-39-11-12	長横円形	314×81	72	緩やか	凹凸	C	大木1	(ピット3有する)

( ) 内数字は推定



第16図 土壌平面図（2）

## 2 遺 物

### (a) 土 器

出土した遺物は、整理箱に約94箱を数え、うち土器は12箱である。今回は住居跡や土壤から出土した土器片を中心に分類を行なう。分類は、第Ⅰ群土器縄文時代前期・第Ⅱ群土器縄文時代中期前葉・第Ⅲ群土器縄文時代中期後葉として大別し、それぞれの表出された技法および文様別に類別した。なお縄文の原体については、施文された方向で書き表わすこととした。

**第Ⅰ群土器** 縄文時代前期前葉の土器群で、若干纖維が含まれている。

**a 類土器** 竹管あるいは半截竹管などによって文様を描出している。

**a 1 類 (第21図33・36・37 第23図 1)**

半截竹管によって施され一条の沈線で文様を描いている。(第21図6)は地文をループ文として三角状に文様を表わし、(第21図36)では連続する小刺突の地文を平行に施して、(第21図37)は地文を縄文として沈線を平行にし、いずれも口縁部破片であり、深鉢形の口縁部が外反する器形である。(第23図)はやや太い沈線で円形・平行線を描いている。

**a 2 類 (第23図 9~18)**

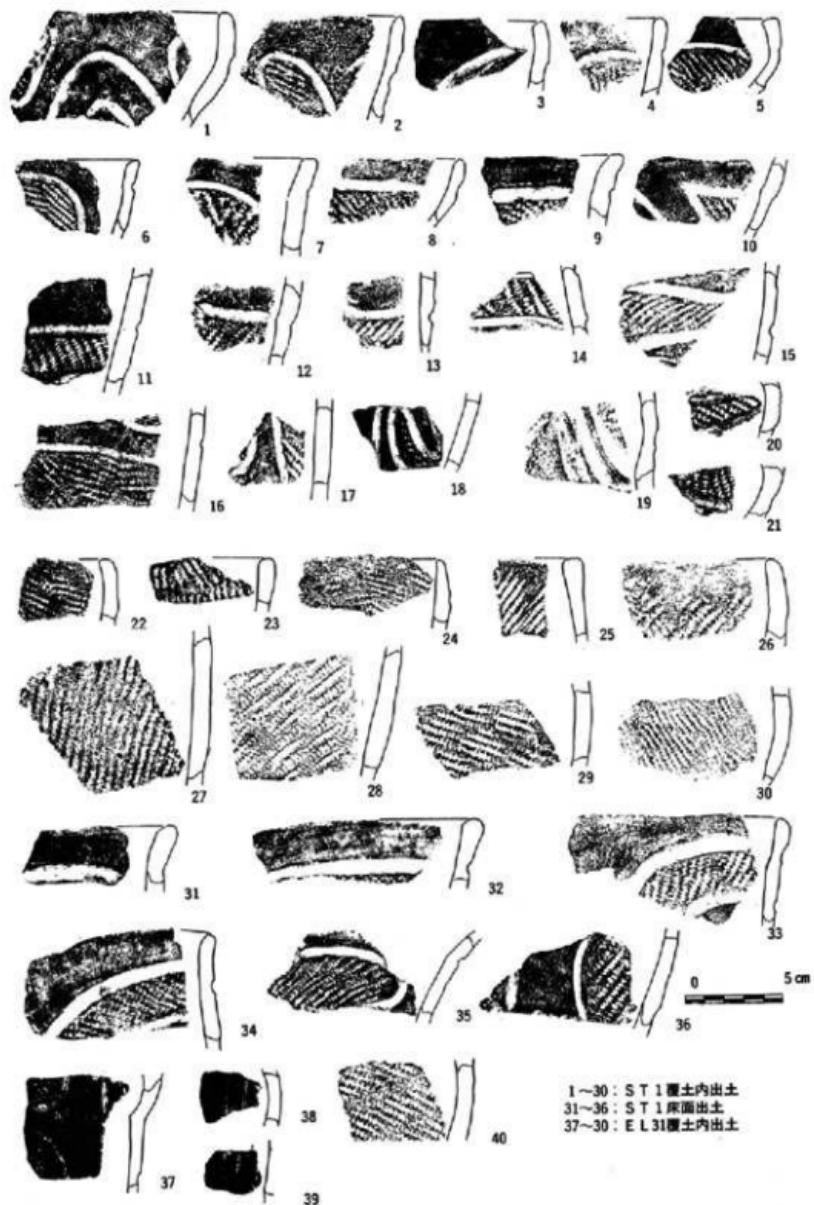
半截竹管により施されたコンパス文が平行あるいは斜状方向に描出されている。(10・11・13・14)は連続された小刺突文の間に施され、(9・12・15~18)では肩部文様帶の上部に小刺突文が、下部では地文をループ文に施されて、文様帶の区画としてコンパス文が描出され、ほぼ平行に走っている。器形はいずれも土器上半が大きく外反する深鉢形の土器で、色調は暗褐色・黒褐色を呈している。

**a 3 類 (第21図41・42 第23図 3~6)**

竹管によって円形の刺突文が施される。連続する小刺突や沈線あるいはループ文などの格子状に集合する部分に認められる。ループ文を地文とするものは(第21図41)、(第21図42)は沈線の集合部分で、連続する小刺突が格子状に施される部分には(第23図4・5)などがある。(第23図3)は波状口縁には波状部の真下にあり、(第23図6)は小刺突が円形に集合する中心部に施されている。

**b 類土器 (第21図34・35・38~40 第23図 2・7・8)**

ヘラ状工具の鋭利な先端を使用し、器面の下方から連続的に刺突して、格子目状や円形状あるいは平行な帯状に走るように施している。(第21図34・35 第23図2)では口縁が平縁となる部分では平行になり、三角形の格子目状になる(第21図38~40 第21図8)などがある。円形状では(第23図8)がある。



第17図 1号住居跡出土土器

### c 類土器 (第23図37・38)

地文が羽状繩文になるもので、いずれも原体がRL・LRを使用して結束のあるものである。今回の調査では量的に希薄であるのが特徴である。

d 類土器 ループ文を地文として施している。その施文法・原体からみて大きく4つに分けられ、3~5本を基本とする多繩文や異節繩文あるいは異条繩文となっており、その原体のほとんどがRLを使用している。ループ文を主とする土器は、今回の調査では量的に最も多く出土している。

#### d 1 類 (第19図1・6 第21図43・45・46)

繩文原体の先端から0.7~1.5cmのある程度の長さを持って施しており、RLの原体が基本となって、横位方向に転している。(第21図46)は羽状になっている。(第6図9 第21図43・45)は規則的に施している。

#### d 2 類 (第21図48~52 第23図19・21・23~25・27~29)

繩文原体の先端から0.3~0.7cmと先端部を利用し施し、施した間隔が非常にせまくなっている。(第23図25・29)はLRの原体を使用している。(第23図19)は口縁部破片で、口唇部付近は異なる原体を使用して羽状になり、ループ文様を主体にa 1類やa 3類の文様構成を描出している。

#### d 3 類 (第23図22・32)

繩文原体の先端部のみ使用するものでd 2類に共通するが、原体先端部を2回転してループ文をつくっているもので、横位方向に転している。

#### d 4 類 (第19図7~9 第21図53~57 第23図32~36)

原体が異範繩文を使用するものとして(第19図8・9 第21図53・57 第23図32・33・36)である。異条繩文となるものは(第19図7 第21図54~56 第23図34・35)である。

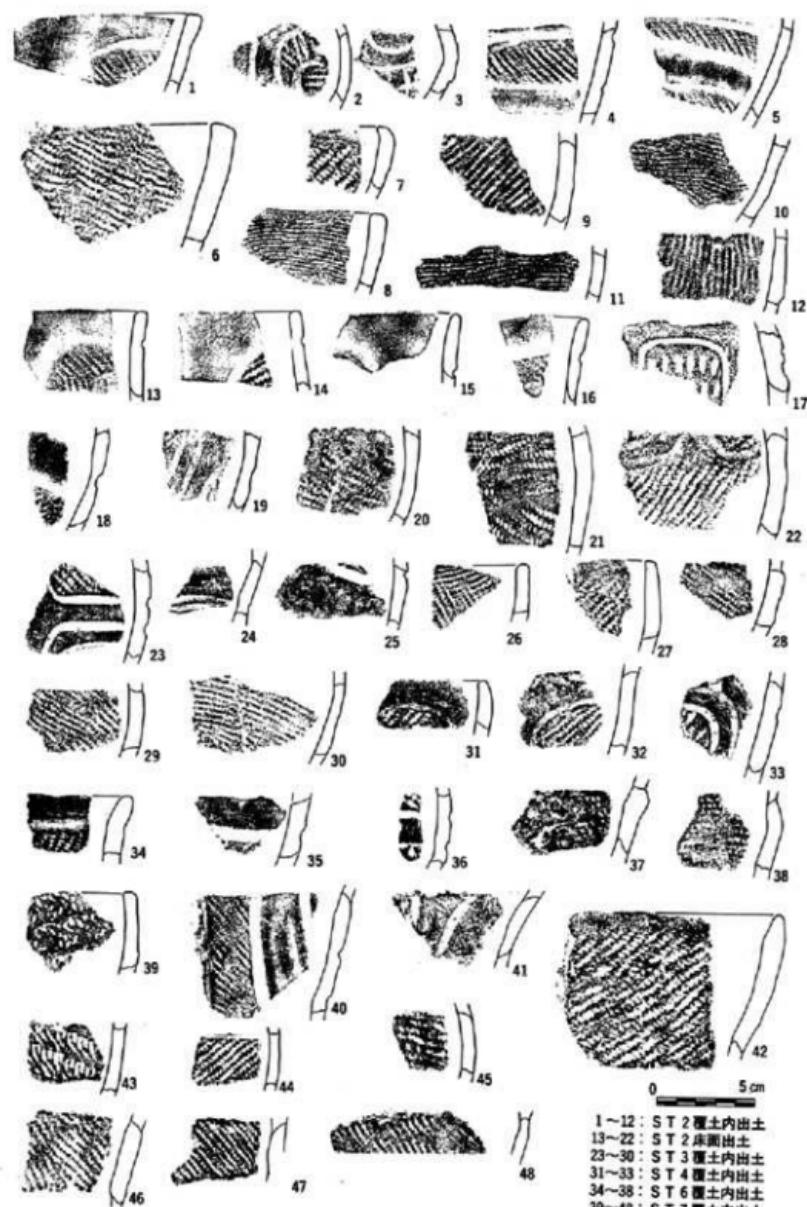
## 第II群土器 繩文時代中期前葉の土器群である。(一部中葉も含むものである。)

### a 類土器 (第21図29・31)

沈線により施され、平行線や方形の区画文が描出される。いずれも浅鉢形土器になるものである。

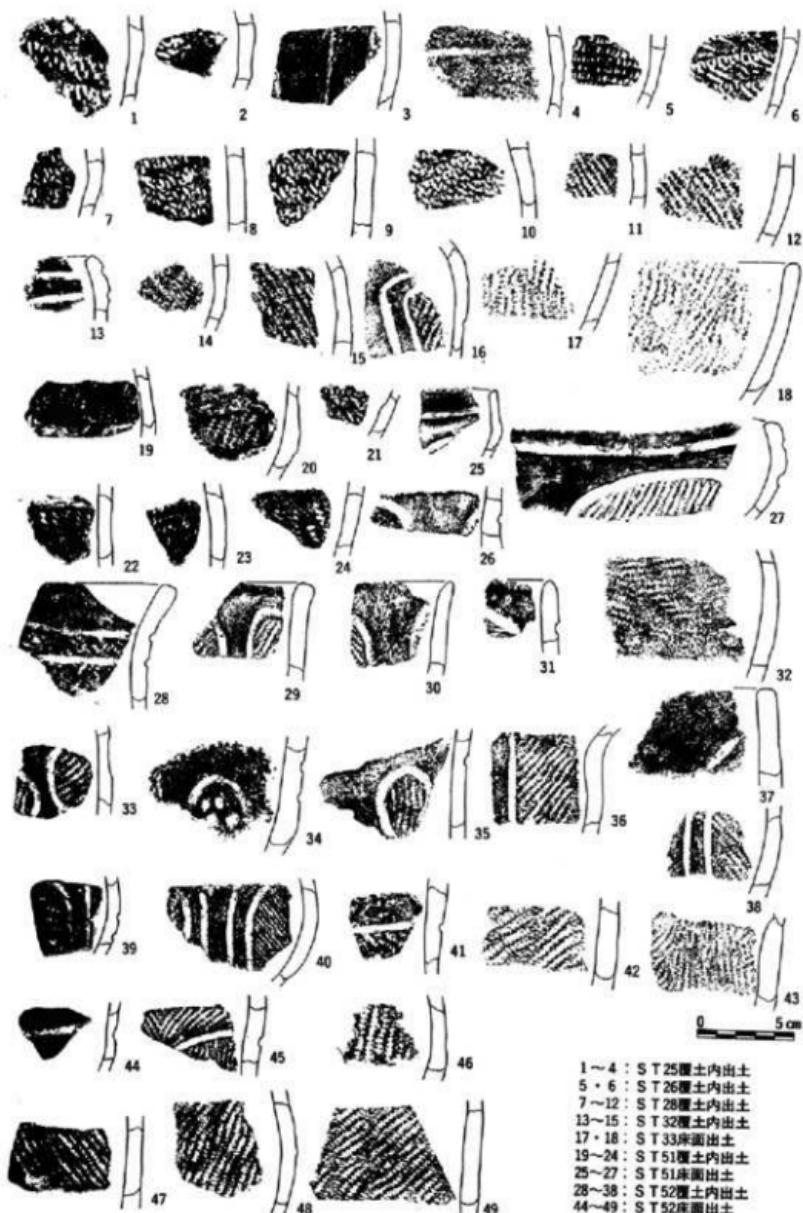
### b 類土器 (第21図20・30)

半截竹管の施文具による連続爪形文が施されている。いずれも口縁部破片であり、口唇下に平行に走っている。(第21図20)は口唇が若干外反し、(第20図30)では口唇が内嚙している。色調は暗茶褐色を呈し、焼成の良い土器である。器形はキャリバーになる深鉢形である。



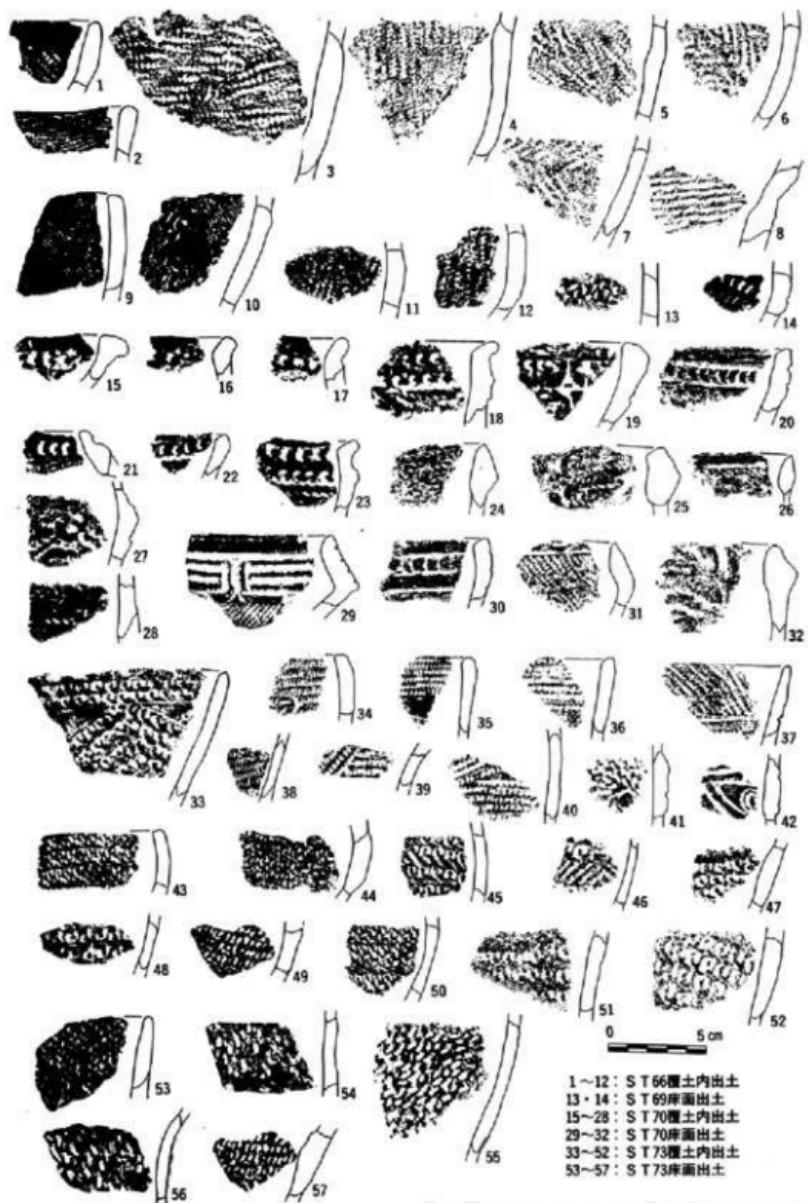
第18図 2・3・4・6・7号住居跡出土土器

- 1~12: ST 2 覆土内出土
- 13~22: ST 2 床面出土
- 23~30: ST 3 覆土内出土
- 31~33: ST 4 覆土内出土
- 34~38: ST 5 覆土内出土
- 39~48: ST 7 覆土内出土



- 1 ~ 4 : ST 25 覆土内出土  
 5 ~ 6 : ST 26 覆土内出土  
 7 ~ 12 : ST 28 覆土内出土  
 13 ~ 15 : ST 32 覆土内出土  
 17 ~ 18 : ST 33 底面出土  
 19 ~ 24 : ST 51 覆土内出土  
 25 ~ 27 : ST 51 底面出土  
 28 ~ 38 : ST 52 覆土内出土  
 44 ~ 49 : ST 52 底面出土

第19図 25・26・28・32・33・51・52号住居跡出土土器  
-38-



第21図 66・69・70・73号住居跡出土土器

c 類土器 (第21図14~17・21~23)

半截竹管によって刺突状に施され、口唇直下にみられるのは (15~17・21~23) でいずれも平行に施されている。(14)は口縁部付近のふくらみの部分に斜状に施されている。(23)には平行に縄文圧痕がみられる。

d 類土器 (第21図18・19・24~28)

縄文圧痕を平行あるいは斜状に施している。(19・24・25・27・28) は貼り付けた隆線の側縁に施され、(26) は粘土紐を貼付した上面に圧痕している。また (18・19・27) のように c 類の刺突文と併用して施されるものもある。口縁部文様帯を中心にして施されるのが特徴である。

e 類土器 (第21図9・10 第24図1~3)

地文が S 字状絡束文を縦位方向に施している。(9)は口縁部破片で口唇から施し、胴部にまでみられる (10)。器形はほぼ直立するような深鉢形である。

f 類土器 (第24図4)

地文が L R の縄文原体を施して、粘土紐の貼り付けによって波状や平行線文を描き出し、平行に貼付された側縁が若干研磨されている。

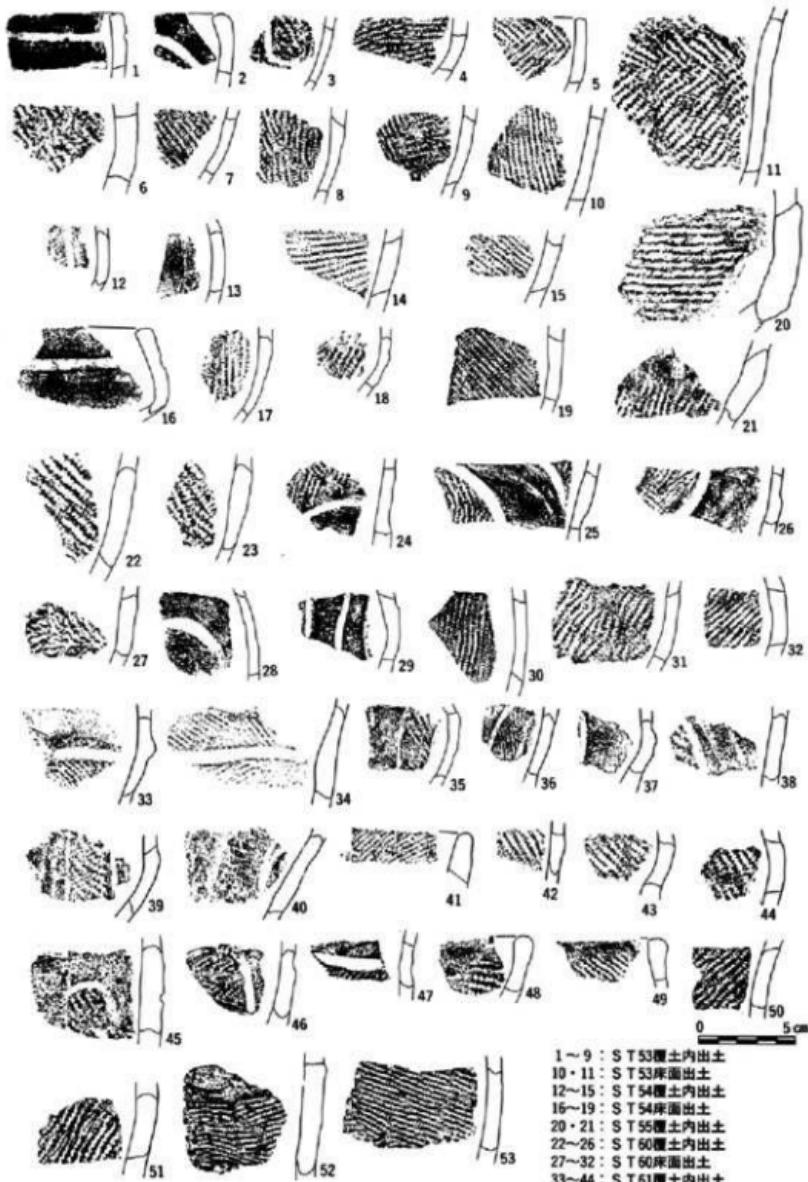
**第三群土器** 縄文時代中期後葉の土器群で、磨消縄文あるいは充填縄文を主とする。

a 類土器 (第19図36~38・40 第20図39・45 第22図13・16・19 第24図6~10)

地文を縦位方向の縄文が施され、磨消し手法がみられる。1~3本の波線によって区画され、文様の主体が楕円文を描出し、文様構成は縦位方向の区画帯となる。器形はキャリバー形の深鉢形土器で、最大径が胴中半部にある。口縁は平縁 (第13図13) や波状になるものなどがある。楕円文は胴中半部まで描出され (第24図6・7・10)、胴下半部では底部へ斜行するように区画している (第24図7・8)。色調は暗褐色を呈し、焼成がよい土器である。

b 類土器 (第18図17 第19図24 第22図6~12)

a 類土器と共に通する文様構成となっている。文様の主体は楕円文を基調として、胴上半から胴中半部まで楕円文が描出されて (第18図17 第19図24) いる。区画の内側や外側に棒状工具の鋭利な先端を使用し列点を施している。区画内に施すものとして (第18図17) (第19図24) があり、(第22図6~12) は区画外に施している。列点は胴中半部下では余り施文されていない。器形は a 類土器と共に、キャリバー形の深鉢形土器になる。口縁部が外反するものとして (第22図6・11)、内弯するものとして (第22図8・9) などがある。



- 1~9 : S T 53層土内出土  
 10~11 : S T 53層土面出土  
 12~15 : S T 54層土内出土  
 16~19 : S T 54床面出土  
 20~21 : S T 55層土内出土  
 22~26 : S T 60床面出土  
 27~32 : S T 60層土内出土  
 33~44 : S T 61層土内出土  
 45~53 : S T 62層土内出土

第20図 53~55・60~62号住居跡出土土器

c類土器 (第17図1～7・17・18・36～39 第18図2・3・19・31～33・40・41 第19図16・29～31・33・35 第20図29 第22図14・15・18・19・29～31 第24図11～17)

器形は、胴中半部に脹らみをもつキャリバー形の深鉢形土器である。充填縄文を手法として、縄文原体の施文はいずれもLR原体を使用されているものが多く、文様区画は研磨や調整が良くなされている。文様は、C字状文やS字状文がほぼ縦位方向に描出され、胴中下半までみられる(第24図7)。文様構成は、縦位方向の区画となり、横に連続しており、口縁部から胴中半部まで描かれている。口縁は小波状口縁(第7図1～7)となっている。

d類土器 (第17図8～16・31～35 第18図1・4・5・13～16・23～25・34～36 第19図27・28・37・44・45 第20図16・24～26・28・33・34・47 第22図28 第24図18・19)

2～5cmの隆帯を良く研磨・調整し両縁ないし側縁が微隆起状になり、区画内の側縁を1～2本の波線で施している。器形は、深形土器で最大径が胴下半部にあり、文様構成はc類土器でみられたS字状文やC字状文がある程度発展し、隆起帯が横U字状に曲線的に横走り、文様帶は胴中半までみられ、胴下半部は縄文帶となるものが多い。口縁部が外反するものが多い(第7図31～33)。充填縄文を主体とするグループである。

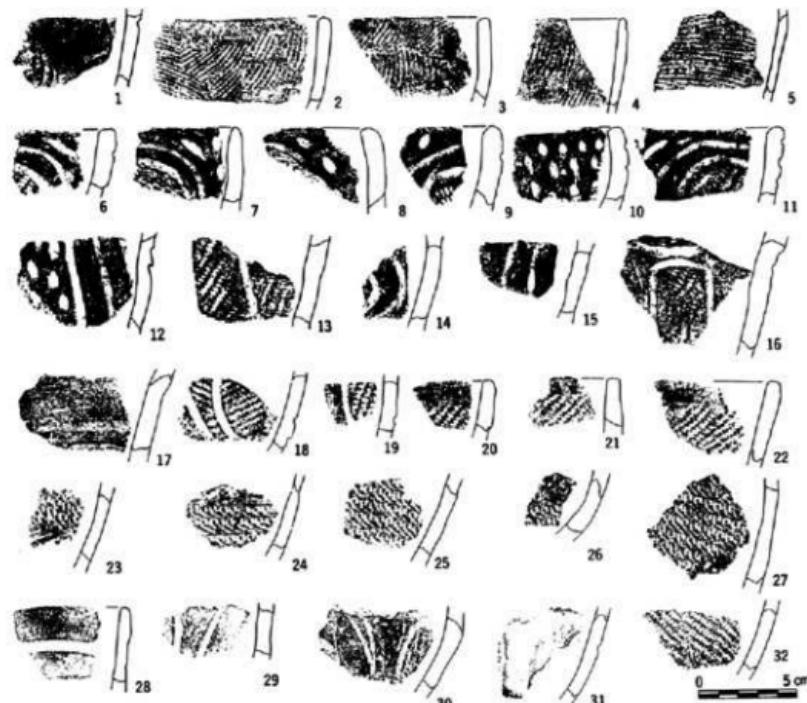
e類土器 (第17図19 第18図22)

粘土帯を貼り付け上面を良く研磨して、側縁を太い線で施している。文様はS字状文を主体として、文様構成は口縁部から胴中半部までみられ、胴下半部から底部にかけては縄文帶となっている。(第18図22)はLR原体を斜状方向に施している。文様帶の縄文の施文は充填縄文となっている。

f類土器 第III群土器の中で、器面全体に地文を縄文として施されるものである。

f1類 (第17図22～24 第18図10・20・21・26・29 第19図49 第20図4～6・11・52 第22図2～5 第24図2・3)

地文を縄文として、口縁部から底辺部まで施されて、口唇付近(第17図22～24・第18図26・第20図5・第22図2～4)から胴中半部(第20図11・第22図5・第24図3)まで羽状に、原体の回転方向を異に斜状に施している。(第7図22～24・第18図26・第20図5・第22図2～4)は口唇部が内彎し、器形は深形土器で、脹らみの最大径が胴上半部にあり、胴下半部から底辺部にかけ、ほぼ直線的になっている。縄文の原体がLRになるものがほとんどであり、R2になるものは(第24図3)である。色調は褐色・暗褐色・黒褐色を呈している。

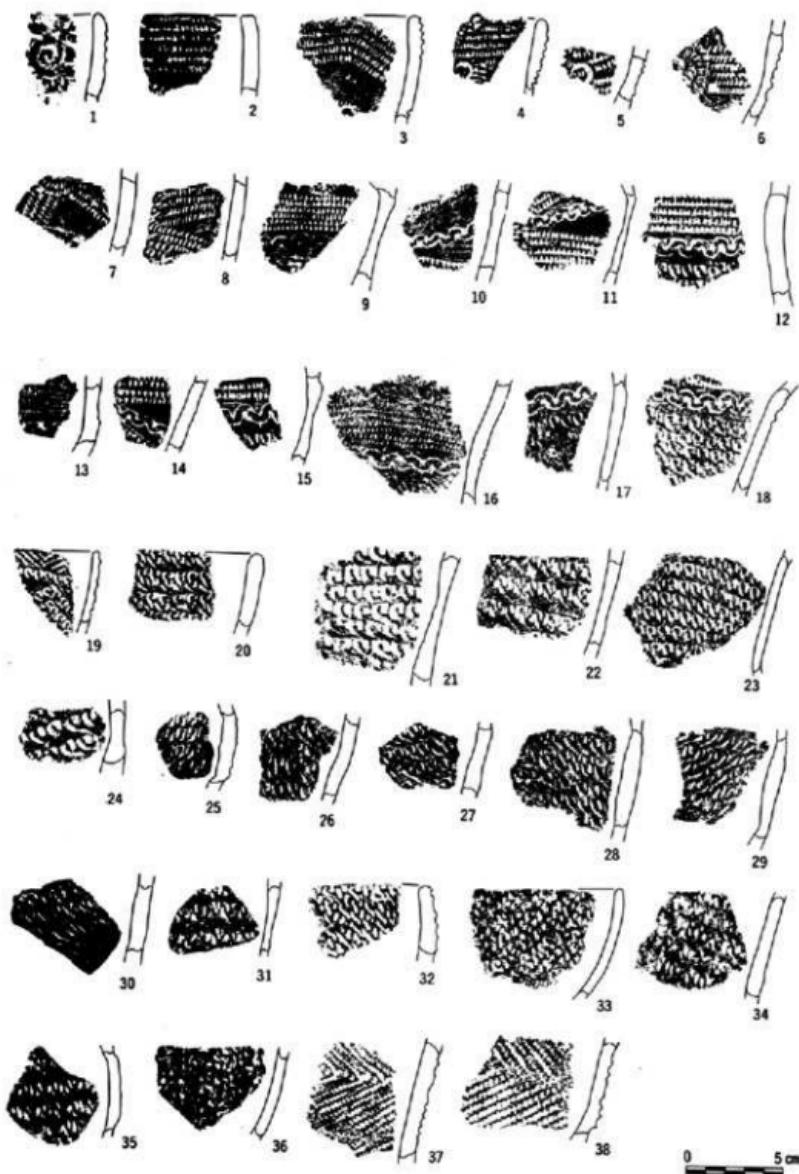


1~5: SK 2 覆土内出土 6~16: SK 8 覆土内出土 17~18: SK 9 覆土内出土 19~22: SK 11 覆土内出土  
23~27: SK 15 覆土内出土 28~30: SK 20 覆土内出土 31~32: SK 21 覆土内出土

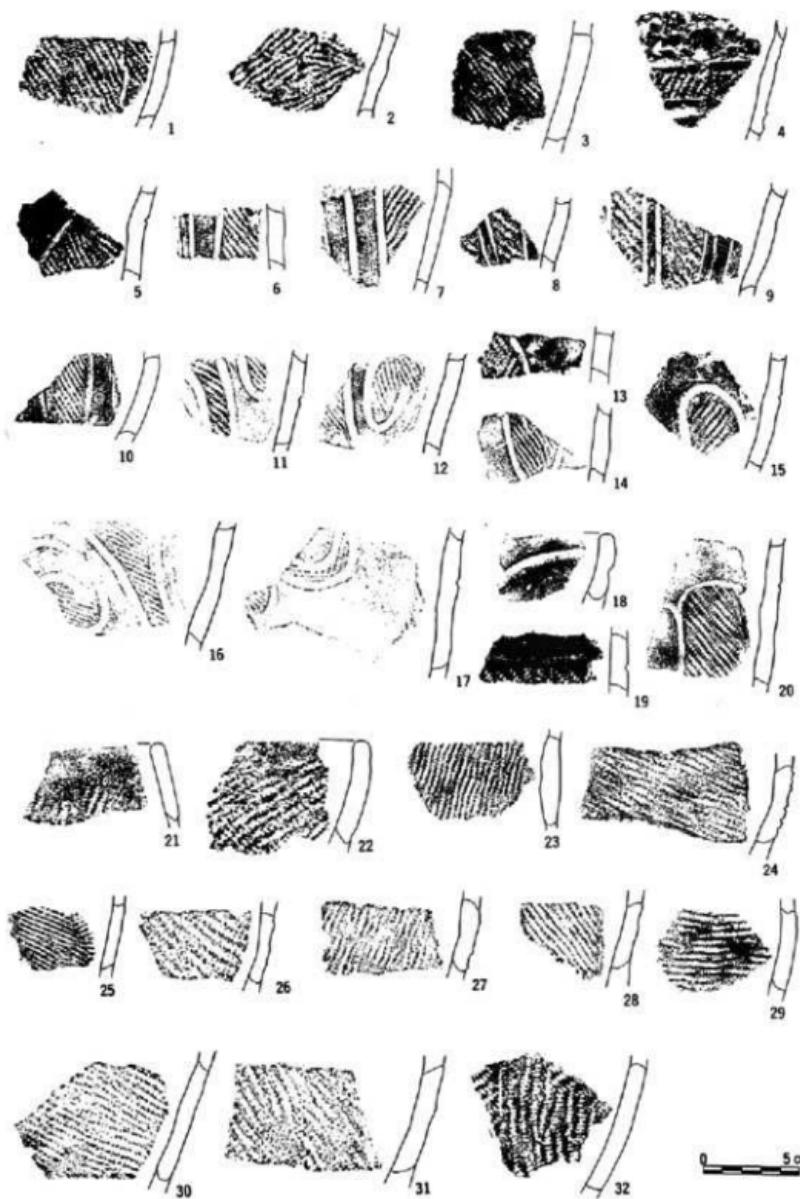
第22図 土壌内出土土器

f 2類 (第17図26~30・40 第18図6・7・27・28・30・42・44~48 第19図17~20・  
42・49 第20図7~10・14~20・17~23・27・41~44・48~53 第22図20~22・  
32 第24図21~32)

器面全体に地文を繩文として施し、いずれも斜状方向より施文している。口縁部は口唇で内湾するものが（第17図25・26・第18図6・42・第19図18・第20図48・第22図20・21・  
第22図21・22）があり、外反するものには（第20図41・第22図21）などがあり、平縁にな  
るものや小波状（第17図26・第18図42・第20図41・第22図22・第24図21）がある。器形は、  
キャリバーになる深鉢形を呈し、f 1類同様な形態である。繩文の原体はそのほとんどが  
L Rの原体を使用し、R L原体を施しているものは（第18図42~44）などがある。色調は  
褐色・暗褐色・黒褐色を呈す。



第23図 包含層出土土器 (1)



第24図 包含層出土土器（2）

### (b) 一括土器

今回の調査で出土した完形・一括土器は16個体になるが、その大半が磨耗が激しいため復元が可能とならず、7個体を図版として示したものである。(図版31・32)

出土した地区は、その大半が住居跡および土壌内の覆土中層より出土し、2基の複式炉からも出土している。時期は縄文時代中期前葉1個体でその他は縄文時代中期後葉の土器である。

#### 第III群c類土器に共通する (図版32-04)

器形は、胴中半部に張らみをもつキャリバー形の深鉢形土器である。胴下半部が欠損し、現存高56cm・口径42cmである。文様構成は、口縁部付近から胴中下半部にかけ縱方向のS字状文と梢円文とで構成され、それぞれ連結されて横位に展開されている。胴下半部から底辺部にかけては、良く研磨されている。縄文の原体はLRが施されて充填縄文となっている。文様の区画は太い1条の波線で連続して描出している。

焼成は良く、ウラ面は丁寧に調整されている。色調は茶褐色ないし褐色を呈している。第9号土壌の中央部・覆土1層より出土し、押しつぶされたように検出された。

#### 第III群d類土器に共通する (図版32-02)

1号住居跡中央部覆土中より投棄された状態で出土している(図版6)。器形は、深鉢形土器で最大径が胴下半部にある。現存高は24cmである。文様帯は胴中半部までみられ、胴下半部以下は縄文帯となっている。1本の太い波線で施され、微隆状になっている。文様構成は、S字状文が発展し曲線的に横走し、横位方向に展開している。RLの縄文原体を使用し充填されている。胴下半部では斜状方向に施している。器面全体が丁寧に調整されているが、二次的な磨耗を受けている。

#### 第III群f1類に共通する (図版31-01・図版32-03)

(01) 1号住居跡内E L31(複式炉)埋設土器で、正位の状態で埋設されている。底辺部が欠損している。器形は胴上半部に最大径を持つキャリバー形の深鉢形土器である。現存高46.6cm・口径51cmである。口唇部付近5~6cmの帶状幅で羽状になる縄文が施されており、その下方から底辺部付近にかけてLRの原体となる地文が縄文である。

焼成は全体的に良く、色調は黒褐色や暗褐色を呈し、器面ウラ側は丁寧に研磨・調整しているが、炉埋設土器のため二次焼成を受けているため部分的にもろくなっている。胎土には石英の大粒などが混入されている。

(03) 3号住居跡の中央部の東側寄り、覆土中層より廃棄されたような状態で出土している(図版7)。器形は胴上半部に最大径を持ち胴下半部より直線的になり、口径に対して底径が非常に小さくなるキャリバー形の深鉢形土器である。口唇部が内彎している。現存高42.8cm・口径34.5cmである。(01)と同様に口唇部付近から7~10cmの帯状幅で、横位方向に羽状になる縄文が施されている。地文を縄文としてLRの原体を使用して、やや斜状方向に施している。

色調は褐色を呈し部分的に黒褐色になっている。焼成もよく、特に器面ウラ側では良く研磨・調整がなされている。

#### 第三群 f 2類土器に共通する(図版32-05・06・07)

(05) 37-21グリッド内のII層中より出土する。ほぼ倒立の状態で出土しており、口縁部から胴上半部にかけて欠損している。器形は、深鉢形を呈する土器である。現存高は28.4cm・底径10.5cmである。器面全体に縄文を施しており、縄文原体はLRを使用している。斜状方向から原体を施している。底辺部はやや丸味をおびており、底部は若干上げ底となっている。

色調は、茶褐色を呈し部分的に暗褐色となっている。器面の表側はザラザラしているが、ウラ側は良く調整されている。

(06) 61号住居跡の中央部東側寄りの覆土下層から出土し、投げ棄てられた状態で検出されている(図版17)。器形は、口唇部が若干内彎し、胴上半部に最大径となるキャリバー形の深鉢形土器である。胴下半部が欠損している。現存高は36.3cm・口径24.5cmである。器面全体に縄文を施しており、縄文原体はLRを用いており、やや斜状方向から施文している。口唇部付近1~1.2cmの帯状幅に研磨されている。

色調は、明褐色を呈し部分的に暗褐色になっている。器面全体の焼成は余り良くなく、ザラザラしている。

(07) 9号土壙の中央部より(04)とともに出土したものである。器形は(06)と同様に、口唇部が若干内彎し、胴上半部に最大径をとるキャリバー形の深鉢形土器である。胴下半部から底部にかけて欠損している。器面全体に縄文を施しており、RLの縄文原体を使用している。やや斜状方向から施文している。口唇部付近では帯状に研磨がなされている。色調は、褐色あるいは茶褐色を呈し、器面の表側はザラザラしているが、ウラ側では良く調整がなされている。

### (c) 石器

今回の調査で出土した石器は、整理箱で58箱である。大半が、遺構内及びその周辺から出土しており、遺構の配置状況並びにその検出数に比例して確認されている。

石器の種類は、石錐・石錐・石匙・搔器・削器・箒状石器・石槍・磨製石斧・凹石・磨石・石皿・砥石・石錘・有孔石製品・垂飾品・石製模造品・線刻疊等がある。石材は、打製石器がほとんど頁岩でこれにチャート・鉄石英が若干用いられている。磨製石器では、磨製石斧が流紋岩・砂岩を用い、他は砂岩・安山岩・凝灰岩等が用いられている。

#### 石錐 (第25図1~19 図版33)

中茎の有無により、無茎と有茎のものとに分けられ、さらに全体及び基部の形態の違いから次の6つに分類される。

a類 (1~8) 正三角形ないし二等辺三角形を呈し、無茎で基部の抉りが浅いものである。側縁部は若干丸みを有し、先端部にかけては比較的幅が広い特徴をもつものが多い。全体に抉り幅は広く施されているが、脚部が内彌して狭くなっているもの(4)とみとめられる。

b類 (9~14) 二等辺三角形を呈し、無茎で基部の抉りが深いものである。全体に薄手の作りで、直線的な側縁を描く。そのため前類に比し、先端部は幅が狭く作り出されており銳利である。

c類 (15~16) 抉りが深く、身の中央から側縁部が反り返り、先端部が細身に鋭く作出される。中でも(15)は、脚部が長くその先端も細く銳利である。

d類 (17) 基部の突出が短く、菱形の外形を呈するもので、小形で身の薄いものである。

f類 (18) 二等辺三角形を呈し、基部の突出する有茎錐である。

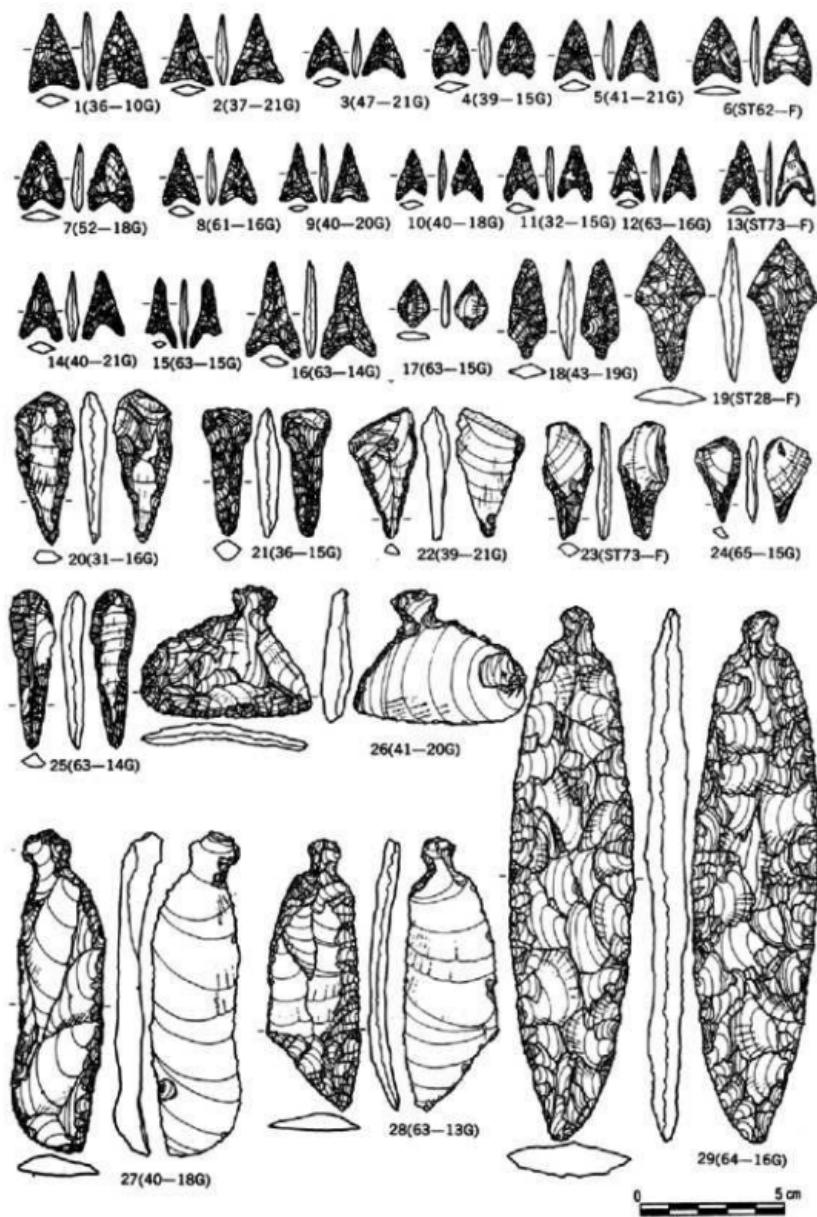
g類 (19) 他の類に比して大形の有茎錐である。基部の作りも太く、形態は石錘に類似する。

#### 石錐 (第25図20~25 図版33)

錐部及びつまみの違いから、2つに分けられる。

a類 (20~21~25) 縱長剥片の側縁及び基部に剥離を加え、錐部とつまみ(21)を作出する。そのため全体的に棒状(21~25)並びに箒状を呈し、錐部もb類に比べ側縁部が平行にのび長目である。

b類 (26~29) 不定形な剥邊の一端に剥離を施し、錐部を形成する。基部には、あまり加工が行なわれず、一部自然面を残すもの(22)もみとめられる。錐部は、短く鋭角に作出される。



第25図 石器実測図（1）

### 石匙 (第25図26~29 第26図1~5 図版33)

刃部とつまみの位置関係から縦形と横形に分けられ、さらに刃部形態により5つに分けられる。

a類 (26) つまみと刃部が直交する横形石匙で、つまみは剝片の一端に両側から調整を加えて作られている。刃部は片面加工で、ほぼ直線を呈する。

b類 (27) 縦形石匙で、つまみは縦長剝片の基部が用いられ比較的大形である。刃部は片面加工で、背面右側縁から直線にのび先端部でほぼ直角に角張る。また、使用による磨滅がみとめられ、特に先端部が顕著である。

c類 (28・3~5) 小形のつまみをもつ縦形石匙で、刃部はつまみと斜交し切出し状に鋭く作られる。本類は小形のもの(5)もみとめられるが、形状は定型的によくまとまっている。

d類 (29) 石槍を呈する大形の石匙である。両面加工により柳葉形に仕上げられ、他の類とは大きさ・形状において異なる石器である。基部のつまみは小さく、断面形態は薄い凸レンズを示す。身の側縁部中央から先端部にかけては、使用によるものと思われる磨滅がみとめられる。

e類 (1・2) 長さ5cmの大形の小形の縦形石匙である。縦長剝片の基部につまみをもち、比較的細身の石器である。側縁部はほぼ平行にのびて、直線的な刃部を形成する。

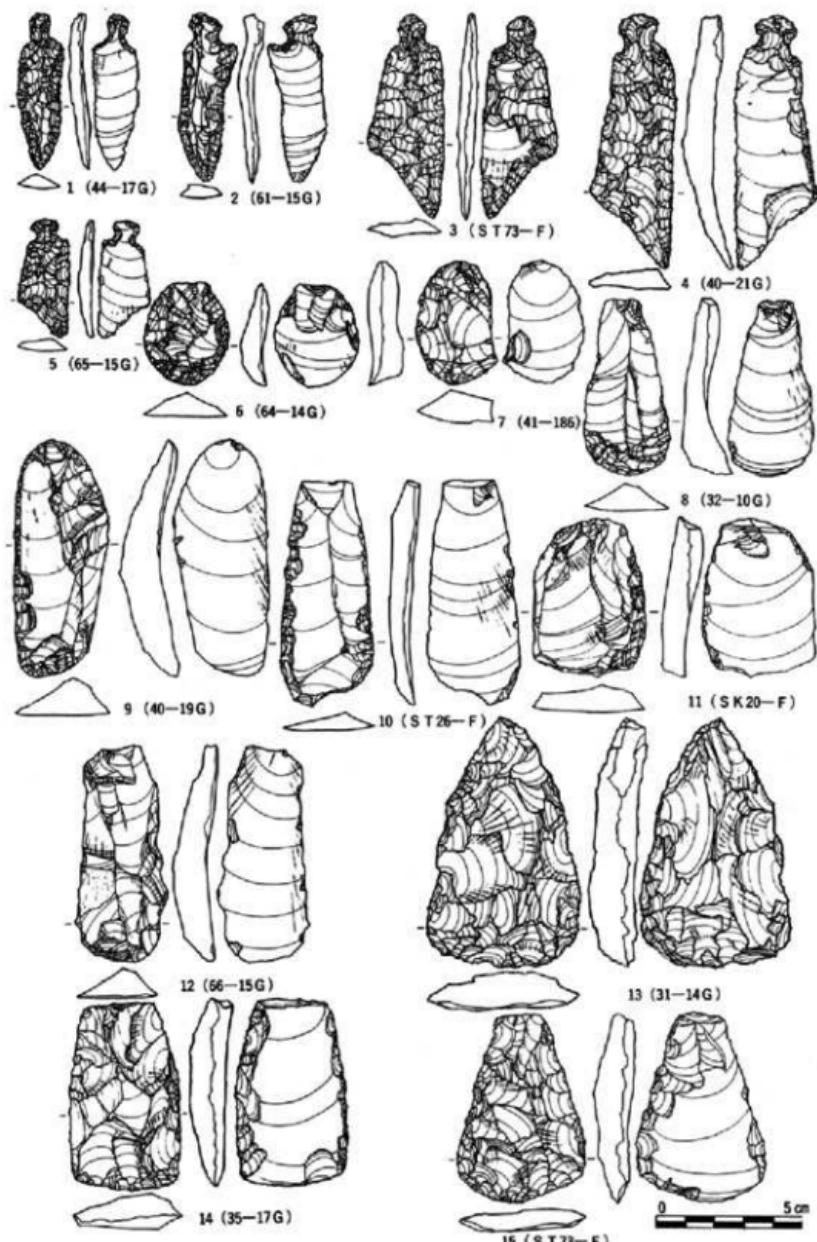
### 搔器 (第26図6~8 図版34)

剝片の先端に入念な剝離を施し、主要剝離面に対して急角度の刃部をもつ石器で、大半が片面加工である。外形は円形のもの(6・7)や、縦長のもの(8)などがみとめられるが、刃部形態については、弧状を呈し甲が高いこと等、ほぼ同じような特徴を呈する。

そこで外形・大きさなどにより、次の2つの分類が考えられる。

a類 (6・7) 長さ4cm前後と小形で、円形ないし稍円形を呈するもの。刃部・側縁部とも調整が行なわれ形態が整えられている。一般に刃部の剝離は放射状の桶状剝離があり、それ以外はやや幅が広く、1・2回の剝離により背面中軸線上に稜を形成する。それらは、主として片面加工であるが、(b)は基部を薄く調整するために、両面加工を施しバルブを取り除いている。(7)は、基部に約5mm程打面がありバルブを残している。また剝片素材を取る際、石材の結晶部分に入ったため一部不整形に剝がれ、背面右側が厚く剝落したように途切れている。

b類 (8) 長さ約6cmの縦長剝片を用い、エンドスクレーバー状を呈する石器である。刃部は、弧状を呈し丁寧に調整が行なわれ、背面の稜に向かって剝離を加えている。ただ前類よりも刃部の幅が広いため、全部の剝離が集中するのではなくやや拡散気味である。



さらに調整は片面加工であるが、全て刃部についてのみ行なわれている。

側縁部は小さな刃遣し程度の連続する剝離のみで、基部は打面及びバルブを残している。

#### 削 器 (第26図9~11 図版34)

縦長剝片の側縁部に、刃部をもつ石器である。刃部の角度は鋭角で、搔器に比べ薄刃である。それは、ほとんど片面加工によるものである。

外形及び刃部形態等により次の3つに分けられる。

a類 (9) 背面右側縁の一部を除き周縁に調整を施し、左側縁部に直線的な刃部をもつ石器である。また基部及び先端部も丁寧に丸く仕上げられ、背面の稜も舟底状に中央部が高く、他の類に比べ身の厚いものである。側縁部の剝離は、左側が細く連続し、右側は幅広く・長目に行なわれ、背面における母岩からの剝離面は、右側の一部と左側に残すのみである。

b類 (10) 基部を除き両側縁部に調整を施し、直線的な刃部を作る石器である。前類に比べ、身が薄く母岩からの剝離面を大きく残す。基部は、打面を幅約1.8cm残し、バルブもそのままである。

c類 (11) 長さに比し幅広い剝片を用い、右側縁部にやや丸味のある刃部をもつ石器である。刃部は約4cmを測り、基部から先端部への連続する剝離で仕上げられている。背面には、多くの剝離面を残し、母岩から素材の剝片を作る際何回にもわたって剝離を行なったことがみとめられる。そのため背面が平坦で、断面形態が台形を示す。

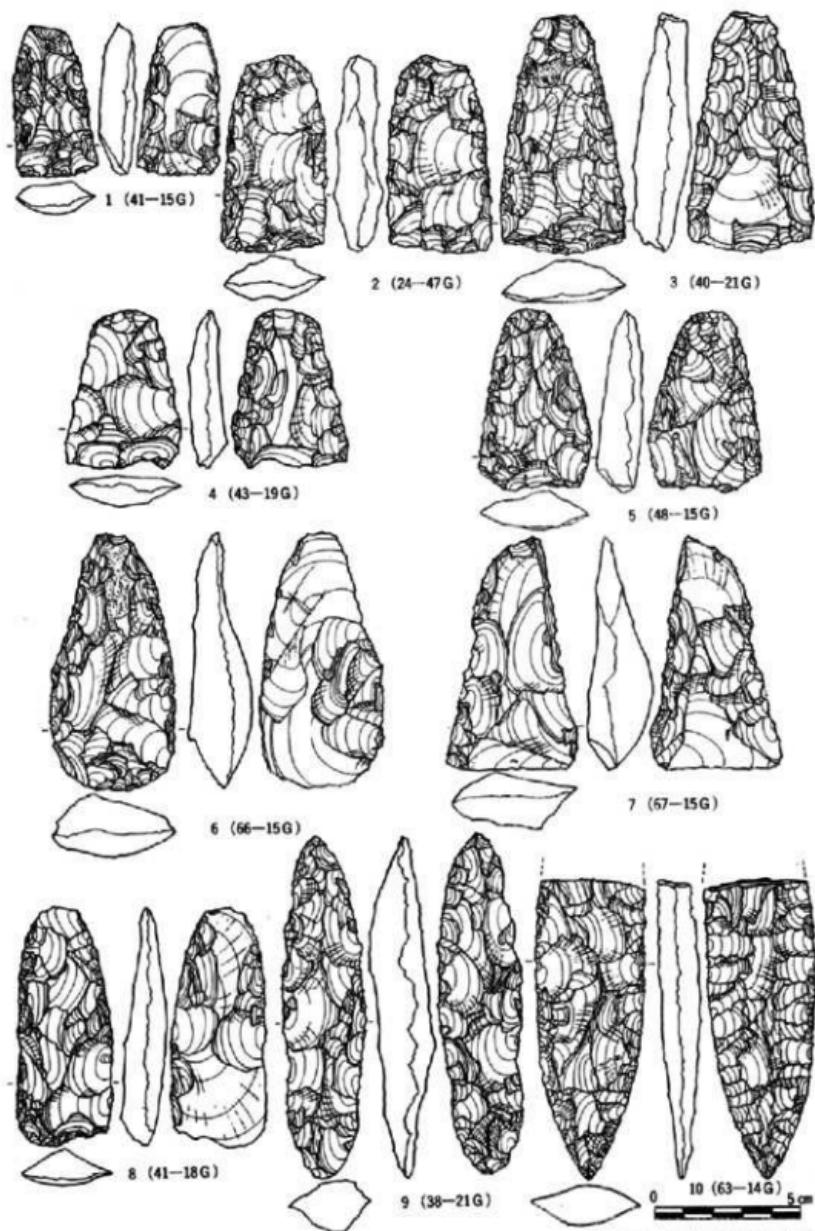
#### 範状石器 (第26図12~15 第27図1~8 図版34)

名の通り範の形をした石器で、通称石範とも呼ばれる。外形及び刃部形態により次の4つに分けられる。

a類 (12・14 1・2・8) 刀部と基部との幅の差があまり違わない、短冊形をした石器である。側縁部は両面加工によりほぼ平行に走り、刃部は片面ないし半両面加工により直線的に仕上げられ、鋭い片刃を呈する場合が多い。また主要剝離面の観察から、横長の剝片を素材に用いているもの(1・8)もみとめられる。

なお、(12)は刃部に粗い二次剝離を施す以外は、ほとんど母岩において素材を成形する一次剝離面であり、一部自然面も残している。そのため搔器に分類されることも考えられるが、刃部の剝離が棒状に走らずかつまた背面の稜に放射状に集中しないこと、さらに刃角が急でないことなどの観点から、一応本石器群に分類した。

b類 (13・15) 基部が尖るかあるいは細身で、刃部に対して直線的に大きく開く石器である。刃部は、緩い弧状を呈し両面と片面加工による場合があるが、前者の場合片刃に刃部を整形するために、主要剝離面側を平坦に調整したもので、本来は片面加工が主体と



第27図 石器実測図 (3)

思われる。

c類（3～6） 前類よりもやや幅の広い基部をもち、刃部に対して直線的ないしやや内彎して開く石器である。形状はa類に似ているが、側縁部の開き角度が少し大きくまた刃部の幅も広い。側縁部は両面加工による調整が行なわれ、刃部は片面（6）ないし半両面（3）加工で仕上げられ、直線的なもの（3）と緩い弧状のもの（6）がある。なお、この石器の素材は、横長剣片を用いる場合（3・4・6）が多くみとめられる。

d類（7） 一次剥離面をそのまま刃部とする石器である。刃部は直刃で鋭く、所謂トランシェ様石器の特徴を示す。側縁部は、両面から比較的幅の広い剥離により粗く調整され、直線的に開く。この石器は、他の類に比べ一次剥離の段階ですでに目的に刃部が決定している点が特異である。

#### 石 槍（第27図9・10 図版34）

出土数は少ないが、形状・大きさにより2つに分けられる。

a類（9） 身が厚く、やや橢円形状を呈するもの。側縁部は両面から交互に剥離が加えられ、中央下部に少し抉りを入れ基部を作り出している。基部は着柄し易くするためか、身よりも薄く調整されている。

b類（10） 大形で、柳葉形を呈するもの。両面とも押圧剥離による調整が行なわれ、橢状の剥離が連続して流麗に仕上げられている。

#### 磨製石斧（図版35—1・7～10）

いずれも定角式の磨製石斧である。外形は、短冊形を呈し、小形のもの（1）もみとめられる。ほとんどが刃部ないし基部も欠損しており、使用状態が推定される。刃部は直線的なもの（1）と円味を呈するもの（7・9）とに分けられる。

#### 凹 石（図版35—11・12・14～16）

円形ないし橢円形の自然石の中央部に、1～数個の凹みをもつ石器である。凹みは、離れている場合（15）や重複している場合（11・12・16）に分けられる。また、ほとんど加えの両面にみとめられる。

#### 磨 石（図版35—14 図版36—8）

円形や橢円形を呈する自然石の両面及び周囲に、磨滅した磨面をもつ石器である。凹みの有無を除けば、形状は凹石に類似する。また石材についても、同様である。

#### 石 盆（図版35—13 図版36—9）

扁平な自然石の表面に皿状に凹んだ、磨面をもつ石器である。形状は、長方形ないし不整橢円形を呈する。（3）は、他の石盆が長さ30～40cm前後であるのに比べ、長さ7cmと極端に小さく、同じ製粉機能でも目的が異なるのかもしれない。

### 砒 石 (図版35—4 図版36—5・7)

不整梢円形ないし棒状・角柱状の自然石が用いられている。(4)は縦走する数条の溝を残し、(5・7)は石の平滑な表面を砥ぎ面にしており、機能の違いがみとめられる。

### 石 錐 (図版36—1～4・6)

円形ないし梢円形の扁平な自然石の両端を打ち欠いて抉りを入れ、ひもかけとした石器である。凹石や磨石を二次使用している場合もみとめられる。

### 有孔石製品 (図版35—2)

不整梢円形を呈する自然石の一端に、穴をもつ石製品である。表面は、自然面を残したまま、他に加工は行なわれていない。

### 垂飾品 (図版35—3)

玉髓質の石材を用い、研磨を加えて牙状に仕上げた石製品である。基部に両面方向からあけられた小孔をもつ。長さは、2.3cmを測り小形である。

### 石製模造品 (図版35—5)

三日月形ないし勾玉状の石製品である。明瞭な加工痕及び小孔は、みとめられない。

### 線刻礫 (図版35—6)

扁平な梢円形の自然石の両面に縦横方向に、鋭い溝が刻み込まれている石製品である。

表—4 篓状石器（含トランシエ様石器）計測表

拂団番号	出土区	大きさ (mm)			重さ (g)	石 材	遺存状態
		長	幅	厚			
26—12	66—15	73	32	15	25.2	頁 岩	完 形
26—13	37—14	85	53	20	67.8	頁 岩	完 形
26—14	35—17	63	37	15	36.2	頁 岩	完 形
26—15	ST—73	64	44	14	29.0	頁 岩	完 形
27—1	41—15	52	28	14	16.7	頁 岩	完 形
27—2	24—47	67	36	17	36.7	頁 岩	完 形
27—3	40—21	82	42	20	60.8	頁 岩	完 形
27—4	43—19	54	40	13	25.6	頁 岩	完 形
27—5	48—15	62	39	16	35.6	頁 岩	完 形
27—6	66—15	88	43	22	71.8	頁 岩	完 形
27—7	67—15	80	45	23	(58.0)	頁 岩	(トランシエ様石器) 一部欠損
27—8	41—18	42	28	12	15.6	頁 岩	完 形

表一5 石錠計測表

擲出番号	出土区	大きさ (mm)			重さ (g)	石材	遺存状態
		長	幅	厚			
25-1	36-10	21	17	4	1.3	頁岩	完形
25-2	37-21	29	18	4	1.0	頁岩	完形
25-3	40-21	17	14	3	0.5	頁岩	完形
25-4	39-15	20	13	4	0.8	頁岩	完形
25-5	41-21	21	14	4	0.8	頁岩	完形
25-6	ST-62	23	15	3	1.0	チャート	完形
25-7	52-18	23	16	4	1.0	頁岩	完形
25-8	61-16	19	13	3	0.6	頁岩	完形
25-9	40-20	20	(13)	3	(0.5)	頁岩	脚部欠損
25-10	40-19	17	11	3	0.3	頁岩	完形
25-11	32-15	(18)	12	2	(0.6)	チャート	先端欠損
25-12	63-16	18	(11)	3	(0.4)	頁岩	脚部欠損
25-13	ST-73	22	13	2	0.5	頁岩	完形
25-14	40-21	24	15	4	0.7	チャート	完形
25-15	63-15	24	(11)	3	(0.4)	チャート	脚部欠損
25-16	63-14	33	18	4	1.5	頁岩	完形
25-17	63-15	16	11	3	0.5	頁岩	完形
25-18	43-19	34	13	5	1.9	頁岩	完形
25-19	ST-28	50	24	9	4.9	鉄石英	完形

表一6 石錠計測表

擲出番号	出土区	大きさ (mm)			重さ (g)	石材	遺存状態
		長	幅	厚			
25-20	31-16	52	20	9	7.4	頁岩	完形
25-21	36-15	43	17	8	4.2	チャート	完形
25-22	39-21	44	23	10	5.4	鉄石英	完形
25-23	ST-73	39	17	5	2.8	頁岩	完形
25-24	65-15	29	15	4	1.5	チャート	完形
25-25	63-14	54	15	8	4.4	頁岩	完形

表-7 石匙計測表

擲図番号	出土区	大きさ (mm)			重さ (g)	石材	遺存状態
		長	幅	厚			
25-26	41-20	46	57	11	17.9	頁岩	完形
25-27	40-18	111	32	15	28.9	頁岩	完形
25-28	63-13	93	32	11	14.5	頁岩	完形
25-29	64-16	183	43	16	91.0	頁岩	完形
26-1	44-17	53	15	7	3.7	頁岩	完形
26-2	61-15	57	20	9	5.3	頁岩	完形
26-3	ST-73	69	26	7	9.0	頁岩	完形
26-4	40-21	86	29	18	20.8	頁岩	完形
26-5	65-15	39	18	5	2.6	頁岩	完形

表-8 搾器・削器計測表

擲図番号	出土区	大きさ (mm)			重さ (g)	石材	遺存状態
		長	幅	厚			
26-6	64-14	35	29	10	8.0	頁岩	完形(撹)
26-7	41-18	81	33	15	37.1	頁岩	完形(撹)
26-8	32-10	61	30	18	16.7	頁岩	完形(撹)
26-9	40-19	80	33	20	32.9	頁岩	完形(撹)
26-10	ST-26	77	32	11	15.0	頁岩	完形(削)
26-11	SK-20	55	39	14	25.6	頁岩	完形(削)

表-9 石槍計測表

擲図番号	出土区	大きさ (mm)			重さ (g)	石材	遺存状態
		長	幅	厚			
27-9	38-21	117	29	22	57.5	頁岩	完形
27-10	63-14	(103)	(37)	(14)	55.1	頁岩	先端欠損

表-10 磨製石斧他計測表

(単位: cm・g)

器種	図版番号	出土区	最大縦	最大横	最大厚	重量	遺存状態
磨製石斧	35-1	ST-73	6.6	2.9	1.1	31.9	完形
有孔石製品	35-2	63-13	4.7	3.9	2.9	41.3	完形
垂飾品	35-3	63-15	2.3	0.65	0.48	0.95	完形
砥石	35-4	35-21	9.8	6.2	1.4	62.3	完形
石製模造品	35-5	42-18	4.6	2.5	1.2	9.6	完形
線刻彫	35-6	ST-4	(5.0)	(5.0)	(2.5)	(39.2)	△欠損
磨製石斧	35-7	44-16	(8.3)	6.2	(2.3)	166.3	基部欠損
刀	35-8	ST-52	(12.2)	(4.6)	(2.6)	(214.9)	刃部欠損
刀	35-9	SK-8	11.1	4.9	2.2	123.8	完形
刀	35-10	33-12	(10.5)	5.3	(2.2)	(183.7)	刃部欠損
凹石	35-11	ST-7	9.5	7.8	5.0	383.3	完形
刀	35-12	39-19	8.9	8.9	3.8	383.6	完形
石皿	35-13	42-21	7.0	5.9	4.8	179.6	(碗状を呈する) 一部欠損
磨石	35-14	62-15	9.9	6.9	4.1	394.5	完形
凹石	35-15	ST-52	10.0	8.3	4.4	495.0	完形
刀	35-16	ST-73	11.2	9.2	4.3	469.0	完形
石錐	36-1	ST-73	8.2	5.2	2.0	104.5	完形
刀	36-2	39-20	10.6	8.6	2.5	265.4	完形
刀	36-3	35-20	9.4	7.2	2.0	157.4	完形
刀	36-4	64-15	9.1	6.9	2.9	172.1	一部欠損
砥石	36-5	42-20	(10.9)	(5.0)	(2.6)	(253.8)	一部欠損
石鍤	36-6	SK-21	10.0	7.7	2.5	274.3	完形
砥石	36-7	ST-25	(18.3)	(6.7)	(3.3)	(593.8)	一部欠損
磨石	36-8	37-16	12.8	10.6	6.2	1138.9	完形
石皿	36-9	ST-73	(15.4)	(15.1)	(4.9)	(1462.7)	一部欠損
刀		26-52	28.8	22.5	6.2	2513	完形
刀		35-20	28.5	23.1	7.9	7004	完形
刀		37-18	(31.6)	(21.3)	(9.2)	9008	半欠
刀		34-17	45.7	36.8	6.9	8010	完形
刀		ST-52	30.8	23.6	8.8	1006	完形

## V まとめ

今回発掘調査した墓塚遺跡は、小国盆地の南西部に位置し、横川の右岸の沖積河岸段丘の微高地上に立地し、縄文時代前期前葉および中期前葉から後葉にかけての集落跡である。本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡34軒・土壙32基・溝跡1であり、出土した遺物は主に土器・石器で整理箱に約94箱を数える。

今回は、小国町増岡地内に昭和56年度に一連の県営ほ場整備事業（井の地区）に係る緊急発掘調査を実施したものであり、これら記録をまとめたものが本報告書である。

### (1) 遺構について

本遺跡で検出された遺構のほとんどが、A地区に遍在して分布している。時期的には、縄文時代前期と中期前葉と中期後葉の3時期に区分され、遺構の変遷を概観する。

#### 第Ⅰ期（縄文時代前期前葉）

A地区では、中央部の南側寄りに72号土壙のみ在り、住居跡などは検出されていない。しかし、遺物の分布をみると大きく3地域に分けられ、27号住居跡・54号住居跡および62号住居跡の周辺部に第Ⅰ群d類土器が出土し、遺物の分布のみ確認される。

B地区は、北側の中央部で73号住居1軒が大きさ17.56mにおよぶ大形住居跡として検出されている。遺物の分布もその周辺域からも第Ⅰ群a・d類土器が多量に出土しており、第Ⅱ群土器・第Ⅲ群土器はまったくみられない。

#### 第Ⅱ期（縄文時代中期前葉）

A地区的南東側の平坦地に在り、66～69号住居跡と隣接して73号住居跡の5軒が位置している。住居跡の特徴は、平面形が楕円形ないし方形を呈し、大きさ6m前後のやや大形の住居跡で、支柱穴が1本から2本になり住居中央部に直線的に配列され、支柱穴が壁にそってめぐっている。支柱穴1本の住居跡は、66・67・68号住居跡で、69・73号住居跡は2本となっている。また73号住居跡は2期に亘って、北側へ伸るように建替を行っている。

第Ⅱ群土器は、これら住居跡周辺より出土し、b類土器・c類土器は73号住居付近より多く出土している。

#### 第Ⅲ期（縄文時代中期後葉）

本遺跡の主となる時期で、A地区に密集して遍在している。遺構群の分布する状況は、A地区の中央部付近にほとんど遺構が検出しており、空間地帯となっており、住居跡は①南西側の緩傾斜地、②西側の緩傾斜地、③北側中央の西寄り平坦地と、④中央部北東側の平坦地と、それぞれ大きく4グループの領域に分けられている。いずれも住居跡群は重

複あるいは隣接している。土壤群は、大きく3タイプに分類される。Aタイプの土壤は①領域と②領域の中間地帯と③領域の中間地帯にそれぞれ分布し、Bタイプ土壤は①領域と②領域にそれぞれ分布している。この時期の住居跡や土壤は、環状に集落を形成し、中央部付近の空間地帯は、中央広場の性格が強いと考えられる。

## (2) 遺物について

出土した土器は、第I群土器から第III群土器まで時期別に分け、さらに描出された文様や施文技法によってさらに分類した。分類した土器の時期は次の通りである。

第I群土器は、a類からd類に分類し、a類では半截竹管や竹管によって円文やコンパンス文を描出しており、b類ではヘラ状工具の先端を利用して連続する小刺突文で、その集合として文様を描き、c類は羽状繩文を施し、d類はループ文の各種原体を施文している。とくにa類やd類の文様構成などは、関東地方の「黒浜式」に対比される。第I群土器の時期は、縄文時代前期大木1式になる。

第II群土器は、a類からf類に分類した。とくにf類については1片出土したのみで本群に付した。f類の土器は縄文時代中期大木8a式に対比される。

a類は、竹管による沈線によって施され、平行線や区画文を描出している。b類は半截竹管による連続瓜形文を口縁部に平行に施している。c類はb類同様の半截竹管の施文具で、刺突状に押しつけて、瓜形状に文様を描出する。d類は縄文圧痕を主とするものである。e類は、土器の器面全体に口縁部から底辺部にかけ、S字結束を原体とし施文している。

第II群土器は、縄文時代中期大木7b式に比定される。とくにb類土器やc類土器の文様構成は、北陸地方の「新崎式」や中部地方の「梨久保式」に共通している。

第III群土器は、a類からf類に分類した。a類は沈線で稍円文を区画とする磨消繩文となり文様構成は縦位方向にみられる。b類はa類に共通する文様構成となり、棒状工具a先端部を使用して、区画外側に列点を施している。c類は、縦位方向のS字状文やC字状文が連続して横位方向の文様構成となっている。d類は沈線で施された部分が微隆起状となり、曲線的なC字状文となり文様構成は横位方向に展開している。e類は粘土の帯状と貼付して沈線で側縁を施文して、微隆起状となる。f類は地文を繩文として器面全体に施し、羽状に施している土器もある。なおc類からe類は充填繩文が主となっている。

第III群土器は、a類土器・b類土器は縄文時代中期大木9b式に比定され、c類土器からf類土器は大木10式に比定される。

出土した石器は、手製石器ではその大半が縄文時代前期の時期が多く、特に範状石器の中でもトランシェ様式の石器が出土していることは、特徴的である。

# 図 版



遺跡遠景（東から）



遺跡近景（東から）



A地区遺構確認状況（南半部）



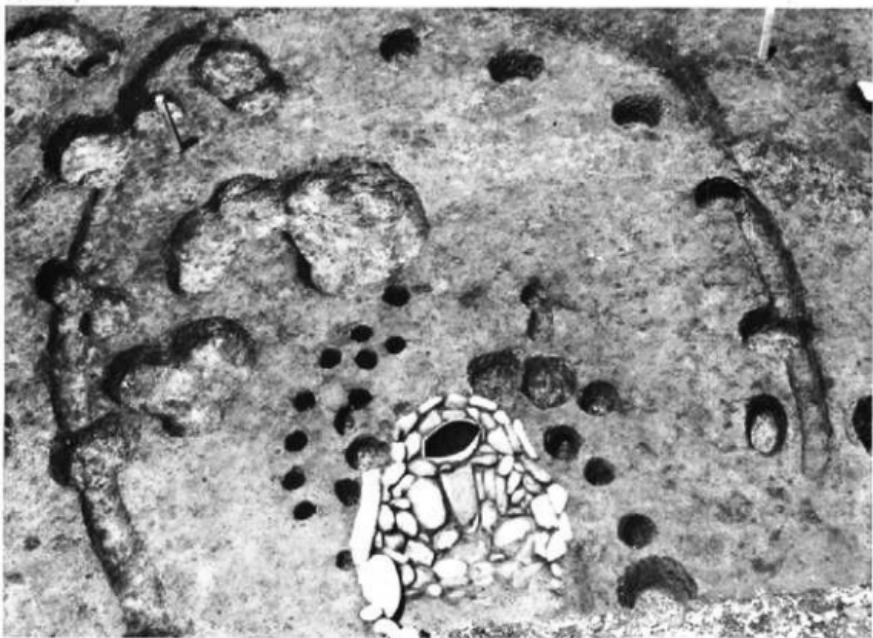
A地区遺構確認状況（北半部）



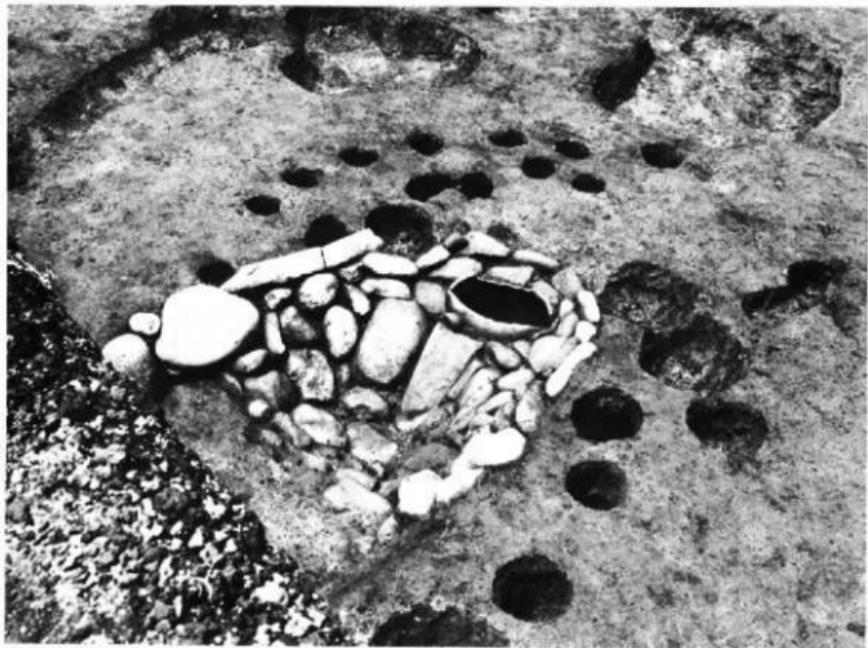
1 · 2 · 7 · 11 · 32 · 33号住居跡・38号土壤全景



1号住居跡全景



1号住居跡



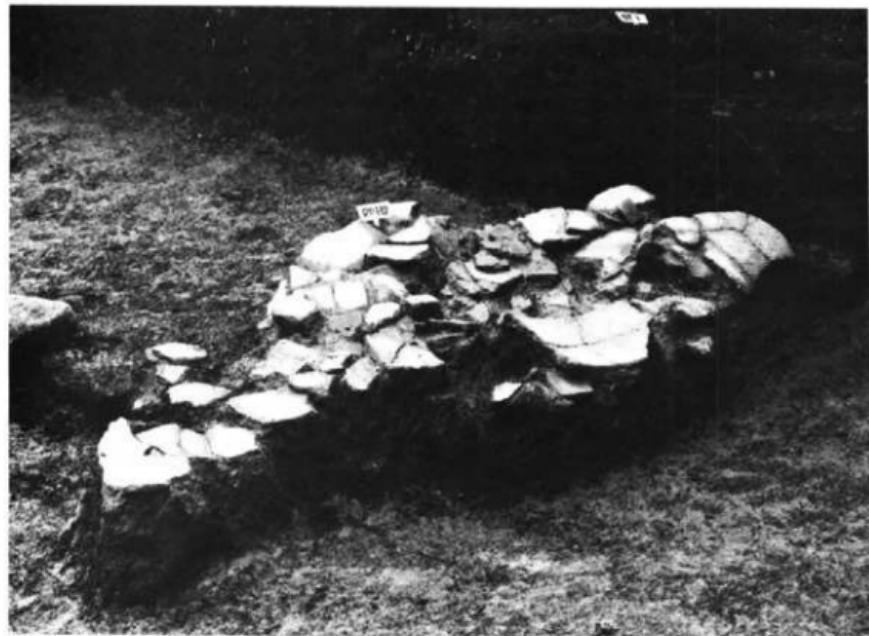
E L31



E L 31土層セクション



E L 31埋設土器部土層セクション



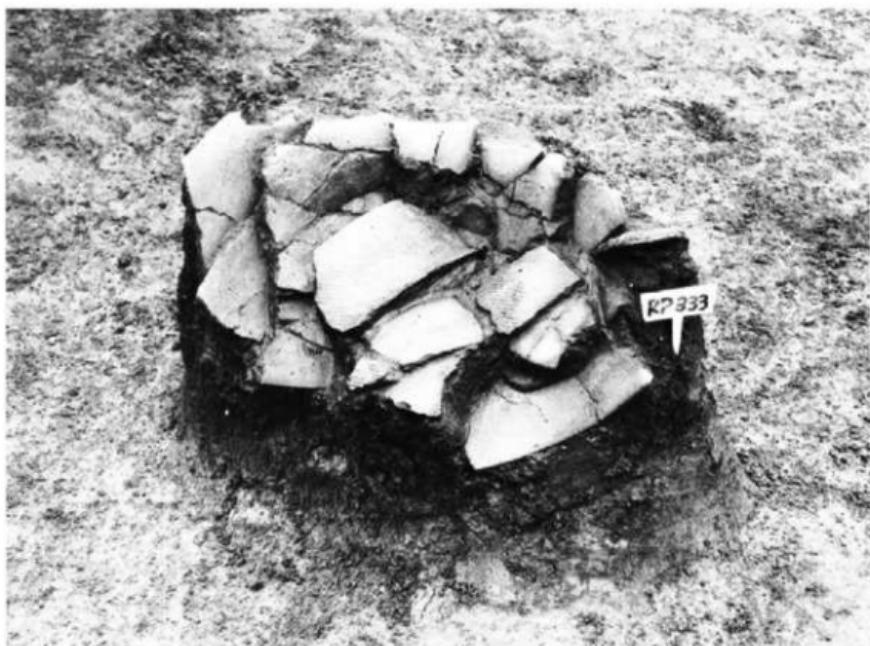
1号住居跡内一括土器（R P 332）出土状況



1・2号住居跡精査風景



3·4号住居跡・36·37号土墳全景



3号住居跡内一括器 RP 333 出土状況



2・11号住居跡・38号土壤



2号住居跡精査風景



7・32・34号住居跡

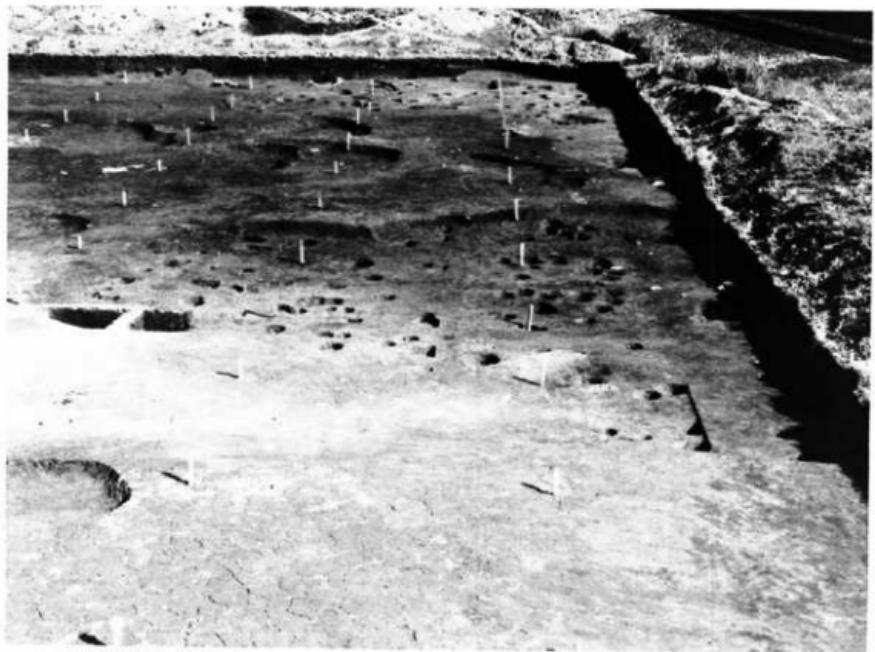


32・34号住居跡

图版10



5~6号住居跡全景



25~30号住居跡全景



49・51号住居跡・60号土壙全景



49・51号住居跡

図版12



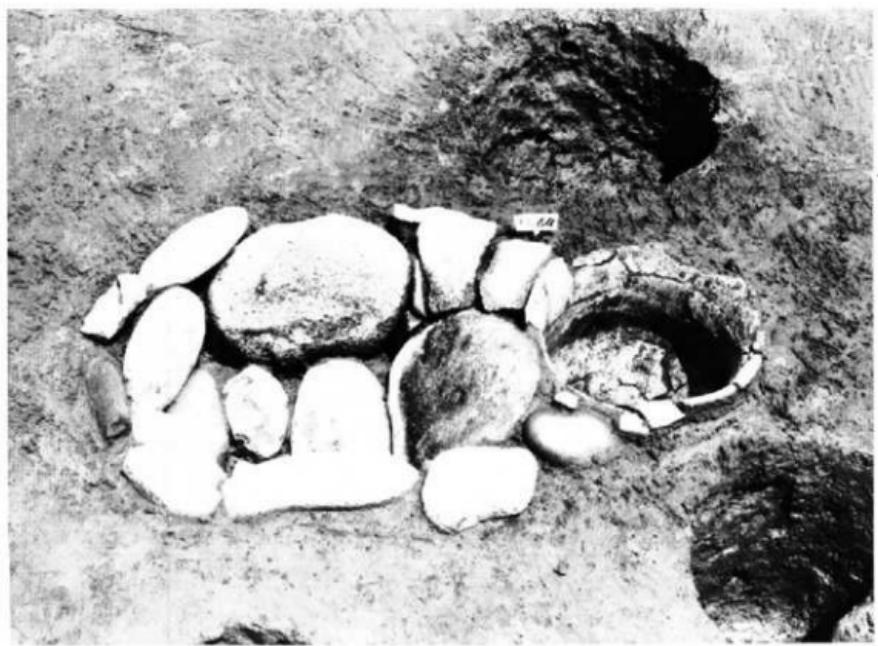
52~56号住居跡・57・58号土壤全景



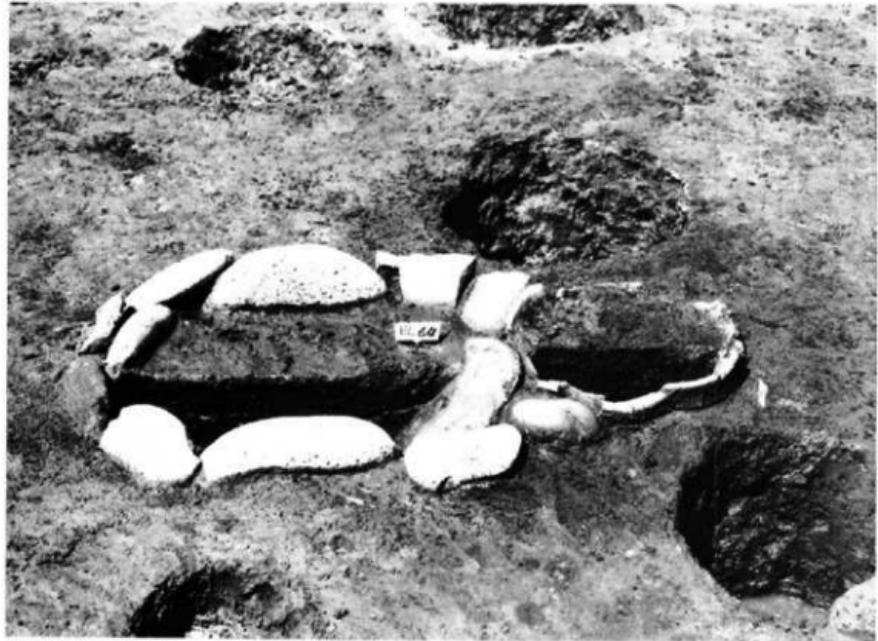
53~55号住居跡



E L 64 (53号住居跡内) 全景



E L 64



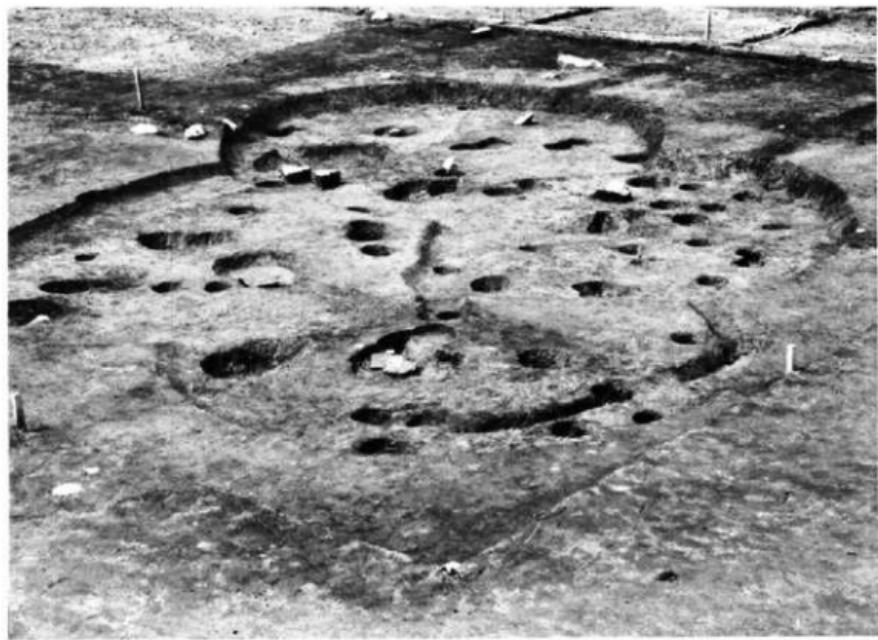
E L 64 土層セクション



53号住居跡内一括土器（R P 533）出土状況



59～62号住居跡・65土壤全景



59～62号住居跡



59·60·61号住居跡



61·62号住居跡



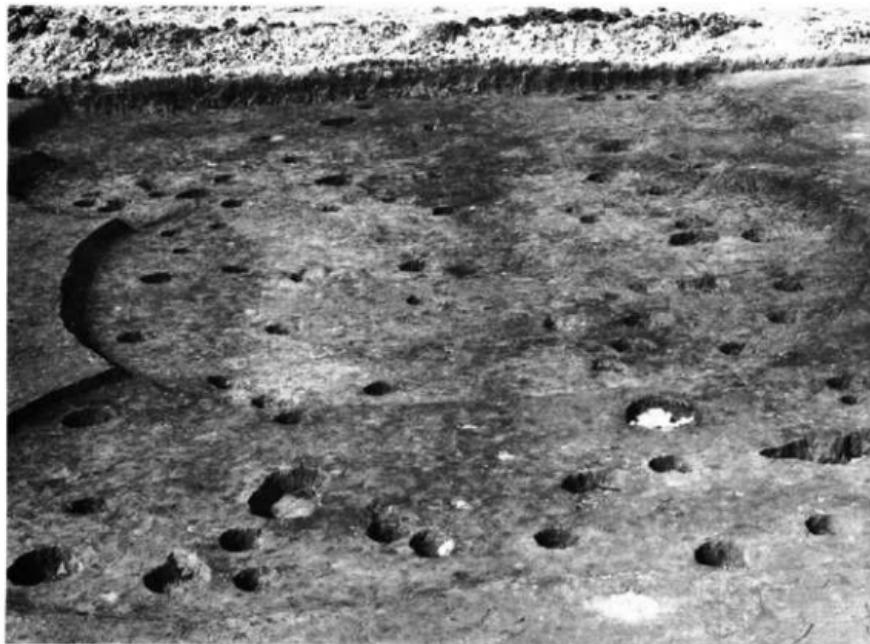
61号住居跡内一括土器（R P 538）出土状況



A 地区発掘調査状況



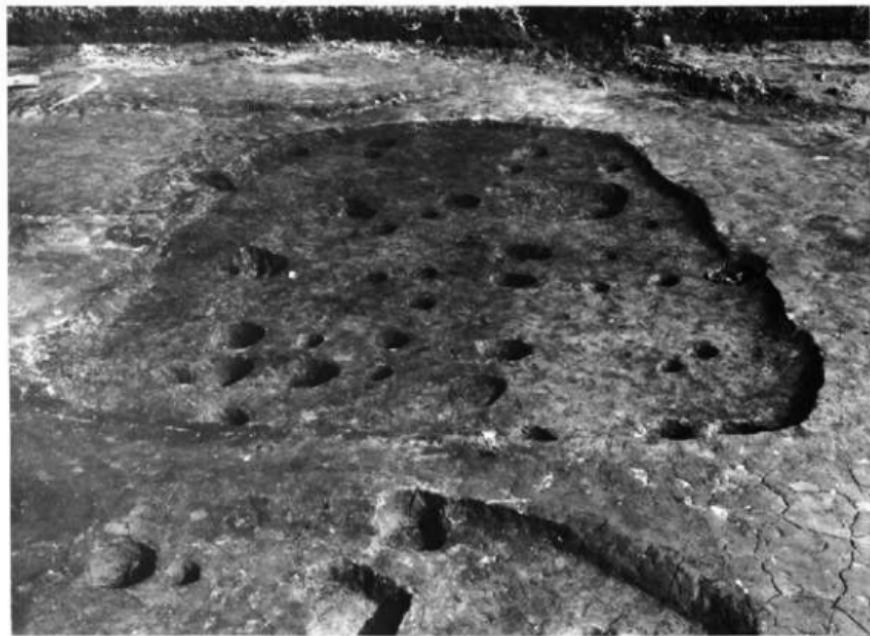
66~69号住居跡全景



66・69号住居跡



70号住居跡全景



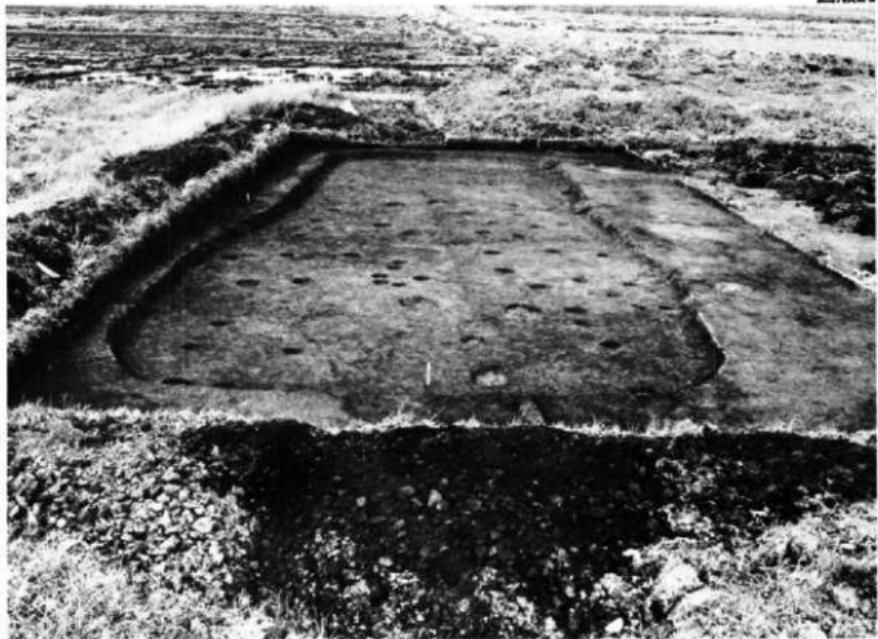
70号住居跡



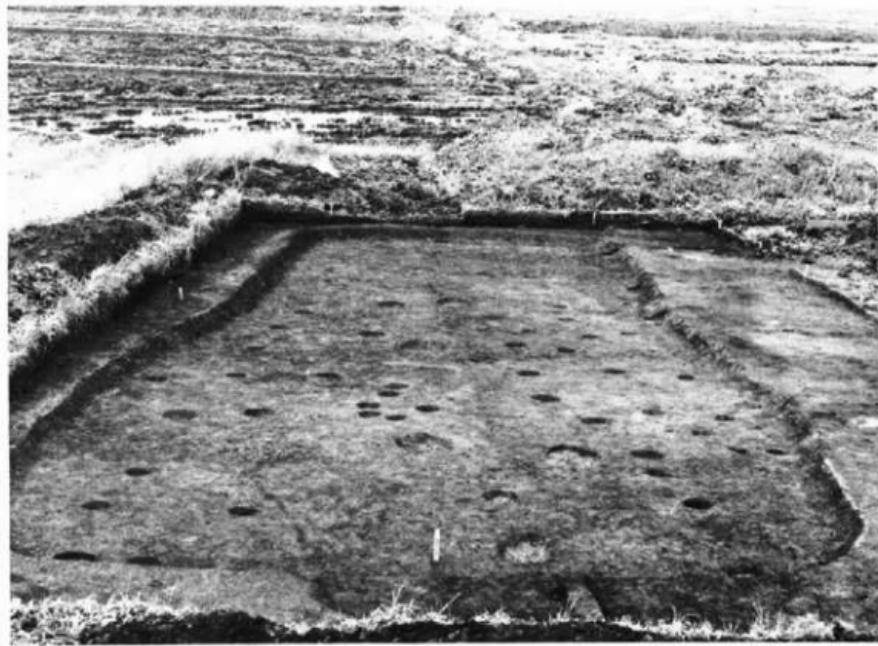
70号住居跡内埋設土器出土状況



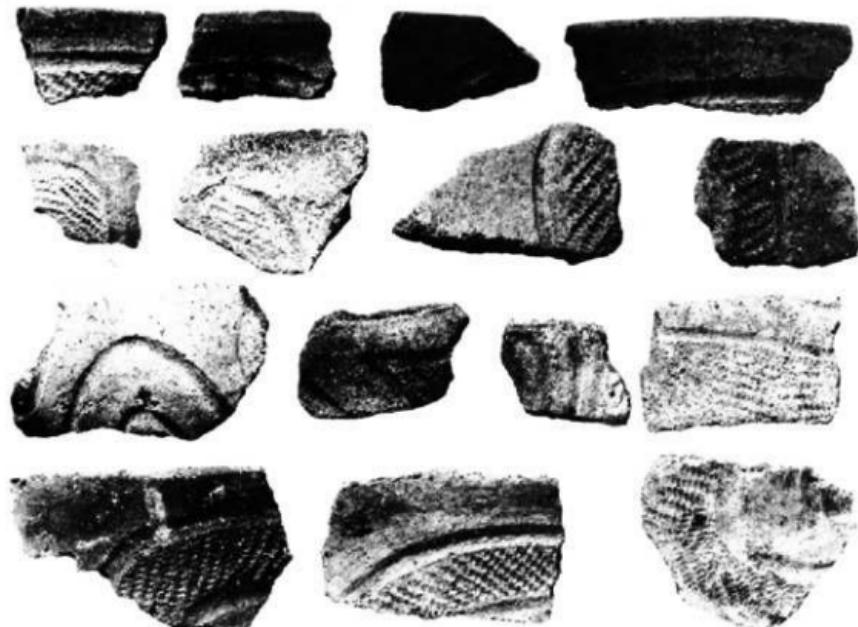
E L 71 (70号住居跡内)



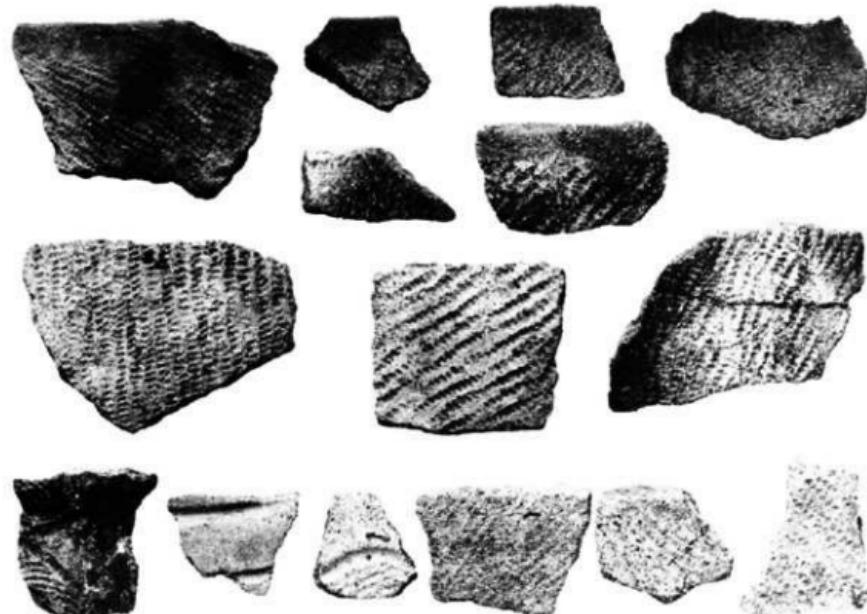
73号住居跡



73号住居跡



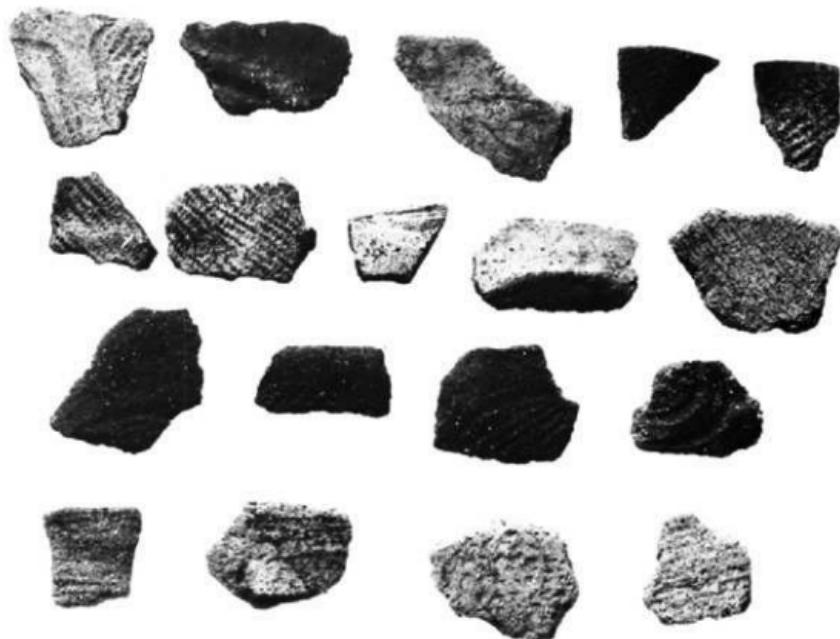
1号住居跡出土土器（覆土）



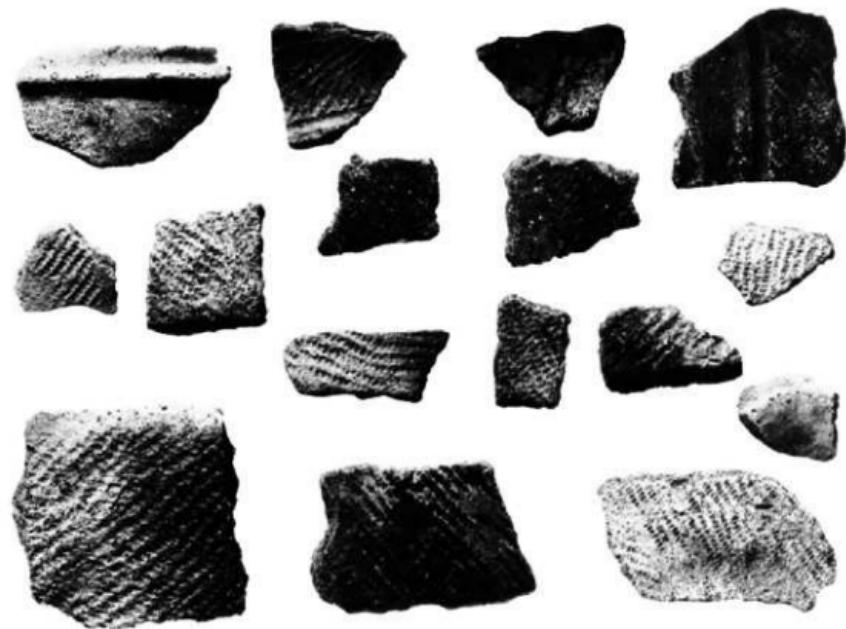
1号住居跡出土土器（床面）



2号住居跡出土土器



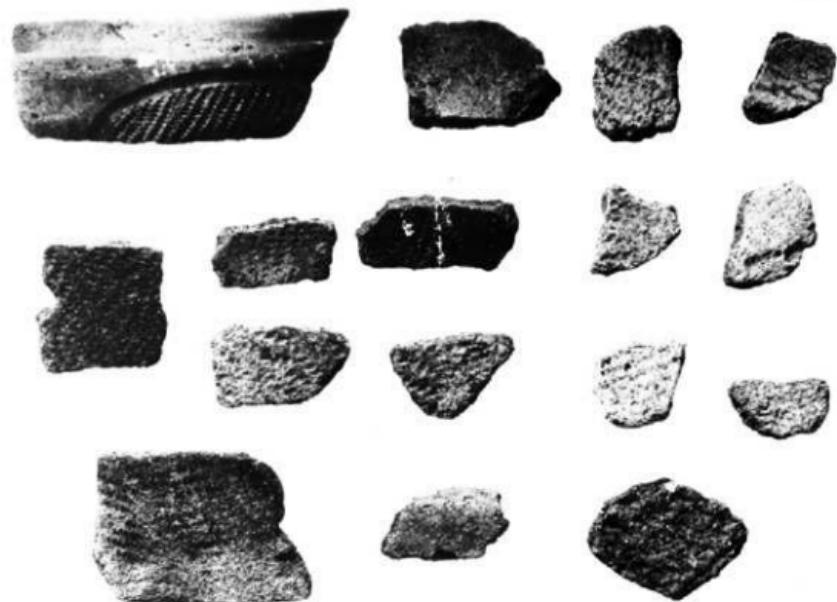
3·4·5号住居跡出土土器



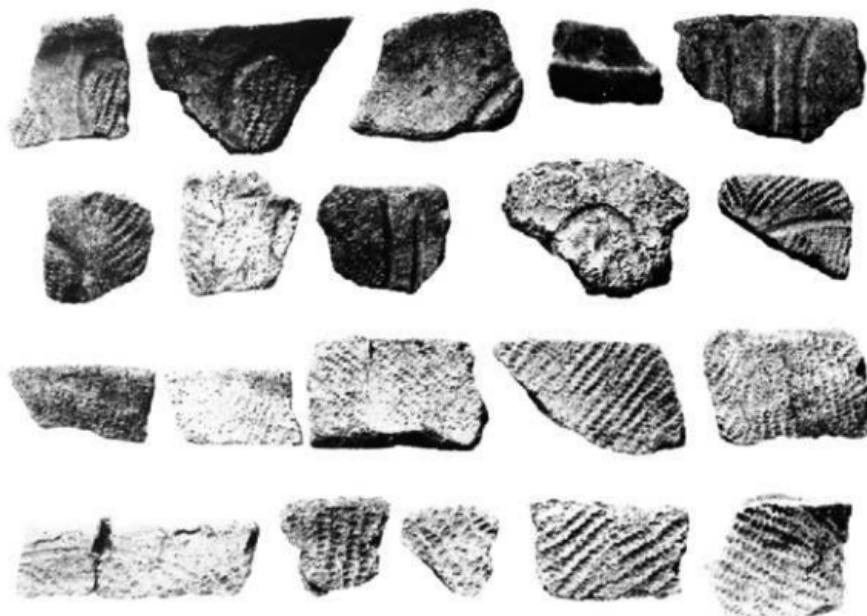
7号住居跡出土器



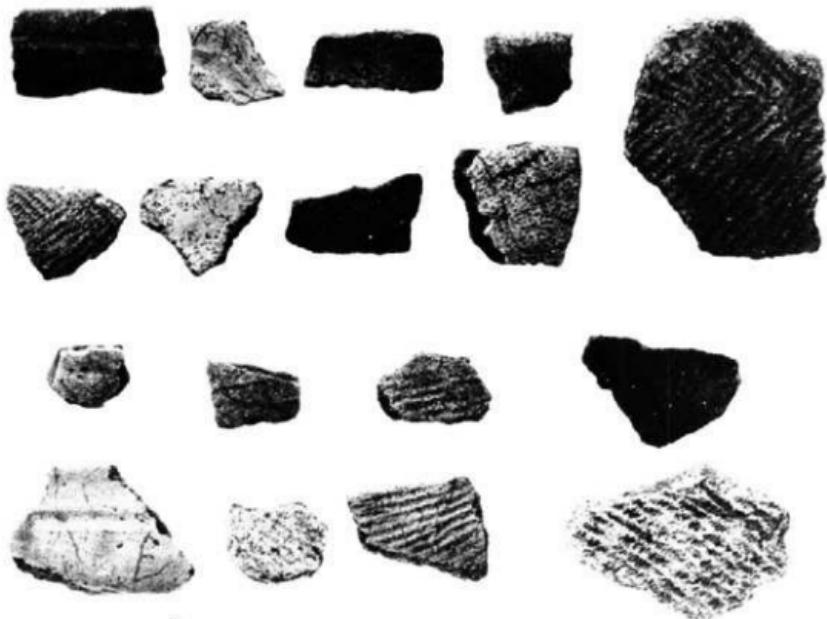
25・26・28・32・33号住居跡出土土器



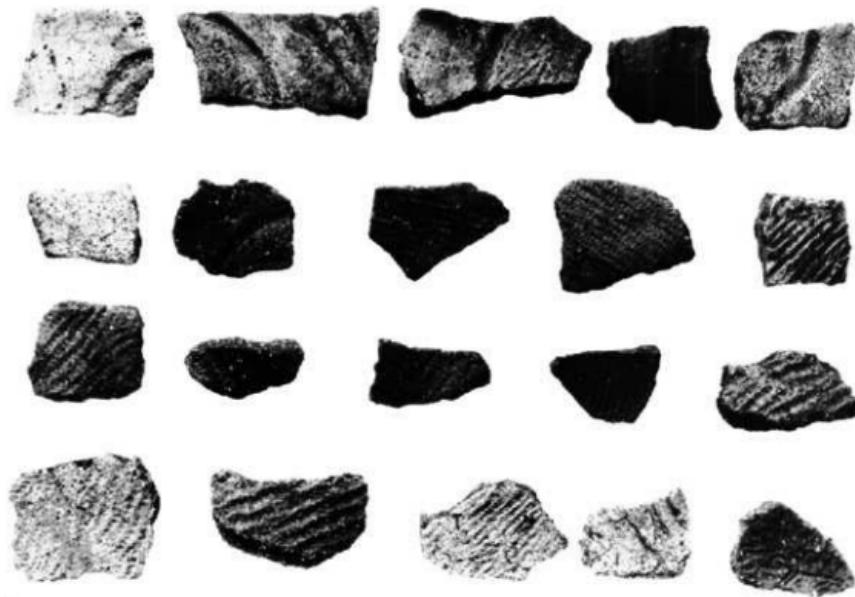
51号住居跡出土土器



52号住居跡出土土器



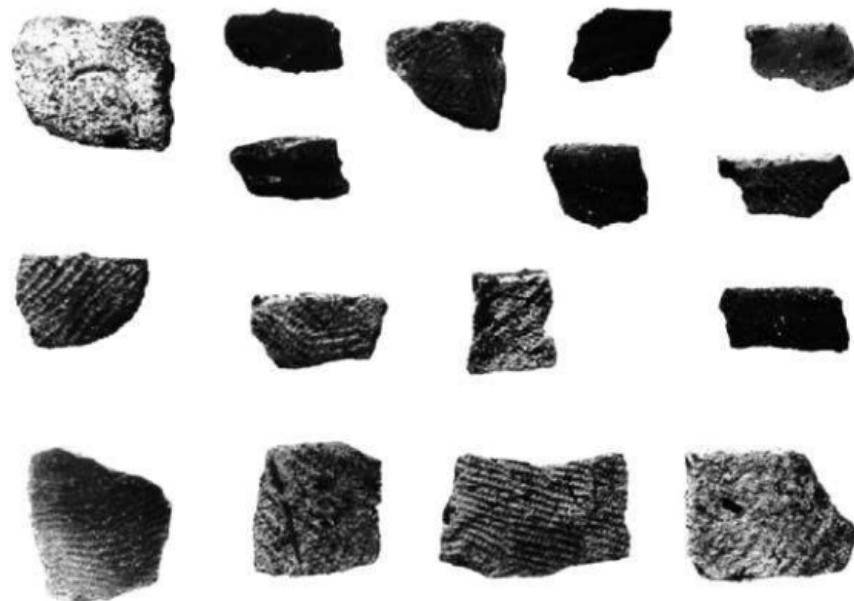
53~55号住居跡出土土器



60号住居跡出土土器



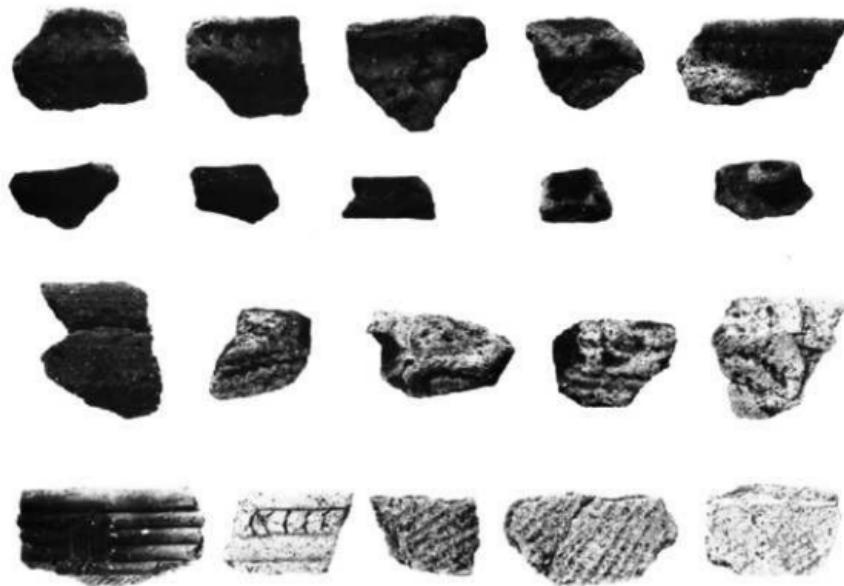
61号住居跡出土土器



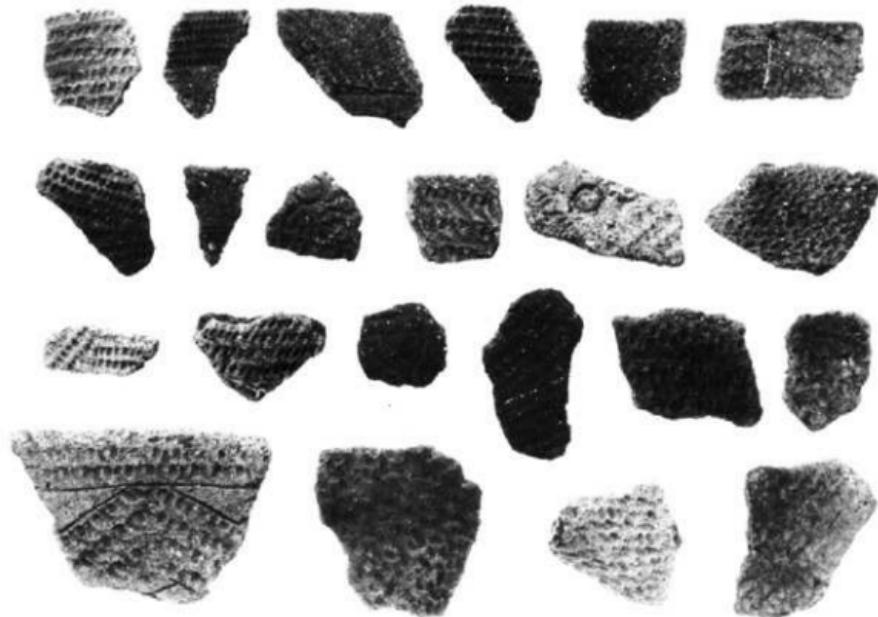
62号住居跡出土土器



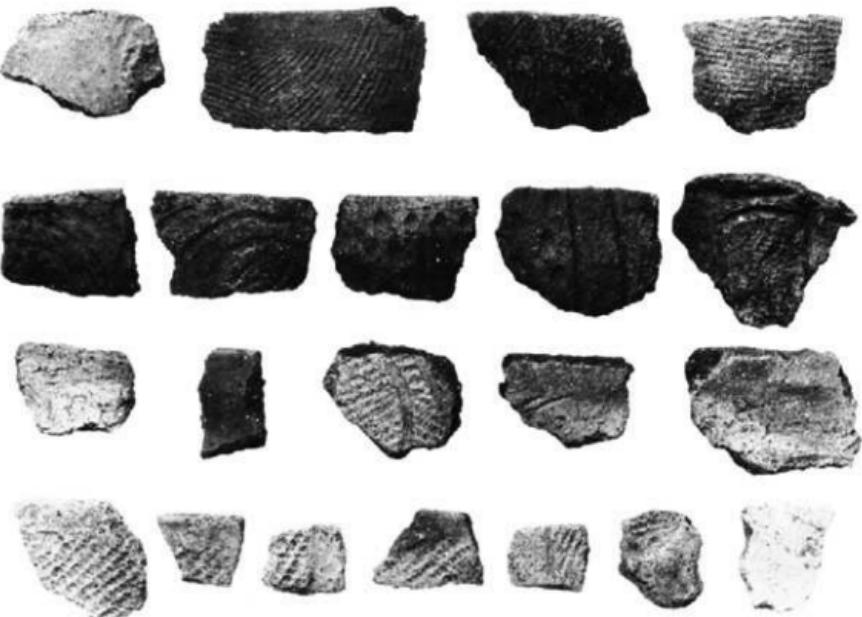
66·69号住居跡出土土器



70号住居跡出土土器



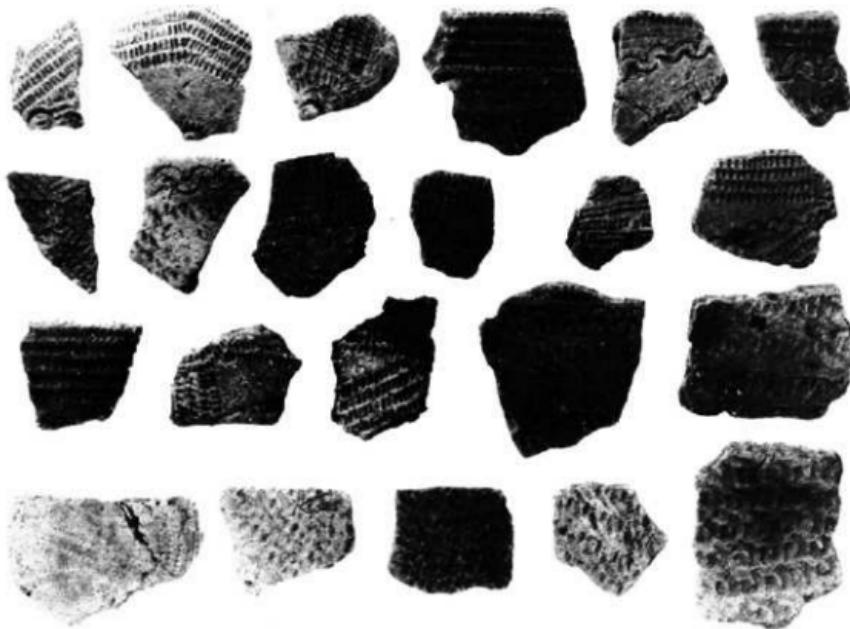
73号住居跡出土土器



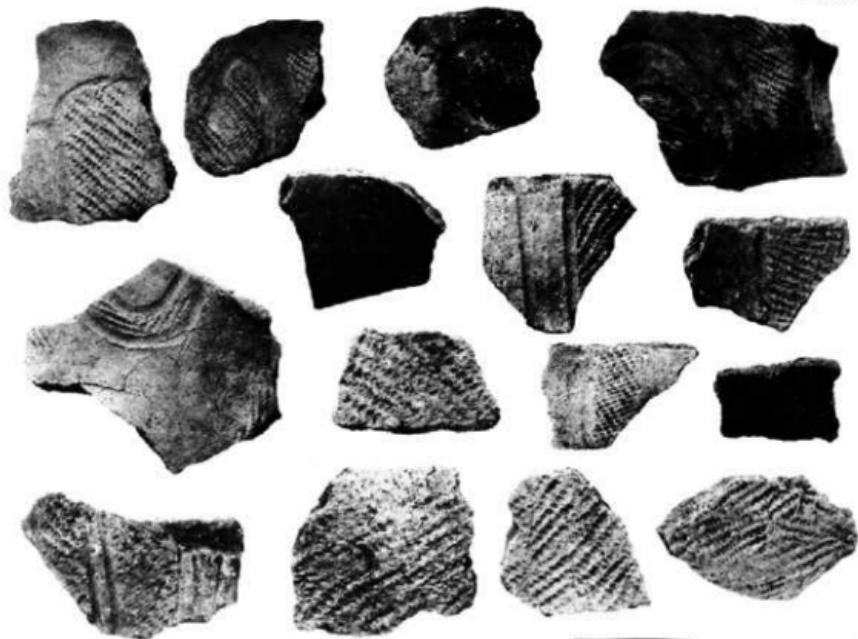
2・8・9・11号土壤出土土器



15・20・21・43号土壤出土土器



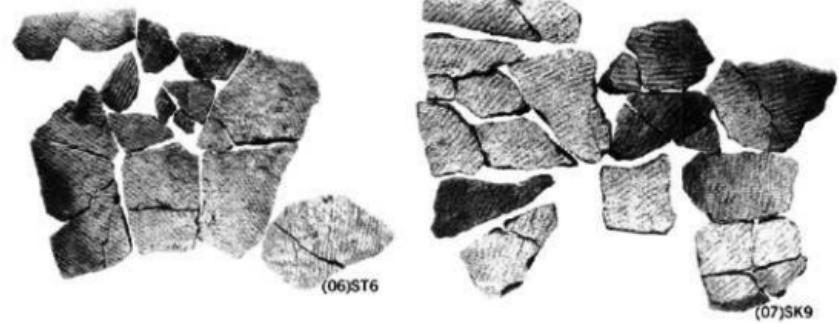
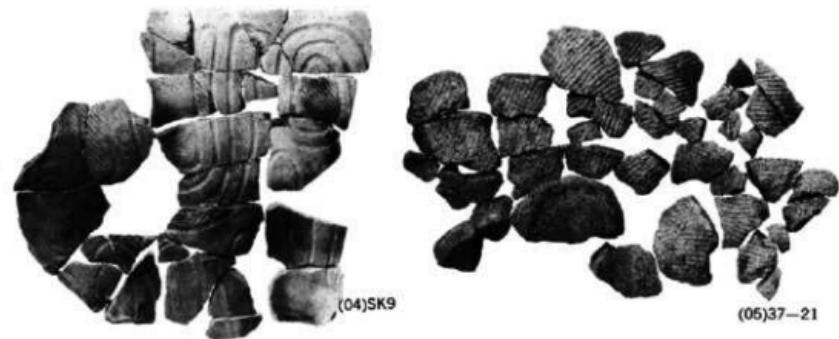
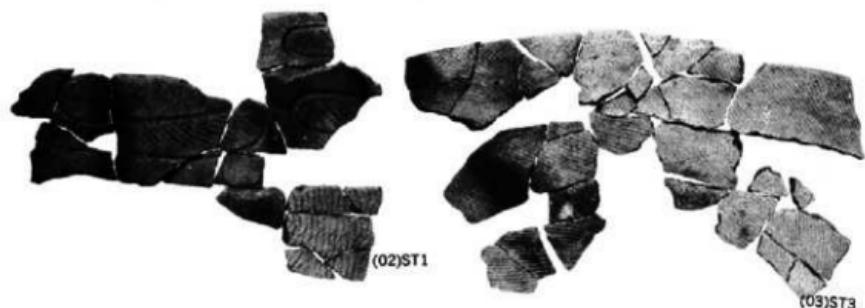
包含層出土土器（第1群土器）

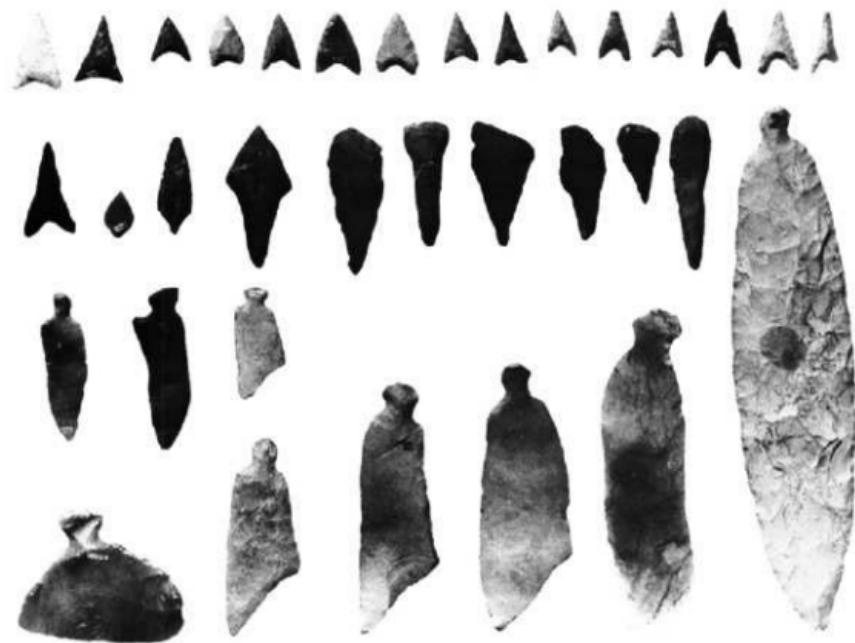
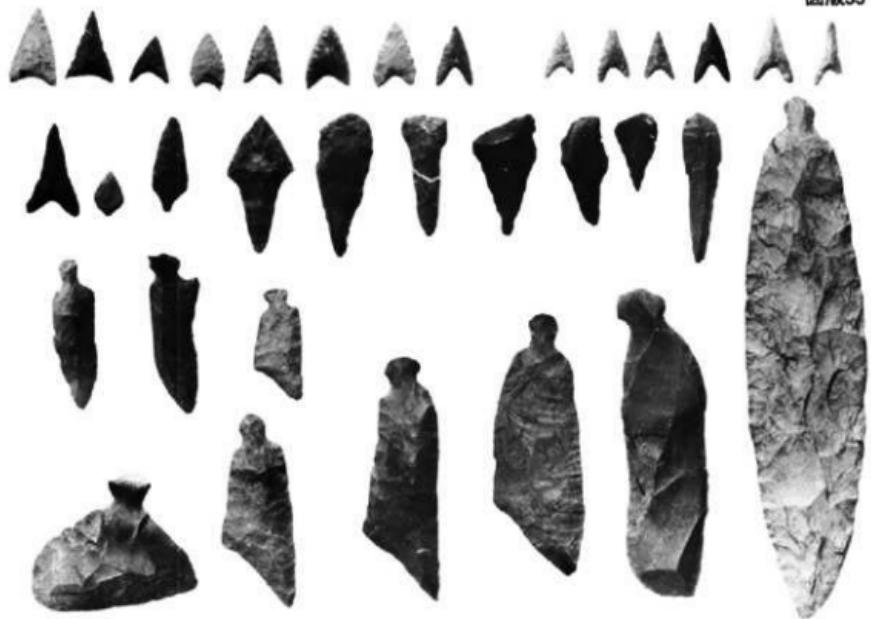


包含層出土土器（第II・Ⅲ群土器）

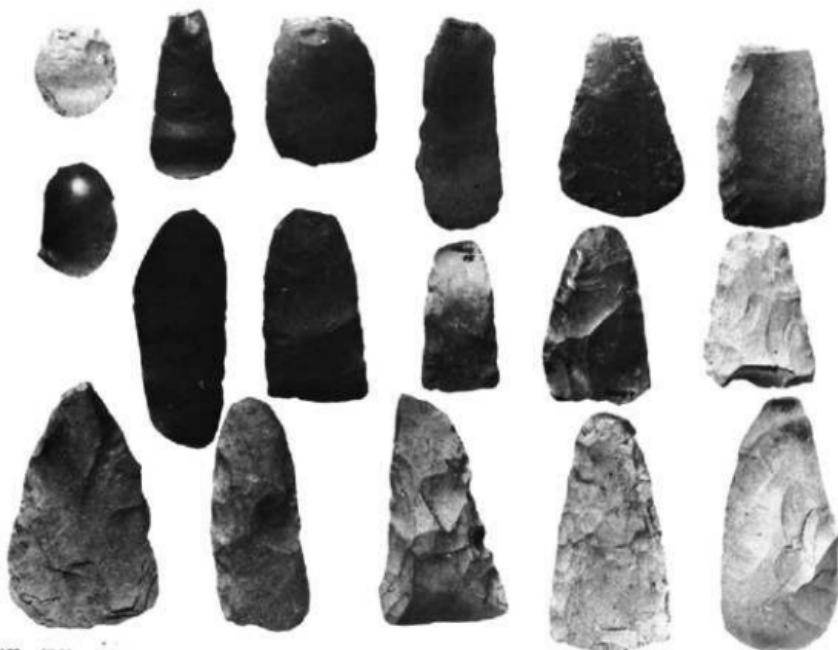
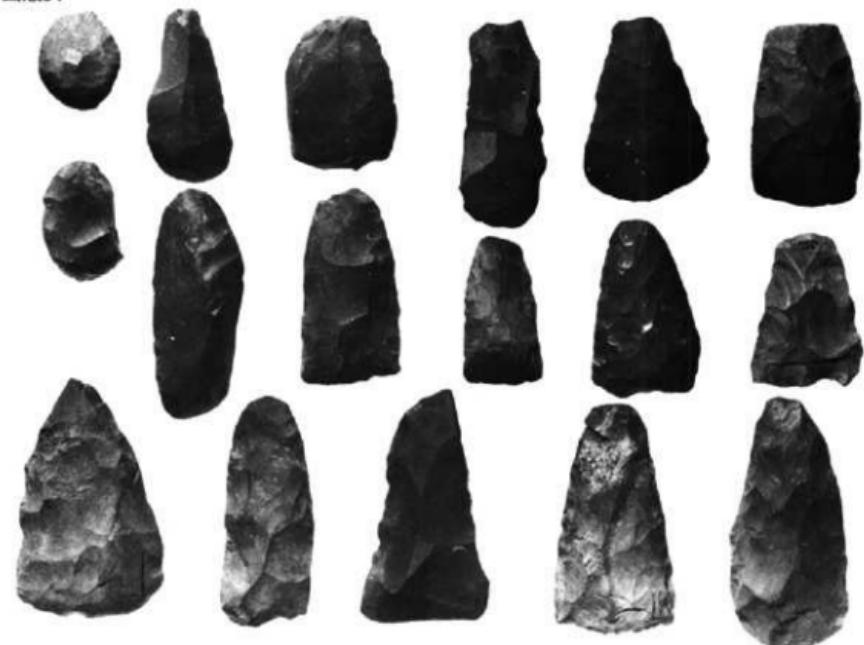


一括土器（1）

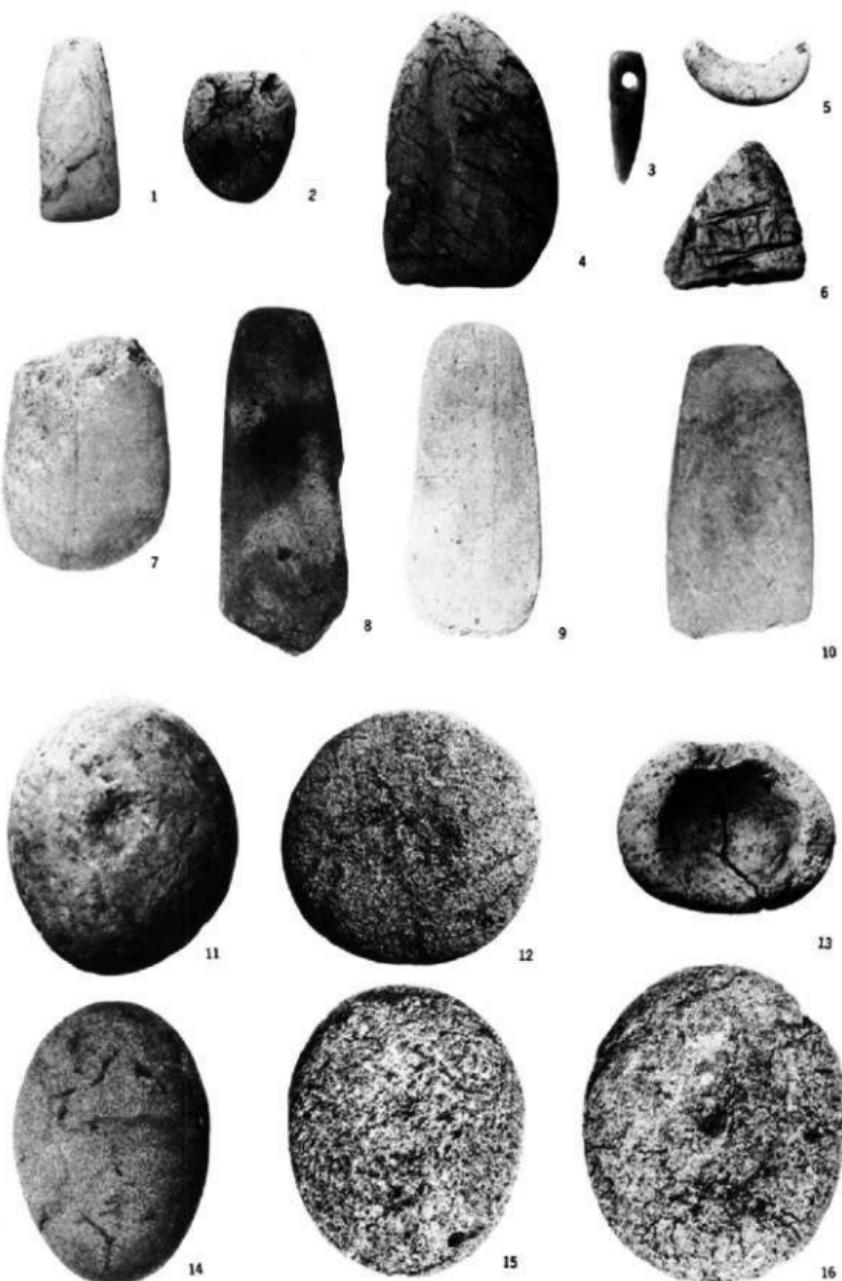


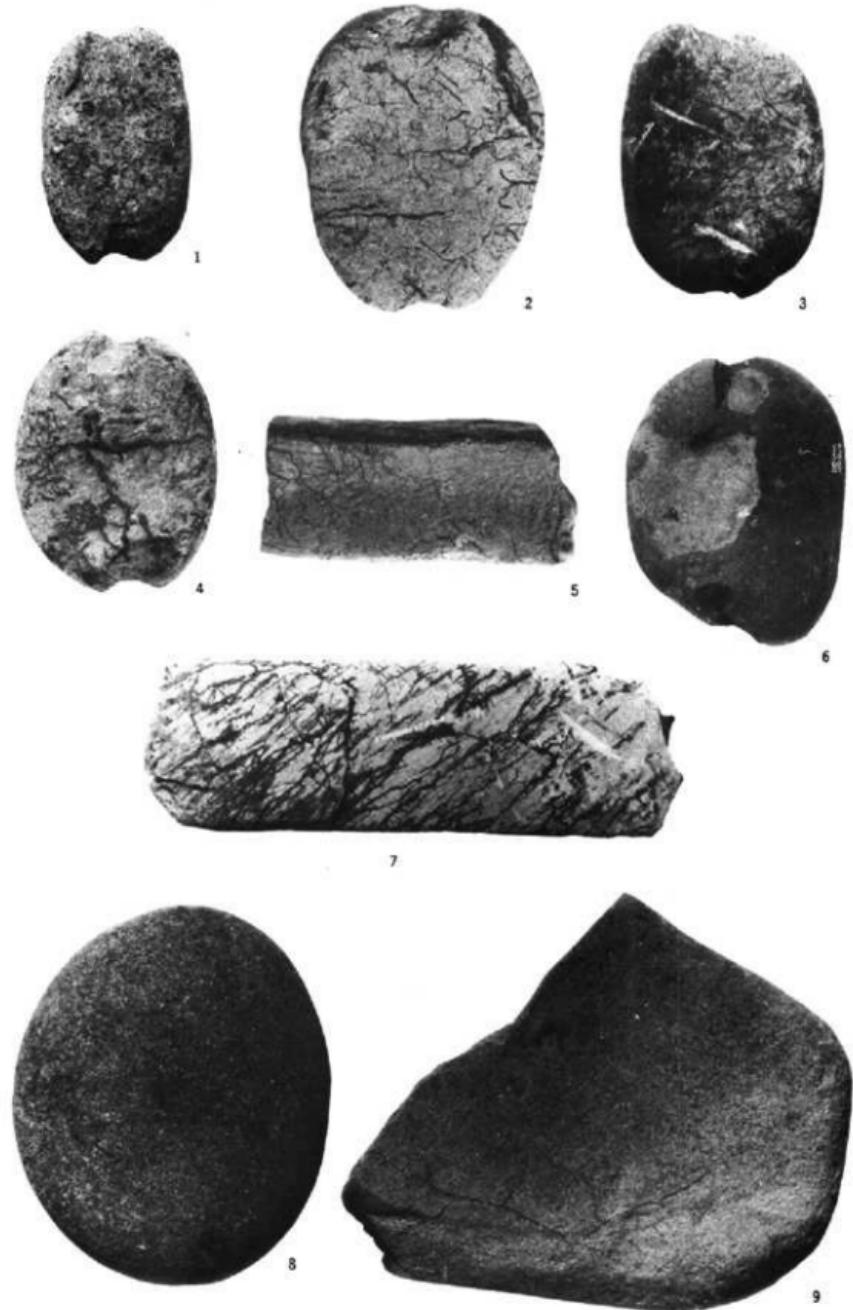


石鎌・石錐・石匙



削器・撲器・範状石器





---

山形県埋蔵文化財調査報告書第58集

はか くぼ  
墓 窟 遺 跡

—発掘調査報告書—

昭和57年3月25日 印刷

昭和57年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会  
印刷 大風印刷

---